

蒲田・水ヶ元遺跡

—九州自動車道福岡インターチェンジ東隣
(株)駒井鉄工所用地の調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集

付録 1. 香椎A遺跡第1次調査

2. 梅ヶ崎遺跡

3. 博多遺跡群第23次調査



1996

福岡市教育委員会
蒲田・水ヶ元遺跡調査会

蒲田・水ヶ元遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第491号

正 誤 表

頁	正	誤
挿図目次	Fig. 21-1 第10・11・14号住居址内出土上器 実測図(縮尺1/5)	Fig. 21-1 第14号住居址実測図(縮尺1/100)
"	Fig. 21-2 第14号住居址実測図(縮尺1/100)	Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土上器 実測図(縮尺1/5)
"	Fig. 122 第17・20・32号壺棺実測図 (縮尺1/12)	Fig. 122 第5・7・8号壺棺実測図(縮尺1/12)
"	Fig. 124 第5・7・8号壺棺実測図(縮尺1/12)	Fig. 124 第17・20・32号壺棺実測図 (縮尺1/12)
35	Fig. 21-1 第10・11・14号住居址内出土上器 実測図(縮尺1/5) 1~3(J10), 4(J11)	Fig. 21-1 第14号住居址実測図(縮尺1/100)
"	Fig. 21-2 第14号住居址実測図(縮尺1/100)	Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土上器 実測図(縮尺1/5) 1~3(J10), 4(J11)
50	Tab. 6 説明項目Fig. の覧「21-1」	Tab. 6 説明項目Fig. の覧「21-2」
75	Fig. 122 第17・20・32号壺棺実測図 (縮尺1/12)	Fig. 122 第5・7・8号壺棺実測図 (縮尺1/12)
"	Fig. 124 第5・7・8号壺棺実測図 (縮尺1/12)	Fig. 124 第17・20・32号壺棺実測図 (縮尺1/12)
87	Fig. 139 鉄器・青銅器実測図(縮尺1/5) 1(J7), 2(J10), 3(J13), 4(J16), 5・6(J17), 7(J21), 8(J25), 9(Fn-11西), 10(青銅器, J28と J29の間)	Fig. 139 鉄器・青銅実測図(縮尺1/5)

蒲田・水ヶ元遺跡

—福岡市東区大字蒲田字水ヶ元
(株)駒井鉄工所用地の調査—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第491集

- 付録 1. 香椎A遺跡第1次調査
2. 梅ヶ崎遺跡
3. 博多遺跡群第23次調査

1996

福岡市教育委員会
蒲田・水ヶ元遺跡調査会

序 文

福岡市はアジアに開かれた拠点都市をめざし都市基盤整備を進めております。その認識は大陸との国際交流の証である志賀島出土の「金印」や鴻臚館跡など、現代に継承される歴史的文化遺産にある事は言うまでもありません。

都市基盤整備の第一歩は大規模交通網の整備としての新幹線「博多」乗り入れ、さらには九州自動車道の「福岡インターチェンジ」の開設にありました。それらの事業と併行して進められていたのが、福岡北九州高速道路の建設でした。

昭和50年、福岡北九州高速道路の用地買収に応じられ移転先を蒲田の地に求められたのが株式会社駒井鉄工所様であります。蒲田遺跡は福岡市東部にあって重要な遺跡という認識のもとに様々な手立てを考え、文化庁、福岡県のご指導、特に福岡県文化課長故藤井功様の心暖まるご指導で調査会の発足を見た訳であります。

遺跡は方格規矩鏡など貴重で意義のある文物を提供してくれました。これも一重に関係各位のみなさま、とくに駒井鉄工所の財部様、故人となられた当時の福岡県文化課長藤井様のご指導、ご協力のおかげと感謝申し上げる次第であります。

遅きに失した感を拭えませんが、調査後20年の歳月を得、ここに報告書の完成を見ました。各方面でご活用頂きますことをお願い申し上げご挨拶といたします。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾 花 剛

例 言

1. 本報告書は、福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第491集である。
2. 本報告書は、蒲田水ヶ元遺跡の発掘内容を主体とし、付録として、香椎A遺跡第1次調査、梅ヶ崎遺跡、博多遺跡群第23次調査を収録している。
3. 各遺跡の記号は、次のとおり
蒲田水ヶ元-「KMT」、香椎A 1次-「KSA-1」
梅ヶ崎-「UGS」
博多23次-「HKT-23」
4. 各遺跡の調査番号は次のとおり
蒲田水ヶ元-7514、香椎A 1次-8451
梅ヶ崎-8444
博多23次-8334
5. 福岡市文化財分布地図における各遺跡の登載記号は次のとおり
蒲田水ヶ元-「002-A-2」、香椎A 1次-「017-A-1」
梅ヶ崎-「029-A-2」
博多23次-「049-A-1」
6. 各遺跡の調査年月日は次のとおり
蒲田水ヶ元-昭和51年1月6日～昭和51年8月31日
香椎A 1次-昭和59年4月30日～昭和59年5月31日
梅ヶ崎-昭和59年5月8日～昭和59年6月10日
博多23次-昭和59年2月1日～昭和59年2月28日
7. 各遺跡の調査面積は次のとおり
蒲田水ヶ元-約9,500m²、香椎A 1次-約600m²
梅ヶ崎-約300m²
博多23次-約150m²
8. 本報告書の編集は、濱石正子（小沢）と石井美土里（坂田）の助言を得て、折尾學が行なった。
9. 報告書の執筆は各地点の住居址と住居址内出土土器の説明を濱石正子と石井美土里、他を折尾が行った。
10. 本報告書の図版、表等の作成は、濱石正子、石井美土里、武藤和子（高橋）、池崎温子（市来）、三沢京子（須賀）、Fig.132を二宮忠司が行なった。
11. 本報告に關係する資料は、福岡市埋蔵文化財センターにて保管している。

本文目次

1. 位置と環境	6
2. 調査経過	8
3. 遺跡の概要	10
4. 第Ⅰ地点の調査	11
① 第Ⅰ地点の概要	13
② 住居址	13
③ その他の遺構	19
5. 第Ⅱ地点の調査	20
① 第Ⅱ地点の概要	22
② 住居址	22
③ 環濠	31
6. 第Ⅲ地点の調査	59
① 第Ⅲ地点の概要	60
② 方形周溝遺構	60
7. 第Ⅳ地点の調査	62
① 第Ⅳ地点の概要	64
② 住居址	65
③ その他の遺構	66
④ 妻棺墓	67
⑤ 妻棺墓群に伴う祭祀遺構	73
⑥ 繩文時代の遺構	73
8. その他の遺物	83
ナイフ形石器と石鎌と縄文式土器	84
石斧	84
石庖丁	84
砥石	84
鉄器と青銅器（金属器）	84
ガラス玉	84
鏡	84
付録 1. 香椎A遺跡第1次調査	89
2. 梅ヶ崎遺跡	93
3. 博多遺跡群第23次調査	97

挿図目次

Fig. 1 若杉山から蒲田水ヶ元遺跡を望む (Ph.1)	6	Fig. 29 第17号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	38
Fig. 2 蒲田・水ヶ元とその周辺 (縮尺1/25,000)	7	Fig. 30 第17号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	38
Fig. 3 蒲田水ヶ元遺跡全体図 (縮尺1/1,000)	9	Fig. 31 第18号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	39
Fig. 4 第I地点遠景 (Ph.2)	11	Fig. 32 第19号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	39
Fig. 5 第I地点遺構配図 (縮尺1/400)	12	Fig. 33 第19号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	39
Fig. 6 第1号住居址実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 34 第20・21号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	39
Fig. 7 第2号住居址実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 35 第23号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	39
Fig. 8 第3号住居址実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 36 第33号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	39
Fig. 9 第4号住居址実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 37 第26号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 10 第1号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 38 第27号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 11 第2号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 39 第31号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 12 第3号掘立柱遺構実測図 (縮尺1/100)	12	Fig. 40 第35号住居址・土壤内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 13 第1号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/5)	14	Fig. 41 第28号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 14 第2号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/5)	14	Fig. 42 第32号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 15 第3号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/5)	14	Fig. 43 第37号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	40
Fig. 16 第II地点航空写真 (西側) (Ph.5)	20	Fig. 44 第30・34・36号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	41
Fig. 17 第II地点遺構配図 (縮尺1/400)	21	Fig. 45 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	41
Fig. 18 第10号住居址実測図 (縮尺1/100)	35	Fig. 46 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	41
Fig. 19 第11号住居址実測図 (縮尺1/100)	35	Fig. 47 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	41
Fig. 20 第12・13号住居址実測図 (縮尺1/100)	35	Fig. 48 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	42
Fig. 21-1 第14号住居址実測図 (縮尺1/100)	35	Fig. 49 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	42
Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/5)	35	Fig. 50 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	42
Fig. 22 第15・16・17号住居址実測図 (縮尺1/100)	35	Fig. 51 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	42
Fig. 23 第15号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	37	Fig. 52 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	43
Fig. 24 第15号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	37	Fig. 53 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	43
Fig. 25 第15号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	37	Fig. 54 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)	43
Fig. 26 第16号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	37	Fig. 55 環濠土層セクション図 (縮尺1/20)	44
Fig. 27 第17号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	38	Fig. 56 第18号住居址実測図 (縮尺1/100)	45
Fig. 28 第17号住居址内出土土器実測図 (縮尺1/6)	38	Fig. 57 第19号住居址実測図 (縮尺1/100)	46

Fig. 57' 第20号住居址実測図（縮尺1/100）	46	Fig. 88 第4号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	68
Fig. 58 第21号住居址実測図（縮尺1/100）	46	Fig. 89 第5号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	68
Fig. 59 第23号住居址実測図（縮尺1/100）	46	Fig. 90 第6号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	68
Fig. 60 第24・25号住居址実測図（縮尺1/100）	47	Fig. 91 第7号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	68
Fig. 61 第26・27・33号住居址実測図（縮尺1/100）	47	Fig. 92 第8号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	68
Fig. 62 第31号住居址実測図（縮尺1/100）	47	Fig. 93 第9号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	69
Fig. 63 第35号住居址と土壤実測図（縮尺1/100）	47	Fig. 94 第11号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	69
Fig. 64 第28・29・32・37・38号住居址実測図（縮尺1/100）	48	Fig. 95 第12号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	69
Fig. 65 第22・30・34・36号住居址実測図（縮尺1/100）	49	Fig. 96 第14号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	69
Fig. 66 環濠実測図（縮尺1/80）	49	Fig. 97 第13号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	70
Fig. 67 第III地点遠景（Ph.14）	59	Fig. 98 第10号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	70
Fig. 68 第III地点遺構配置図（縮尺1/500）	60	Fig. 99 第15号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	70
Fig. 69 第1号方形周溝実測図（縮尺1/100）	60	Fig. 100 第16号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	70
Fig. 70 第1号方形周溝内出土物出土状況実測図（縮尺1/20）	60	Fig. 101 第17号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 71 第1号方形周溝内出土物出土状況（Ph.15）	60	Fig. 102 第18号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 72 第2号方形周溝実測図（縮尺1/100）	61	Fig. 103 第19号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 73 第1・2号方形周溝内出土土器実測図（縮尺1/6）	61	Fig. 104 第20号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 74 第1号方形周溝内出土石器実測図（縮尺1/4）	61	Fig. 105 第21号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 75 第IV地点遠景（東南から）（Ph.16）	62	Fig. 106 第22号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 76 第IV地点遺構配置図（縮尺1/500）	63	Fig. 107 第23号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 77 第5号住居址実測図（縮尺1/100）	63	Fig. 108 第24号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 78 第5号住居址内出土劔鍔車実測図（縮尺1/3）	63	Fig. 109 第27号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	71
Fig. 79 第6号住居址実測図（縮尺1/100）	63	Fig. 110 第25号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 80 第7号住居址実測図（縮尺1/100）	64	Fig. 111 第26号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 81 第8号住居址実測図（縮尺1/100）	64	Fig. 112 第28号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 82 第9号住居址実測図（縮尺1/100）	64	Fig. 113 第29号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 83 第4号掘立柱遺構実測図（縮尺1/100）	64	Fig. 114 第31号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 83' 第5・8号住居址第4号掘立柱遺構内出土土器実測図（縮尺1/6）	66-2	Fig. 115 第32号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 84 斐格墓遠景（西から）（Ph.19）	67	Fig. 116 第33号斐格墓尖削圖（縮尺1/20）	72
Fig. 85 第1号斐格墓実測図（縮尺1/20）	68	Fig. 117 第34号斐格墓実測図（縮尺1/20）	72
Fig. 86 第2号斐格墓実測図（縮尺1/20）	68	Fig. 118 斐格墓群に伴う祭祀遺構実測図（縮尺1/20）	73
Fig. 87 第3号斐格墓実測図（縮尺1/20）	68	Fig. 119 繩文式土器出土土壤（K30）実測図（縮尺1/20）	73

表 目 次

Fig.120 第1号土壙(P1)実測図(縮尺1/20)	73
Fig.121 第1・2・3・4号壇棺実測図(縮尺1/12)	75
Fig.122 第5・7・8号壇棺実測図(縮尺1/12)	75
Fig.123 第11・18号壇棺実測図(縮尺1/12)	75
Fig.124 第17・20・32号壇棺実測図(縮尺1/12)	75
Fig.125 第33・34号壇棺実測図(縮尺1/12)	75
Fig.126 第9・10・12-15号壇棺実測図(縮尺1/12)	76
Fig.127 第6・21・22・23・25・28・29号壇棺実測図(縮尺1/12)	77
Fig.128 祭祀遺構	80
Fig.129 祭祀遺構内出土土器実測図(縮尺1/3)(Ph.22)	80
Fig.130 P 1・K30内出土土器実測図と拓影(縮尺1/3)	81
Fig.131-2 出土した绳文土器(Ph.23)	82
Fig.131 方格模堀鏡片(Ph.24)	83
Fig.132 ナイフ形石器・石礫尖削器(縮尺1/1)	83
Fig.133 石斧実測図(縮尺1/4)	86
Fig.134 石包丁実測図(縮尺1/3)	86
Fig.135 第II地点出土砥石実測図(縮尺1/5)	86
Fig.136 第II地点出土砥石実測図(縮尺1/5)	86
Fig.137 第II地点出土砥石実測図(縮尺1/5)	87
Fig.138 第I・II地点出土砥石実測図(縮尺1/5)	87
Fig.139 鉄器・青銅器実測図(縮尺1/3)	87
Fig.140 第II地点住居址内出土ガラス玉実測図(縮尺1/1)	87
Tab. 1. 第I地点、住居址一覧表	16
Tab. 2. 第I地点、住居址内土器一覧表	16
Ph. 3 第1号住居址の遺物	14
Ph. 4 第1号住居址	14
Ph. 6 環濠遺景	43
Ph. 7 通路遺景	45
Ph. 8 第20号住居址	45
Ph. 9 作業の風景	45
Ph. 10 第31号住居址	46
Ph. 11 第15号住居址	46
Ph. 12 第16・17号住居址	48
Ph. 13 第19号住居址	48
Ph. 17 第IV地点遺景	66
Ph. 18 第4号掘立柱遺構	66-2
Ph. 20 壇棺墓遺景	79
Ph. 21 壇棺墓遺景	79
Ph. 25 作業員のみなさん	88
Tab. 3. 第I地点、掘立柱遺構計測表	19
Tab. 4. 第II地点、環濠内掘立柱遺構計測表	44
Tab. 5. 第II地点、住居址一覧表	50
Tab. 6. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	50
Tab. 7. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	51
Tab. 8. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	51
Tab. 9. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	52
Tab. 10. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	52
Tab. 11. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	53
Tab. 12. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	53
Tab. 13. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	54
Tab. 14. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	54
Tab. 15. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	55
Tab. 16. 第II地点、住居址内出土土器一覧表	55
Tab. 17. 第II地点、住居址、環濠内出土土器一覧表	56
Tab. 18. 第II地点、環濠内出土土器一覧表	56
Tab. 19. 第II地点、環濠内出土土器一覧表	57
Tab. 20. 第II地点、環濠内出土土器一覧表	57
Tab. 21. 第II地点、環濠内出土土器一覧表	58
Tab. 22. 第II地点、環濠内出土土器一覧表	58
Tab. 23. 第III地点、第1・2号方形複溝内出土土器一覧表	61
Tab. 24. 第IV地点、掘立柱遺構計測表	66-2
Tab. 25. 第IV地点、住居址一覧表	66-3
Tab. 26. 第IV地点、住居址内出土土器一覧表	66-3
Tab. 27. 第IV地点、壇棺墓一覧表	74
Tab. 28. 第IV地点、壇棺觀察一覧表	78
Tab. 29. 第IV地点、壇棺觀察一覧表	79
Tab. 30. 第IV地点、壇棺觀察一覧表	79
Tab. 31. ガラス玉計測表	87

1. 位置と環境

蒲田水ヶ元遺跡は、福岡市の東のはずれに位置している。旧柏屋郡は、近世以降北部の平野部である裏柏屋（現福岡市東区香椎・唐原・和白・柏屋郡古賀町・新宮町）と南部の平野部である表柏屋（現福岡市東区箱崎・多々良・蒲田・柏屋郡柏屋町・久山町・篠栗町・宇美町・志免町・須恵町）に二分されてきた。表柏屋は、多々良川・宇美川・須恵川などによって形成された平野で、月隈丘陵をはさんで福岡平野に隣接し、裏柏屋とは標高2~300メートルの立花山・城ノ腰山・遠見岳などで区分される。蒲田水ヶ元遺跡は、多々良川（久原川・猪野川）がつくった沖積地に向かって東から張り出した低丘陵の先端付近に当たる。

周辺では、九州縦貫自動車道や工場・倉庫の建設とともに発掘調査が実施され、多くの遺跡の存在が知られるようになった。蒲田部木原遺跡において、これまでに2次の発掘調査が行われている。第1次調査は、九州縦貫自動車道建設にともなうもので、ピット群および台形様石器・ナイフ形石器などの包含層を検出した。第2次調査は、柏屋町の圃場整備によるもので、3世紀後半の竪穴住居跡・5~6世紀の竪穴住居跡・7世紀後半の土坑、11~12世紀の土坑などが調査されている。

蒲田部木原遺跡のすぐ北側の工場建設にともなって、蒲田水ヶ元遺跡を調査した。弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・周溝構造などが発見された。丘陵の西端には、前方後方墳と円墳からなる部木八幡古墳群があるが、未調査である。

蒲田部木原遺跡の立地する丘陵から小さい谷を隔てた南側の丘陵上には、福岡県指定史跡である平塚古墳が存在する。町営住宅建設中に発見されたもので、弥生時代終末頃の墳丘墓とされる。大型箱式石棺を主体とし、墳裾付近に小型の石棺を配するもので、大型石棺内から管玉17点、棺外から內行花文鏡片が出土した。

表柏屋一体には、平塚古墳と同時期と見られる墳丘墓が点在する。名子道2号墳は、大型箱式石棺の周囲に列石を巡らして墓域を画し、石棺上に偏平な石を積み上げて墳丘をつくる。酒殿遺跡の大型



Fig. 1 著杉山から蒲田水ヶ元遺跡を望む (↓印本遺跡) (Ph. 1)



Fig. 2 蒲田・水ヶ元とその周辺 (縮尺 1 / 25,000)

1. 蒲田船木原遺跡、A-第3次調査 a-第1次調査、b-第2次調査A地区、c-同B地区、d-同C地区
2. 上大瓶平塚古墳群、3. 蒲田水ヶ元道路、4. かけ塚古墳群、5. 蒲川遺跡、6. 蒲田原遺跡、7. 茅田山古墳群、8. 丸山城跡、9. 西毛山古墳群、10. 辻畠遺跡、11. 江辻遺跡、12. 邵木八幡古墳群、13. 天神森古墳、14. 名子道古墳、15. 上井遺跡、16. 戸原麦尾遺跡
17. 王塚古墳、18. 若崎神社境内豐坂群、19. 桃地山古墳群、20. 古大南池玉造遺跡、21. 古大面遺跡、22. 鶴与丁堤遺跡、23. 牛ノ頭遺跡
24. 乙納木古墳群、25. 酒殿遺跡、26. 鬼山神社古墳

箱式石棺からは、変形鳳凰鏡・管玉が出土している。このほか、亀山神社古墳も大型箱式石棺と、墳裾に小型の箱式石棺を配した墳丘墓である。これらの墳丘墓の被葬者は、小地域を単位とした盟主と考えられている。平塚古墳・名子道古墳とは至近距離にある丘陵上に築かれた天神森古墳は、盤龍鏡・三角縁神獸鏡を副葬した前方後円墳であり、畿内型の古墳を導入した被葬者によって、それまでの分立した状況が統合されたことを示している。

さて、表柏屋には、滑石の玉造遺跡が点々と分布している。古大間玉造遺跡では、滑石を加工した古代の玉造跡が調査された。牛ガ熊遺跡は、6世紀中葉～7世紀初頭にかけての滑石製品生産工人集団による特殊占地の集落であったとされる。

今回報告する蒲田水ヶ元遺跡に関する周辺の遺跡の状況は、おおむね以上の通りである。このほか、繩文時代晩期の大規模な集落遺跡である江辻遺跡、中世の集落と居館が発見された戸原麦尾遺跡など多数の重要な遺跡が調査されている。

1. 柏原町教育委員会1985「蒲田郡木原遺跡」柏原町文化財調査報告第2集
2. 福岡市教育委員会1975「九州縄貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 蒲田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集
3. 須恵町教育委員会1993「牛ガ熊遺跡」須恵町文化財調査報告書第6集
4. 下条信行1977「考古学・柏原平野」福岡市立歴史資料館研究報告 第1集 福岡市立歴史資料館
5. 森貞郎1961「福岡県柏原町上大隈平塚古墳」『九州考古学』11・12 九州考古学会
6. 福岡市教育委員会1996「蒲田郡木原3次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集

2. 調査経過

昭和50年当初、株式会社駒井鉄工所は福岡北九州高速道路建設にかかる箱崎地区の社有地の用地買収に応諾され、九州自動車道福岡インターチェンジに隣接する蒲田の地に代替地を求められた。当然、当地が埋蔵文化財の包蔵地という事で、発掘調査について福岡市教育委員会との間で協議がもたれ、開発サイドからの強い調査体制整備の要請等があり、福岡市教育委員会内に本遺跡を調査する緊急の措置として「蒲田水ヶ元遺跡調査会」を設置することとした。

昭和51年1月6日より、熊本大学の協力を得て試掘調査を行なった。対象となる面積は約50,000平方メートルである。試掘調査は2ヶ月を要し、2月末日で終了した。試掘の結果、遺構の密度の高い4つの地点を調査地点に選んだ。調査の面積は第I地点を約2,000平方メートル、第II地点を約3,300平方メートル、第III地点を約1,000平方メートル、第IV地点を約3,200平方メートルとした。

第I地点は古墳時代の住居址数軒、第II地点は弥生時代後期を主体とする住居址数十軒と掘立柱群のみを取り囲む環濠、第III地点は内部構造（主体）不明の弥生時代後期の方形周溝遺構2基、第IV地点は弥生時代中期と奈良時代の住居址数軒と弥生時代中期の甕棺墓数十基等々の遺構検出を見た。

発掘調査の組織と協力者は以下のとおり。

福岡市教育委員会（昭和51年当時）

教育長 古村 遼一 社会教育部長 青木 崇 主幹 志鶴 幸弘 文化課長 清水 義彦
埋蔵文化財係員 三宅 安吉

蒲田水ヶ元遺跡調査会

会長 清水 義彦 顧問 井藤 功（現鬼籍） 松浦 有一郎（現東京国立博物館）
主任 折尾 學（現福岡市埋蔵文化財センター） 副主任 中野 和夫（現福岡市体育協会）

調査協力

熊本大学	平野 芳英（現鳥根県文化課古代文化センター）	山本 京子（現オーストラリア在住）
	高瀬 育朗（現佐賀県名護屋城博物館）	渡辺 一雄（現梅光女子学院大学）
	山崎 龍雄（現福岡市博物館）	田中 審大（現福岡市文化財整備課）
東京教育大学	池田 道也（現若水町歴史民俗資料館）	田中 克子（旧姓安部、現福岡古埋蔵文化財調査員）
桐朋学園大学	鳴田 光一（現飯塚市歴史民俗資料館）	

田平 徳三（現佐賀県文化財課）

濱石 正子（旧姓小沢・現福岡市埋蔵文化財調査員）

石井 美里（旧姓坂田）、池崎温子（旧姓市来）、酒井美知子（旧姓松田）

日本大学 福井裕一、三沢京子（旧姓須賀）

筑紫野美術大学 大町 光子（旧姓三島）

九州縦貫自動車道

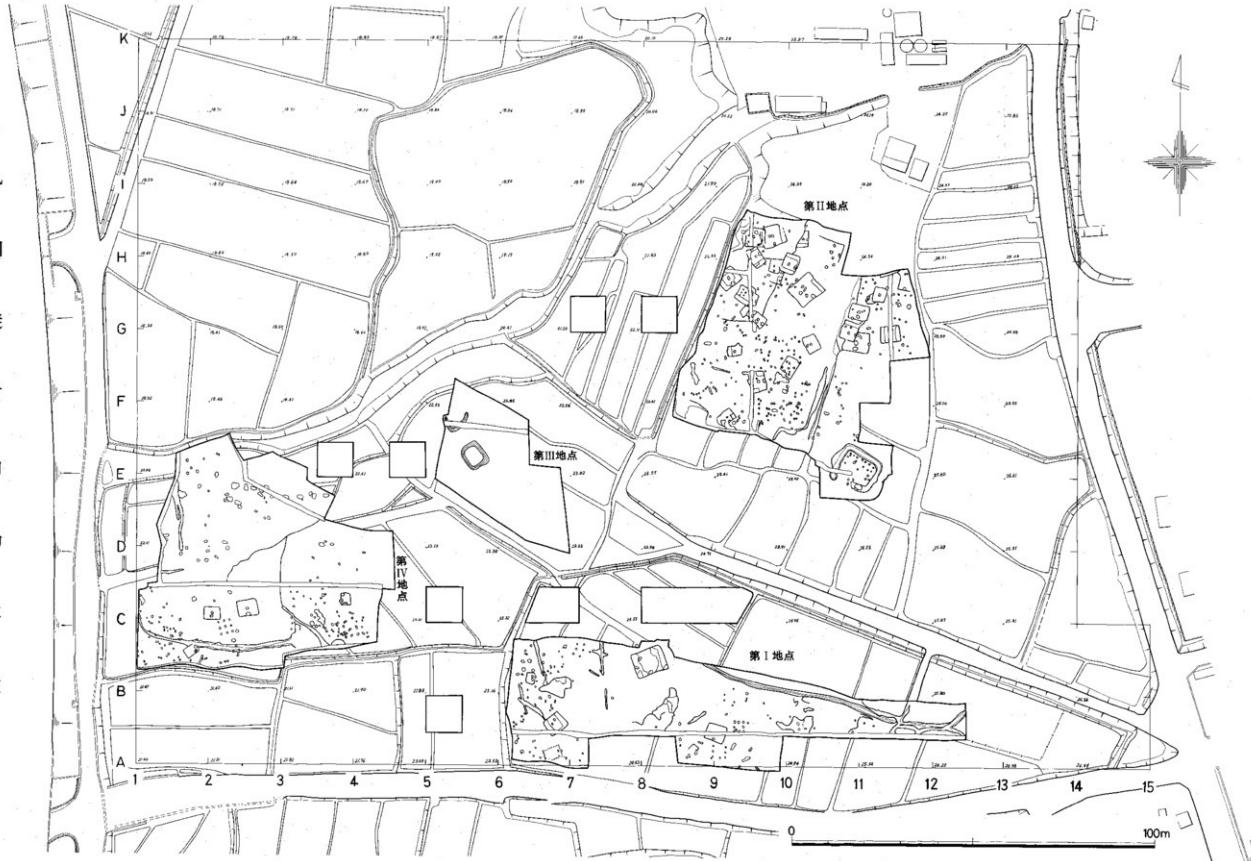


Fig. 3 蒲田水ヶ元遺跡全体図 (縮尺1/1000) 実大

3. 遺跡の概要

第I地点は古墳時代の住居址群、第II地点は弥生時代後期を中心とした住居址群、それに柱穴群を取り囲む弥生時代後期の環濠、第III地点は内部構造（主体）不明の方形周溝遺構、第IV地点は弥生時代中期から後期の住居址群と弥生時代中期の甕棺墓で形成される共同墓地等それぞれの地点で調査成果を納めている。

第I地点 第I地点東端より約70メートルの部分に第1号住居址と掘立柱建物第1号と第2号が、東端より約90メートルC-8区の部分に第2号住居址、C-7区に第3号掘立柱建物が、さらに西へ10メートルのC-6区の部分に第3号・第4号住居址が見える。方位はそれぞれ個性的で統一的ではない。ベッド状遺構を有つものに第2号と第3号住居址があつて2号住居址が東側、第3号住居址が両短辺に設けられている。炉跡については不明な部分が多い。第4号住居址は住居址の堅穴壁周辺と思われる所に柱を配した柱穴列を有つ、いわゆる平地式住居址である。各住居址の時代は伴出土器から考えて第1号住居址が古墳時代前期、第2号住居址が古墳時代中期、第3号住居址が弥生時代後期に比定され、第4号住居址は伴出土器を有しないが時代は奈良時代に下がる可能性がある。

第II地点 28軒の住居址と本調査地点南端に掘立柱群を囲む環濠がある。住居址を概観するとベッド状の遺構を有つものと有たないものとがあるが、ベッド状遺構をもつものが多数をしめる。ベッド状遺構の配置は、南北東西、南北東西の短辺の片側、南北東西の短辺の両側に設けられるものとがある。第31号住居址は南北東西にベッド状遺構を配し、南端の中央に土坑を設け、床中央に炉址を設けているが、ベッド状遺構を有つ住居址の生活空間の合理的な活用を念頭においていた設計がなされている。住居址の年代は2、3の住居址に古墳時代の土器を有つものがあるが後世の流れ込みと考えられ全て弥生時代後期に比定される。

掘立柱穴を取り囲む環濠は本調査地点の南東に位置している。長辺16メートル、短辺12メートルに設計され、溝は幅160センチメートル内外、深さ50センチメートル内外に設計され、本造構北側に2間×6間の掘立柱建物を配している。本造構の存在の意味について、貴重な食糧の貯蔵倉庫の保護と、集団の精神的統一または集団の象徴としての宗教的施設を考えたいが、実証する確たる遺物の存在は発見されていない。

第III地点 方形周溝遺構、2基の検出を見る。2基とも大幅な削平が見られるが、残る周溝を第2号方形周溝で観察すると、幅60センチメートル内外、深さ20センチメートル内外、長辺5.8メートル、短辺4.8メートルの隅丸方形の形状を有つ。伴出する遺物は半製品の輝緑凝灰岩製の石包丁と弥生時代後期の壺形土器である。本造構を方形周溝墓と見るなら出土遺物を副葬品と考えたい。第1号に伴う石器は縄文時代の色彩の濃い石器であるが、方形周溝遺構に伴う遺物としては本造構の比定年代より古式に入る事から今後の検討課題である。

第IV地点 住居址5軒と掘立柱遺構1軒、甕棺墓32基、さらに甕棺墓域に伴う祭祀遺構、それと縄文時代前期の遺構それぞれ1基が検出されている。住居址は第9号が弥生時代中期の様相を有ち、他は古墳から奈良時代に比定され、甕棺墓と祭祀は弥生時代中期に、縄文時代遺構は縄文時代前期の轟式土器と曾畠式土器を伴出している。

4. 第 I 地点の調査



Fig. 4 第 I 地点 遠景 (Ph. 2)

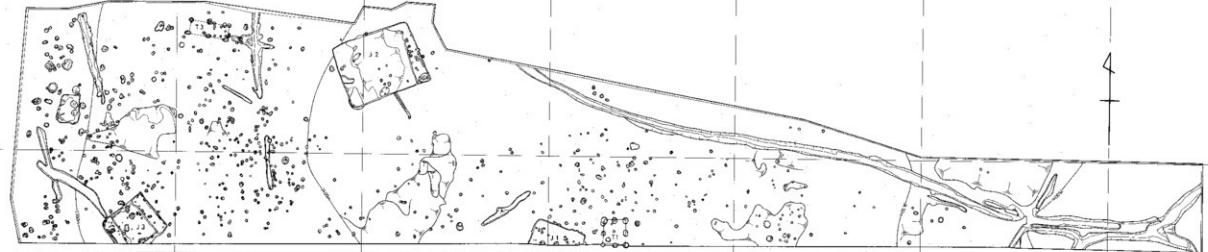


Fig. 5 第1地点造構配図 (縮尺1/400)

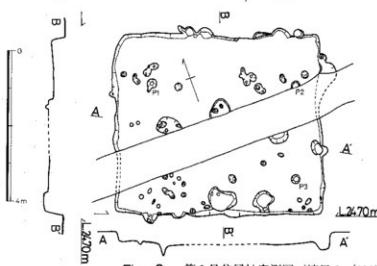


Fig. 6 第1号住居址実測図 (縮尺1/100)

Fig. 7 第2号住居址実測図 (縮尺1/100)

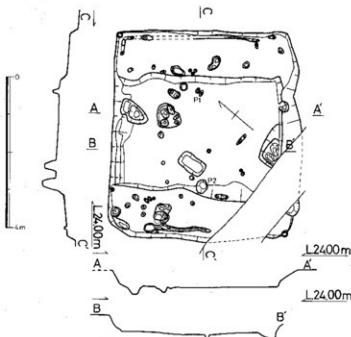
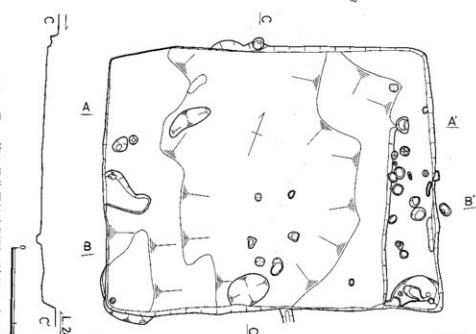


Fig. 8 第3号住居址実測図 (縮尺1/100)

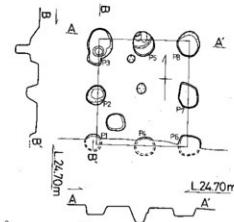


Fig. 10 第1号掘立柱造構実測図 (縮尺1/100)

- 12 -

Fig. 11 第2号掘立柱造構実測図 (縮尺1/100)

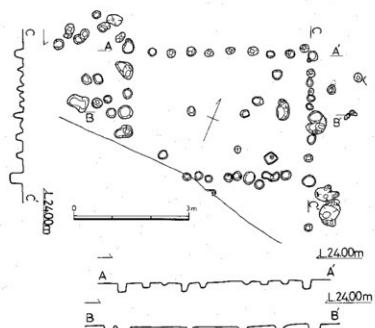


Fig. 9 第4号住居址実測図 (縮尺1/100)

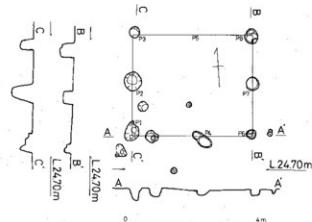


Fig. 12 第3号掘立柱造構実測図 (縮尺1/100)

① 第Ⅰ地点の概要

本調査地点は、本遺跡の南部分にあって東西に長い台地上に位置し、東西130メートル、東辺10メートル、西辺30メートルの調査範囲を有す。調査地点の南には農道が隣接し発掘区外である。発掘地点の東部分は標高25.8メートル、西部分で標高24.5メートルを測る。西の発掘区外は1メートル以上の段差となって標高23.1メートルを測り、畑作圃場整備による掘削により遺構は削平の臺き日にあっていいる。発掘区の北側隣接地は、本調査地点と同様の東から西へ流れる台地を形成するが、農道及び入排水用側溝のため遺跡の損壊にあったと思われる遺構の存在は皆無であった。本地点は第IV地点に流れる台地であるが、本地点との間に遺構の空白が見られる。その空白は圃場整備のためと思われる。いずれにしても本調査地点は東から西へ緩斜しながら流れる台地状に形成された地点である。

本地点では、第3号住居址が弥生時代後期の後半の土器を伴出、第1号住居址が古墳時代前期の様相をもつ土器群、第2号住居址が古墳時代中期の様相をもつ土器群をもっている。第4号住居址はいわゆる平地式住居址と呼ばれるもので奈良時代に比定されるものと思われるが、伴出土器は見当らない。住居址の他、3軒の高床式倉庫と思われる掘立柱建物の跡が見られるが、これら倉庫が各住居址に所有されたか否か、各時代の集団における財産の所有の有り方を考える上で今後の課題となる。

② 住居址

第1号住居址 (Fig. 6)

第Ⅰ地点発掘区の中央部、やや南寄りに位置する。本住居址は中央を試掘溝によって、斜めに切られているが、長軸5.48m、短軸4.76mの長方形を呈している。長軸方位はN-68°-Wである。主柱穴は西南部の試掘溝の中に1本を想定するとすれば、P 1～3という4本柱が考えられよう。P 1は径約23cm、深さ10cm、P 2は試掘溝にかかり、半分を欠くが径20～25cm程と思われる。P 3は径約22cm、深さ19cmである。ピット間の心心距離はP 1～P 2が3.84m、P 2～P 3が2.52mである。炉は中央付近を欠く為、不明である。焼土等も検出されていない。小ピットや浅い堀り込みが床面に多くみられ、壁際にもピットがあり、北辺、東辺、南辺は、かなり凹凸がある。床面は壁際付近でやや下がり気味になっている。壁高は25～35cmである。

なお、東南側より壺の口縁等が出土している(Fig. 13)。又、砥石(Fig. 138の1)も出土している。

第2号住居址 (Fig. 7)

第Ⅰ地点発掘区の北側、やや西寄りに位置する。長軸8.76m、短軸7mで規模の大きな長方形を呈している。長軸方位はN-67°-Eである。主柱穴は不明である。炉も検出されていない。南壁際中央には楕円形の浅い掘り込みがみられる。東側短辺沿いにベッド状遺構をもつ。東北隅では段が明確でなくなり、このベッド状遺構が東北隅まで続くものか、途中で切れているものかは不明である。ベッド状遺構の部分にはピットが多く検出されている。東南隅も浅く掘り込まれている。又、西南隅にやや高い部分があり、これはベッド状遺構の名残りとも考えられ、西辺沿い南側のベッド状遺構の可能性を示すが、確かにない。周溝は東壁際の中央南寄りに、わずかに溝が残存するほかはみられない。床面は東側、西側の両辺の壁際から、なだらかに中央に向かって低くなっている。最も低い中央部に小ピットが6個程検出された。壁高は9～27cmである。南壁の中央付近より、南東に延びる25cm程の巾の細い溝を本住居址は切っている。

なお、砥石 (Fig. 138の2) が出土している。

② 住居址

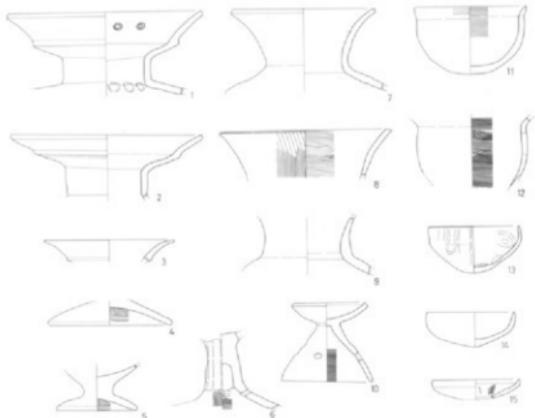
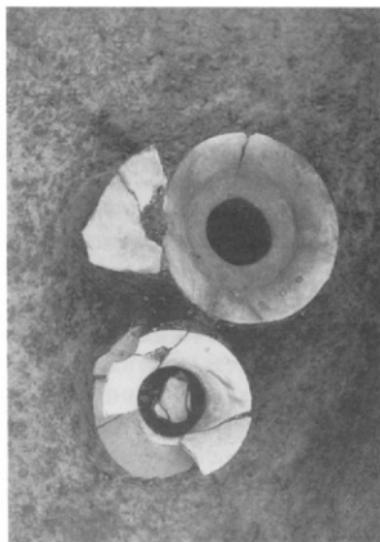


Fig. 13 第1号住居址内出土土器実測図（縮尺1／4）



Fig. 14 第2号住居址内出土土器実測図（縮尺1／5）



第1号住居址の遺物（Ph. 3）



第1号住居址（Ph. 4）

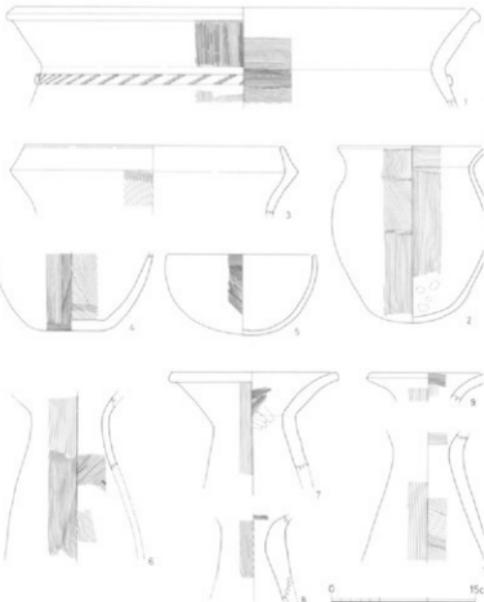


Fig. 15 第3号住居址内出土土器実測図（縮尺1／5）

第1号住居址内出土土器 (Fig.13)

出土土器の器種は、壺・小形鉢・高杯・高杯形器台・台付杯・杯・小形土器である。壺は1~3・7~9で、二重口縁のもの（1~3）と、外反し開く口縁のもの（7~9）とがある。1は頸部が直立し、外反して明瞭な稜をもち立ちあがって段をなし、更に外反する二重口縁である。胴部は張りのある球形のものと思われる。外面はヨコナデ。内面は口縁部に竹管状工具による施文が2個みられる。頸部から肩部への移行部に指圧痕がある。2は1と同様の形態であるが、口縁上部が1に比べ、開いている。外面はヨコナデである。3はやや小形のもので、口唇部が薄くなり更に開いている。1・2・3とも胎土、焼成は良である。7は頸部がしまり、口縁部が長く外反し開く。外面はヨコナデである。8は口唇端部が比較的平坦であるが、ナデにより中央がわずかに凹んでいる。外面は縦方向、内面は横方向のハケ目調整がされている。黄褐色を呈し、小石粒を含み焼成は良である。9は外弯気味に直立する頸部で、上方が薄くなる。色調は淡赤褐色。胎土、焼成は良である。1と7は胴部以下を欠損した後、器台に転用した可能性も考えられよう。小形鉢は11・12で、12は口縁部と底部を欠失するが、形態的には類似するものであろう。11は口縁が短く、わずかに外反し、端部は薄く丸味を帯びる。底部は丸底。口縁部外面はヘラ調整で、口縁の接合部分は指ナデがされている。内面も上方は横方向のヘラ調整が行われている。又、底部にはヘラ削りもみられる。12は内面に非常に細かい横方向のハケ目調整がされている。4と6は高杯の脚部である。4は低くわずかに内弯気味に外側に開くもので、脚端部は丸味を帯びる。外面はヨコナデ。内面はハケ目調整である。6は柱状の脚より裾部で外側に大きく開くもので、裾部移行部に2個の円形透孔がある。外面は穿孔より上方でヘラ削りがされ、下方はハケ目調整が行なわれている。高杯形器台は10で、皿状の受け部をもち口唇端部は上方にやや尖る。脚下方はやや内弯気味に開き、中位に円形透孔を4個もつ受け部外面はヨコナデ。脚部内面下方には細かいハケ目が施されている。色調は赤褐色。胎土焼成とも良である。台付杯の5は小形で、脚部は低くわずかに内弯気味に外側に開く。杯部内面はヘラ削り、脚部内面には非常に細かいハケ目調整。外面はヨコナデがされている。15の杯は口縁端が短く直立する。外面はナデ、底部周辺にヘラ压痕がみられる。内面はヘラ磨き→ハケ目調整→ヨコナデの順に行なわれている。赤褐色を呈し、胎土、焼成は良。小形土器は13・14でいずれも手捏ね土器である。13は小形の楕形でやや尖り気味の底部に、口縁部上方がやや内弯気味に直立する。外面は縦方向の指ナデ、そして、口縁部は内外面を挟んで横方向にナデられている。内面にも指圧痕が残存している。14は13に比べ、やや浅く、尖り気味の底部をもつ。指による整形痕が明瞭に残っている。13・14とも胎土、焼成はあまり良くない。

第2号住居址内出土土器 (Fig.14)

出土土器は少なく、小形の手捏ね土器と高杯である。1は小形の楕形で楕円形気味にややつぶれている。内面に部分的に指圧痕が残っている。色調は淡褐色。細砂粒を含み、焼成は良である。2・3は高杯の脚部で、2は据端部に行くに従い薄くなる。3は裾部が弯曲し開き、やや薄くなっている。両方とも外面はヘラ削りがされている。

Tab. 1 第I地点 住居址一覧表

No.	形態	規模(m)	長軸方位	ベッド状造構	炉
1	長方形	4.76×5.48	N-68°-W	なし	中央を試掘溝に切られている為、不明。
2	"	7.0×8.76	N-67°-E	東壁(西壁にもあったと思われる。)	不明
3	"	5.6×4.48	N-51°-E	両短辺	"
4	"	3.7×4.82	N-69°-E	なし	なし

Tab. 2 第I地点 住居址内出土土器一覧表

遺物番号	出土地点(住居址)	器種・器部	法量(単位cm)			形態の特徴
			口径	器高	最大径	
1	J 1	壺・胴部以下欠	19.9			明顯な棱をもち、立ちあがり、外反する二重口縁。肩部へと張り出す。
2	"	" " "	19.5			明顯な棱をもつ二重口縁。
3	"	" " 口縁部	13.3			やや小形。外反する口縁(二重口縁のもの)。口唇部分は比較的薄い。
4	"	高杯・脚部	(脚径) 12.4			低く、わずかに内寄気味に外側に聞く。脚端部は丸味を帯びる。
5	"	台付杯・杯部欠	(脚径) 8.2			小形。脚部は低く、わずかに内寄気味に聞く。
6	"	高杯・脚部				柱状の脚より裾部で外側に大きく聞く。腹部移行部に2個の円形透孔。
7	"	壺・胴部以下欠	14.6			頸部がしまり、口縁部が外反し聞く。
8	"	" " 口縁部	18.0			外反し、聞く口縁。口縁端部はナデによる棱線がわずかにみられるが、比較的平坦な面である。
9	"	" " 頸部				頸部が外寄気味に立ちあがる。肩部へと張り出す。
10	"	高杯形器台	7.9	8.2	9.5	小形。皿状の受部をもち、口唇端部は上方にやや尖る。円形透孔(径8~9mm)4個。
11	"	小形鉢	11.5	6.9	11.5	丸底。口縁部が短く、わずかに外反。
12	"	" " 口縁端 盛部欠				肩部より緩やかに口縁が外反。
13	"	手捏ね土器	9.2	4.8	9.5	小形輪形。やや尖り気味の底部。口縁部上方でやや内寄気味に直立。盛厚が一定していない。
14	"	"	8.9	3.6	9.1	小形輪形。尖り気味の底。13に比べ、やや浅い。
15	"	杯・底部一部欠	9.0	2.0	9.0	口縁端で短く直立する。
1	J 2	手捏ね土器	6.1	4.8	6.1	器形がいびつで、楕円形気味の小形輪形。厚さも面も一定していない。
2	"	高杯・脚一部				握端部に行くに従い、薄手になる。
3	"	" " "				瓶部にかけて背曲し、聞く。瓶部は薄くなる。
1	J 3	壺・口縁部	49.0			外反する口縁部下に刻み目を有す凸状凸縁一条。口縁部にややふくらみあり。大形壺。
2	"	"	15.5	18.2	16.5	なだらかなカーブで外反する口縁。口唇端は丸味を帯びる。丸底気味。
3	"	壺・口縁部	27.0			内縁のやや少ない逆「く」字口縁。口縁部上部は薄くなり、内面の筋曲も緩やか。
4	"	壺・底部	(底径) 6.8			やや丸味を帯びた平底で楕円形。
5	"	椀	15.3	8.3	15.6	半球形を呈し、口縁部はやや内寄気味に方ちがある。
6	"	器台・受け部、縁部欠				くびれ部が上方で、受け部、縁部とも聞く。
7	"	" " 捺部欠	17.4	(推定) 23.0		朝顔状に聞く。受け部端の下部はわずかに下に突出気味。
8	"	" " 受け部、捺部欠				くびれ部付近の盛厚が厚い。
9	"	" " 受け部	12.8			朝顔状に聞く受け部。
10	"	" " 受け部、捺部欠				くびれ部が上方で、受け部、脚部とともに聞く。

4. 第I地点の調査

焼 土	上 地(貯藏穴様)	清	主 株 穴	備 考	No.
不 明	不 明	なし	4	中央に試掘溝	1
な し	〃	東壁際にわずか残存	不 明		2
〃	〃	東壁際	2	西南角試掘溝	3
〃	な し	なし	—	西南角発掘区域外	4

手 法 の 特 徴	胎 土	焼成	色 調	備 考	Fig	遺物 番号
外側：ヨコナデ 内面：口縁部に竹箆工具による施文2個。肩部への 移行部に指圧痕。	精良	良	外面：黒褐色 内面：明褐色	肩部以上を欠損した後、部分的に復元して可能性あり。	13	1
外側：ヨコナデ 口縁部、内外面ともヨコナデ。	〃	〃	赤褐色		〃	2
器面磨滅の為、不明。	〃	〃	明赤褐色		〃	3
外側：ヨコナデ 内面：ハケ目	少量の石粒を若干含む。	〃	赤褐色を帯びた黄褐色		〃	4
外側：ヨコナデ 内面：杯部はヘラ削り、脚部は非常に細かいハケ目。	少量の瓦石粒等を若干含み、きめ細かい。	〃	青茶色		〃	5
外側：穿孔より上部はへら削り、下方はハケ目。 内面：穿孔より上部はへら削り、下方はハケ目。穿孔の時の熱土のほみ出しもあり。	小石粒を少量含む。	〃	外面：淡赤褐色 内面：暗褐色		〃	6
外側：ヨコナデ 内面：磨滅の為、不明。	良	〃	明褐色 (内面に黒褐色部 分有り?)	肩部以下を欠損した後、部分的に復元して可能性あり。	〃	7
外側：口縁部は粗いハケ目の後ヨコナデ。下方は確 定的ハケ目。	瓦石、石英粒等を含む。	〃	黄褐色		〃	8
内面：ハケ目	砂粒、微量の瓦 石等を若干含み、きめ細かい。	〃	淡赤褐色		〃	9
器面磨滅の為、不明。	〃	〃	明褐色		〃	10
外側：受け部はヨコナデ。 内面：脚部上方はナデ。下方は細かいハケ目。	良	〃	赤褐色 (内面から受部に 異味あり)		〃	11
外側：口縁部へラ削り。口縁部下指ナデ。底部へ ラ削り。	少量の砂粒を含 み、きめ細かい。	〃	外面：黄褐色 内面：やや黒味を 帯びる		〃	12
内面：上部へラ削り。	砂粒を多量に含 む。	〃	外面：淡褐色 内面：黄褐色		〃	13
外側：沿滅の為、不明。 内面：非常に細かいハケ目。	砂粒を多量に含 む。	〃	外面：淡褐色 内面：黄褐色		〃	14
口縁部は両面をほどこし横方向にナデ。 外側：指ナデ。内面：所々に指圧痕。	砂粒を含み、 きめ細かい。	〃	外面：淡褐色 内面：黄褐色		〃	15
内外面ともに指捺形。	きめ粗く、やや 不良。	〃	小黒斑あり。		〃	16
外側：ナデ。底部周辺へラ削り。 内面：へラ削きの後ハケ目、更にヨコナデ。	精良	良	赤褐色		〃	17
内面：明瞭な指圧痕が部分的に残存。	細砂粒を少量含 み、良。	〃	淡褐色		14	1
外側：へラ削り 内面：へラ削きをあて、回して削り調整。	小石粒を若干含 み、きめ細かい。	〃	外面：淡赤褐色 内面：淡褐色及び 灰褐色		〃	2
外側：へラ削り 内面：ヨコナデ	粗粒の小石を含 み、きめ細かい。	〃	淡褐色		〃	3
口縁部及び内面上方はヨコナデ。 外側：ハケ目。凸輪付近はヨコナデ。刻み目は、細 かい縫のある剥離層状のもの。内面：ハケ目	砂粒が多く、小 石粒等を含む。	〃	外面：淡褐色 内面：白味を帯び た黄褐色		15	1
外側：ハケ目 内面：口縁部、脚部にハケ目。底部に指圧痕。	瓦石、石英粒、砂 粒を多量に含む。	〃	淡褐色		〃	2
外側：屈曲部より下方にハケ目。	小石粒等を含む。	〃	外面：淡黄赤色 内面：淡黄褐色		〃	3
外側：ハケ目。底面にも明瞭なハケ目。	長石粒等を多く 含む。	〃	外面：淡黄褐色 内面：白味を帯び た黄褐色		〃	4
外側：ハケ目。部分的にへラ削りあり。 内面：ヨコナデ。底部に指圧痕。	砂粒を少量含む。	〃	明赤褐色		〃	5
外側：ハケ目 内面：全体になだれた後ハケ目	小石粒を多量に 含む。	〃	淡褐色		〃	6
外側：ハケ目 内面：くぎれ跡より上方、ハケ目とヨコナデ。下方 にかけてへラ削り。	石英粒等を含み 良。	〃	暗褐色		〃	7
外側：ハケ目 内面：上方に一部分ハケ目。くぎれ跡付近ヨコナデ。	粗粒を多量に 含む？	〃	黄赤色		〃	8
外側：ハケ目 内面：ハケ目。	砂粒を含む。	〃	淡黄赤色		〃	9
外側：ハケ目 内面：上方及び下部にハケ目。	小石粒を多量に 含む。	〃	外面：白味を帯び た黄褐色 内面：暗褐色		〃	10

第3号住居址 (Fig.18)

第1地点発掘区の西側南寄り、第4号住居址の北方2.8m（最短距離）に位置する。長軸5.6m短軸4.48mの長方形を呈する。長軸方位はN-51°-Eである。西南角付近を試掘溝によって切られている。主柱穴はP1・2の東西方向の2個と思われる。P1はごく小さいピットが隣り合った状態になっているので、或いは、この2個が同時にあった可能性も考えられるであろうか。やや疑問を残す。P2は径約30cm、深さ33cmで、ピット間の心心距離は2.5mである。炉は不明で、焼土の検出もされていない。南壁際中央に土塗状のものが検出されている。東辺西辺の両短辺に沿って、ベッド状遺構が設置されている。西辺沿いのベッド状遺構は試掘溝により、南側の一部を欠いている。ベッド状遺構の部分を除いた北壁、南壁もかなり斜めの面をもった壁となっている。周溝は北東角から東壁際に残存している。西壁にも細長い溝状のものがみられるが、周溝の一部かどうかは不明である。床面は平坦で、小ピットをもつ不整形の土塗や長方形の土塗等も検出されている。壁高は約24~40cmである。なお、本住居址の床面より10cm程上層で、礫石が多数出土した。その中には石斧 (Fig.133の1・4・5) もみられたが、本住居址に伴うものではないと考える。又、砥石 (Fig.138の3) も出土している。

第3号住居址内出土土器 (Fig.15)

本住居址の中央付近から器台等が出土している。器種は甕・壺・楕・器台である。甕は1・2・4。1はかなり大形の甕で、外反する口縁部下に刻み目をもつ台状凸帯をめぐらすもの。口縁端がやや膨らみをもっている。内外面ともにハケ目調整がされ、口唇部と内面上方にはヨコナデが行なわれている。凸帯の刻み目は5mm程の巾の斜め帶状で、施文具による細かい横線がみられる。外面は淡褐色を呈し、砂粒等を含み焼成は良。2はなだらかなカーブで外反する口縁と丸底気味の底部をもつ。内外面、ハケ目調整で内面底部付近には指圧痕がみられる。淡い明褐色で、長石、石英、砂粒を多量に含み焼成は良である。4はやや丸味を帯びた平底で底面は楕円形である。内外面全面にハケ目調整がされている。3の壺は逆「く」字口縁で口唇部がわずかに外湾気味で内傾もやや少ない。外面屈曲部の稜は明瞭であるが、内面は緩やかである。外面屈曲部より下方にハケ目調整がみられる。色調は淡黄赤色。小石粒等を含み、焼成は良。楕は5である。半球形で口縁部がやや内湾気味に立ちあがるもので、口唇端は平坦である。外面にはハケ目調整が行なわれ、部分的にヘラ痕がみられる。内面はヨコナデ、底面に指の圧痕が明瞭に残っている。色調は明褐色で砂粒を少量含み、焼成は良である。器台は6~10である。すべて、くびれが上方にあるものである。7と9は朝顔状に開く受け部である。7は口縁端の下部がわずかに下に突出気味で稜をなし、くびれがはつきりしている。外面はハケ目調整。内面はくびれ部より上方ではハケ目調整とヨコナデ、下方にかけてはヘラ削りが行なわれている。口縁端の突出気味の部分はヘラ調整がされている。色調は黄褐色。胎土、焼成は良である。9もハケ目調整がされ、外面上方は後からヨコナデである。6・8・10は受け部と裾部を欠いている。6はくびれ部より緩やかに開き、やや内湾気味に開く裾部へと続いている。外面はハケ目調整。内面はナデの後にハケ目調整が行なわれている。色調は淡褐色で、小石粒を多量に含み、焼成は良。8はくびれ部付近の器厚が厚く、外面はハケ目調整、内面はヨコナデがみられる。10は直線的に開くもので、内面はハケ目調整。小石粒を多量に含み、焼成は良である。

第4号住居址 (Fig.19)

第3号住居址の南方2.8m（最短距離）に位置する。西南角が発掘区域外にかかり、ピット数を欠いている。長辺4.82m、短辺3.7mの長方形を呈する。長軸方位はN-69°-Eである。本住居址は柱穴のみを残すもので、平地式住居であろうと考えられる。短辺が7本柱、長辺が10本柱であろう。東辺と南辺には、位置的に考えられる柱穴の間にピットがかなりみられる。短辺のピット間の心心距離は約44~68cmで、平均が56cmである。長辺のピット間の心心距離は約48~64cmで、平均は55cmとなっている。各辺のピット間の距離は、ほぼ同一になっている。それぞれの角に位置するピット3個の深さは25~32cm程度他のピットに比べ、やや深くなっているようである。又、ピットの大きさは西辺に比べ、東辺のものの方がやや小さいが、径20~30cm前後のものが多い。

なお、遺物の出土はみられないが、奈良・平安時代以降の住居址と考えられる。

③ その他の造構**第1号掘立柱造構 (Fig.10)**

2間×2間で、正方形に近いが、P1~P3の方向を桁行とした。桁行方位は南北線上に一致する。桁行間の平均は281.3cm、梁行間は238cmを測る。なお、P1・4・6は試掘溝にかかり、約15cmが削られている。

第2号掘立柱造構 (Fig.11)

2間×2間であるが、P5に当たる柱穴は検出できなかった。桁行方位はN-86°-Wを指す。桁行間の平均は362cm、梁行間は306cmを測る。

第3号掘立柱造構 (Fig.12)

2間×1間の長方形の建物跡である。桁行方位はN-80°-Wを指す。桁行間は412cm、梁行間の平均は143.3cmを測る。

第1号掘立柱造構と第2号掘立柱造構は方位もほぼ一致しており一連の建物であった可能性もある。第3号掘立柱造構は1・2号とはやや離れた位置にあり、規模も異なる。

これらの掘立柱造構からは、構築時期を示すような遺物の出土はないが、造構の配置状況からみて、あるいは第1号住居址、第2号住居址と同時に營まれた倉庫の跡であるとも考えられる。

Tab. 3 第I地点掘立柱造構計測表**第1号掘立柱造構**

		P 1 - P 2	P 2 - P 3	P 4 - P 5	P 6 - P 7	P 7 - P 8	平均	P 1#	P 2#	P 3#	P 4#	P 5#	P 6#	P 7#	P 8#	平均	
桁行		136	146		134	146	140.5	深	45	51	67	56	57	58	33	50	55.9
梁間		282	282		280	281.3		浅	15	30.5	61	21	39.5	24	11	18.5	27.6
P 1 - P 4		P 4 - P 6	P 2 - P 7	P 3 - P 5	P 5 - P 8		平均										
P 1 - P 4		126	118		122	116	119	※印は推定値。平均値は推定値も含む。小数点2位を4捨5入。									
P 1 - P 4		238	238	238	238	238		方位	南北線上に一致する。								

第2号掘立柱造構

		P 1 - P 4	P 4 - P 6	P 2 - P 7	P 3 - P 5	P 5 - P 8	平均	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8	平均	
桁行		194	168		(190)	(170)	161	浅	42	52	32	28	-	32	40	42	38.3
梁間		362	362		(360)		362	深	37.5	65	39.5	13.5	-	18	31	43.5	35.4
P 1 - P 2		P 2 - P 3			164	142	153	P 5	は検出されなかった。P 4の径は北側の最大径。								
P 1 - P 2		164	142		164	142	153	方位	N-86°-W								
P 1 - P 2		306	(306)		306	306											

第3号掘立柱造構

		P 1 - P 3	P 3 - P 5	P 2 - P 4	P 4 - P 6	平均	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	平均	
桁行		206	206	194	218	206	浅	66	52	56	54	66	44	56.3
梁間		412	412	412	412		深	21	32	28.5	32	27	30	28.4
P 1 - P 2		P 3 - P 4	P 5 - P 6	平均										
P 1 - P 2		144	144	142	143.3									

5. 第II地点の調査



Fig. 16 第 II 地 点 航 空 写 真 (西側) (Ph. 5)



Fig. 17 第II地点遺構配置図 (縮尺 1/400)

① 第II地点の概要

本地点は遺跡の東北部分標高25メートルから23メートルの地点に形成された集落群である。本地点の隣接部分は南側が第I地点と本地点の間に形成された谷で本地点集落群の南限を示し、東、北、西側は圃場整備による損壊と思われる試掘結果を得ている。本地点を含む緩斜する台地は西側の標高21メートルから急な段差をもって現在の水田面標高19メートル地点へと落ちる。この水田面の調査も埋蔵文化財保護理念からすれば当然調査対象となるが、調査会にその余力がなかった事を申し添える。

さて、本地点の集落の特徴は、住居群と掘立柱群を取り囲む環濠の存在である。

まず住居址を大別すると4つの形態が概観できる。その1つはベッド状造構を全くもたないもの、その2は短辺の片側のみにベッド状造構を配するもの、その3はベッド状造構を短辺両側に有つもの、その4は住居址長辺、短辺の四辺にベッド状造構を配置するものである。住居址は複雑な切り合い関係を示しているが、土質が雨に触れると極端に柔かくなり、陽に照らされると反対に堅くなつて移植小手を通さない状態で、また地山の文化層の覆土の色別が困難事もあって、切り合いの時代的新旧の判断及び住居址の平面プランの正確さを問う事が難しかった事を申し添える。

環濠について言及する。環濠内には2間(2.67メートル)・6間(7.47メートル)の掘立柱造構を、環濠は幅1.6メートル内外、深さ0.5メートル内外、長辺16メートル、短辺12メートルを測り、南辺に幅4メートルの出入口部分がある。本造構が集団管理の倉庫であるのか集団の精神的支柱となる施設であるのか今後の課題となろう。

本地点の出土土器は弥生時代後期に比定されるが、その分析は常松幹雄よりなされている(『伊都國の土器、那國の土器』、「古代探叢III」早稲田大学考古学会淹口宏編所収)ので参照されたい。

② 住居址

第10号住居址 (Fig.18)

第II地点発掘区の北寄り東側に位置する。長軸4.2m、短軸3.7mの長方形を呈するが、東辺3.7m、南辺3.12mでやや短い、主柱穴はP1・2の2個でやや西寄りに位置している。心心距離は3.06mで、P2はP1に比べ径が大きい。炉は床面中央にあり、炉内より焼土も検出された。東壁際中央に不整形の土塗がある。床面は平坦。壁高は12cm。長軸方位はN-20°-Eである。東北角床面より鉄製の鍬先(Fig.139の2)が出土。砾石も2個(Fig.136の1-2)出土。

第11号住居址 (Fig.21-1)

発掘区の北側中央に位置する。西半を削平され欠くが現存部分は5.7mで長方形であろう。主柱穴は不明。炉は中央に位置すると考えられ、炉の東側にも焼土が検出された。東壁際中央に不整形の土塗がある。ベッド状造構は両短辺沿いに確認され、北側ベッド状造構の南側にもわずかな段をもつ面がみられる。周溝も全周すると思われる。壁高は非常に浅く削平著しい。

第14号住居址 (Fig.32・33)

第10号住居址の南6.8mに位置する。長軸5.5m、短軸4.5mの長方形を呈す。主柱穴はP1・2の2個であるが、P1はやや浅く多少疑問を残す。炉は床面中央であるが、試掘溝により半分を欠く。西側に炭化材と、住居址全体に炭化物、及び焼土が多量に検出される為、火災にあった可能性が強い。両短辺に沿って、貼り付けによるベッド状造構が設置されている。周溝は部分的に途切れているが、ほぼ全周するとみられる。床面は中央がやや上がっている。

第10号住居址内出土土器 (Fig.21-2の1・2・3)

1の壺底部と2の小形高杯の接合部、3の杯が出土。3は小さな丸底から斜上方に大きく開く杯である。口唇部は丸味をもつ。内外面ともにハケ目調整で、底面付近はかなり丁寧に各方向から行なわれている。きめ粗く、焼成良。

第11号住居址内出土土器 (Fig.21-2の4)

5の器台が出土している。くびれ部が上方に位置し、受け部、脚部とも開くもので、脚端部がやや内湾気味である。又、受け部端、脚部端が薄手になり丸味をもっている。

第14号住居址内出土土器 (Fig.21-2の5・6・7・8・9)

5は外反する口縁で、腹か壺かは不明である。6は壺の口縁、肩部にかけて急に薄手になるもの。8は外側に大きく開く脚部と思われるが、比較的厚手である。9の小形器台は上部を欠失しており、支脚の可能性もあると思われる。外面、ヘラ削りがみられる。

第12号住居址 (Fig.20)

第II地点発掘区の北東隅に位置する。発掘区域外にかかり、東側を斜めに欠いている。全体に削平が著しく、北側の壁は確認できなかったが、推定長辺6m、短辺4mの長方形を呈すものと思われる。主柱穴は不明。北側角の3個のピットの帰属も明確ではないが、本住居址のものと考えてよいであろう。炉は床面中央にあり、焼土が炉内と、炉と西壁の間に検出された。又、焼土範囲の付近では炭化物及び炭化物混入土の広がりもみられた。南壁際中央に不整形の土塗があり、この土塗より砾石 (Fig.138の4) が出土している。周溝は南壁際沿いで検出。

第13号住居址 (Fig.20)

第12号住居址に隣接し、南側の一部が検出されたのみで、大半は発掘区域外にあたる。長方形を呈すと思われ、現存する長辺は6.12mである。東西の両短辺に沿ってベッド状遺構をもつものであろう。南壁際中央に半円形の浅い土塗がある。周溝は東寄りに一部、残存している。東隅の壁は削平され、遺存しない。なお、鉄器片 (Fig.139の3) が出土している。

第15号住居址 (Fig.22)

第II地点発掘区の北東寄りに位置する。長軸5.2m、短軸4.32mの長方形を呈し、長軸方位はN-76°-Wである。主柱穴はP1・2の2個と考えられる。P1・P2とも径48cm程の楕円形気味のもので、中に径18cm程の小ピットがみられる。やや北寄りの東西方向で、心心距離は2.8mである。炉は床面中央部にあり、炉内より焼土も検出された。北辺の東寄り付近には、焼土も多少混入した炭化物が、直径50~60cmの範囲にみられた。炉と南壁の中間に不整形の土塗があり、この土塗より、壺等の土器が多数出土している。床面はほぼ平坦である。西側が削平され、斜面になっている為、西壁部分はわずかに残存するのみであった。東側の壁高は36cm程度である。なお、住居址の全面から多量の土器が出土しているが、特に中央付近に多い。東北の角に器台4個が出土した。又、その他の遺物としては、石庖丁 (Fig.134の4・5) が西北寄りの床直上と東側中央付近上層から出土。ガラス玉 (Fig.140) が東南付近より4個出土。

第16号住居址 (Fig.22)

第15号住居址の南に位置する。長軸5.3m、短軸は西側が斜面になっており、西壁を欠くが、4.3m程と思われる。長方形を呈し、長軸方位はN-19°-Eを示す。主柱穴はP1・2の2個で、炉を挟

んで南北方向にある。P 1 は径約45cm、深さ15cm。P 2 は径約24cm、深さ18cm程である。2個の心心距離は3.04mである。炉は床面中央よりやや南寄りにあり、炉内に焼土も検出された。北側短辺沿いにベッド状遺構が設けられている。この東側には細長い溝状のものが、延長して第15号住居址に続いているが、この溝は新しいものと思われ、本住居址には伴わないものである。周溝が東南角付近に残存している。東側の周溝は東壁際にある小形の土塙と繋がり終わっている。東南角から南側の壁も明確ではない。第17号住居址と切り合っており、新旧関係は本住居址の方が新しいといえるであろう。なお、出土土器は第15号、第17号住居址に比べ、少なかった。又、東壁付近より鉄器 (Fig.139の4) を出土している。

第17号住居址 (Fig.22)

第15号住居址の南側にあり、第16号住居址によって、全体の1/4近くを切られている。西北部を欠くが、長軸7.24m、短軸5.52mの長方形を呈す。やや大形の住居址である。長軸方位はほぼ東西である。主柱穴は不明である。炉を挟み南北に並ぶピットもみられるが、深さや位置等にやや疑問がある。炉は床面中央。長径1.32m、短径1.08mの楕円形で大きい。炉内より焼土も検出されている。南側長辺の中央、壁より約40cm程離れた所に長方形の土塙をもつ。大きさは152×80cm、深さ約25cmである。床面は西側でやや低くなっている。壁高は10~30cmである。本住居址からは夥しい量の土器片が出土し、特に中央部に重なり集中していた。上層下層の別なく出土している為、廃棄されたものであろう。その他の遺物としては、石庖丁が2個 (Fig.134の9・12)、砥石が1個 (Fig.138の5)。東側より鉄器2片 (Fig.139の5・6)、ガラス玉が東側中央付近に1個と中央付近に2個。やや西寄りで1個の計4個 (Fig.140) が出土している。

第15号住居址出土土器 (Fig.23~25)

器種は甕・壺・小形鉢・器台・支脚がある。甕は2~14・25・27。いずれも「く」字口縁であるが2~5は口縁部直下に三角凸帯を一条めぐらすもの。2・6・11・13は口縁部がやや肥厚し膨らみをもつものである。9は小形で直立気味の胸部より緩やかに外反する。25は口唇部が薄くなり丸味をもつ。13は張りの少ない胸部より弯曲し口縁をもち、27は胸部から口縁部にかかる部分でやや巾をもち、口縁部が短く外反する形態を呈す。胸部外面はほとんどハケ目調整がみられ、内面もハケ目調整、或いはヘラナデである。壺は1・5~24・26で、1は朝顔状に開き口縁上部内面が斜めの平坦面をなし、段をもつもので口唇端に刻み目が施されている。24は平底。球形胸部に外反する口縁をもつもの。15~22は逆「く」字口縁をもつものである。逆「く」字口縁の中で、口縁上部が内弯気味に内傾する(15・19・20)とやや外弯気味に内傾する(16~18・21・22)がある。又、18は内傾が少なく口唇端が薄くやや外反し、19は屈曲部がかなり丸味をもち、20は屈曲部に3mm程の巾の突出をもち、頸部が短く大きく弯曲するなど、個々に形態の違いをみせている。総体的には口縁上部が、内弯気味に内傾するものの方が古いといえよう。28~31は小形鉢で、30は手捏ねである。32~40は器台。32・34~39はぐびれが上方にあり、受け部、脚部とも開くもの。33・40は脚部中間がやや筒状を呈し、受け部が開くものである。外面はハケ目調整がほとんどであるが、37は叩き目が施されている。41は頂部に孔をもつ支脚である。

第16号住居址内出土土器 (Fig.26)

甕・壺・鉢・高杯・器台・瓷形器台がある。甕は2で、直線的に開く口縁直下に形の整っていない

刻み目のある凸帯をめぐらしている。内外面にハケ目調整。1の壺は口縁上部がやや外弯気味に内傾する逆「く」字口縁で、外面屈曲部がやや突き出ている。4の鉢は大形のものである。7は高杯の脚部で、接合部内面の中央に孔を1個もっている。外面はヘラ削りがされている。器台は5・8~11で、小形で筒形を呈すもの(5)と、くびれ部が上方にあるもの(8・10)とがある。9は緩やかにくびれている。内外面ともにハケ目調整がほとんどであるが、5はヘラ削りがみられる。沓形器台の6は、頂部がやや斜めで孔をもつものである。

第17号住居址内出土土器 (Fig.27~30)

器種は壺・壺・長頸壺・鉢・高杯・器台・沓形器台・支脚・小形土器である。1・2・5~14は壺で、「く」字口縁の直下に三角凸帯をもつもの(1・2・5)と、もたないものがある。1は大形の壺である。2はくびれ部や下方に凸帯がめぐらされている。6は緩やかな「く」字形を呈すもの。口唇端部がヨコナデにより、中央がやや凹んでいるもの(2・5・11・12)もある。内外面にハケ目調整がされているものが多い。壺は朝顔状に開く口縁のもの(3・4・19)、やや丸味をもつ平底に球形胴部がつき、口縁がやや外反する(20)、胴中位よりやや上方が張り出し、緩やかな弯曲を呈し口縁がわずかに外傾する(22)。逆「く」字口縁をもつ(15~17)がある。17は口縁上部が短く内弯気味に内傾するもの。15・16は外弯気味に内傾するものである。18は逆「く」字形に近い二重口縁で、内傾が少なく屈曲部が下方に下がり気味に突き出ている。口縁部外面には7~8本のほか、等間隔の四線文が一周している。屈曲部下、接合部分には指先の圧痕がめぐり頸部はハケ目調整が行なわれている。この土器は、弥生時代後期前半の四線文の盛行する中国地方系の様相を呈しており、本遺跡においては特異なものである。21の長頸壺は丸底である。23~26・28は鉢である。23は丸底に近い底部で口唇端がわずかに外傾する。24は丸底。25は平底で口唇部は丸味をもつ。26はやや丸味を帯びる平底の深鉢。28は大きく外反する口縁をもつ鉢形であるが、脚部がつく可能性もある。29~33は高杯である。29はやや内弯気味に立ちあがる。杯に明瞭な稜をもち、口縁が大きく外反するもの。30は内外面に明瞭な稜をもち、口縁が外反するもの。器台は35~46で、くびれ部が上方にあり、受け部が朝顔状に開き、受け部端に刻み目をもつもの(35~38)と、刻み目をもたないもの(39~42)。受け部、裾部とも開き中間でやや筒状を呈すもの(43・44)がある。又、脚部も開きが少なく筒状に近いもの(37・38・42)と、「ハ」字形に開く(39・41・45・46)がある。外面はほとんどがハケ目調整であるが、46は叩き目である。沓形器台は48で、外面と頂部に叩き目がされ、頂部中央に孔をもつ。支脚(47)は頂部に孔をもち脚が開く。内面の孔下方にしづり痕がある。27は鉢形の小形土器で手捏ねである。

第18号住居址 (Fig.56)

発掘区の西側南寄りに位置する。長軸3.84m、短軸2.84mの長方形を呈すが、北辺東寄りに突出する部分がある。主柱穴は西寄りのベッド状遺構際の径15cm程のビット以外は、見当たらず不明である。炉は床面中央やや南寄りにあり、炉内より焼土が検出された。又、炉の周囲に直径1m程の範囲で炭化物もみられた。南壁際中央にやや小形の楕円形土塙がある。ベッド状遺構は西側短辺沿いにあり、一方にのみ設置されている。ベッド状遺構の西側中央部から西壁にかけて、面が大部分、斜めになつていて、床面は平坦。壁高は西側を除いては35cm程度である。長軸方位はN-81°-Eである。なお、出土土器は本住居址の中央付近の上層に多く、その他に、ガラス玉が1個(Fig.140)、炭化物の層

の直上から出土している。

第18号住居址内出土土器 (Fig. 31)

甕・壺・小形壺が出土。2～4は甕で「く」字口縁をもつ。2はかなり口径が広く、胴部も直立気味である。3と4の口縁部はヨコナデ、胴部にハケ目調整がみられる。1の壺は内弯気味に内傾する逆「く」字口縁である。5・6は平底底部。7は小形壺。やや丸底気味で厚く、口縁部は短く直立し更にやや外反して薄くなる。赤褐色を呈し、下半にススの付着がみられる。

第19号住居址 (Fig. 57)

発掘区の中央部で、第20号住居址の北東3.8m（最短距離）に位置する。長軸4.66m短軸3.76mの長方形を呈する。長軸方位はN-27°-Wである。主柱穴はP 1・P 2の2個と考えられる。P 1は長径30cm、深さ約14cmで、掘り込みが少なく、やや疑問を残す。P 2はベッド状遺構の中間にあり、長径40cm、深さ約19cmである。南北方向で西側に寄り気味となっている。ピット間の心地距離は3mである。P 1の東側並びのピットも関連のあるものかどうかは不明。炉は床面中央よりやや西寄りにある。焼土は炉内から検出されている。西壁際中央には長径90cm、短径62cmの楕円形を呈す土塗がある。ベッド状遺構が南北の両端辺沿いにある。床面は西側が若干低くなり、壁高も南西部ではわずかに残存する程度である。

第19号住居址内出土土器 (Fig. 32-33)

多数の土器片が出土している。器種は甕・壺・鉢・器台。1～3・5・6は甕である。1～3は比較的小形のもので、1と2は緩く外反する短い口縁をもち、明瞭な稜がみられない。1は平底で内面底部近くに、わずかにハケ目が残存する。2は外面ハケ目調整。胴部内面に部分的に指圧痕がみられる。3は「く」字口縁にやや短く丸味をもつ胴部がつき平底である。5は逆「く」字形に近い口縁で、内外面ともにハケ目調整。6は底部端がやや丸味を帯びる平底である。7・8は逆「く」字口縁の壺である。7は口縁部上方が外弯気味に内傾し、屈曲部外面が8mm程の巾で突出しており稜が明瞭なもので、頸部直下に小さい三角凸帶一条と胴部の最大径の部分より、やや下方に刻み目をもつ丸味のある台状凸帶一条をめぐらす。内外面ともハケ目調整。口縁部内面と突出部の下面に明瞭な指圧痕が等間隔に並んでいる。8は若干、内弯気味にやや内傾し、屈曲も緩やかなもので、頸部上方の弯曲も7ほど大きくはない。やはり、頸部直下に三角凸帶一条をめぐらし、内外面にハケ目調整がみられる。7は8よりも後出するものであろう。4・9は鉢である。4は平底で口縁部が緩やかに外反するもの。上方に行くに従い器厚が薄くなっている。9は厚手の平底から立ちあがり、口唇端が平坦面をなすものである。10・11は器台。筒状を呈す脚部中位に裾部が開くもの（10）と、上方で緩やかにくびれ、受け部、脚部とも開くもの（11）があり、11は受け部端、脚部端に稜がみられる。内外面ともにハケ目調整が行なわれ、内面は上方、下方で更にナデがされている。

第20号住居址内出土土器 (Fig. 34の1・10・11)

1は高杯ではほぼ完形である。口縁部との接合部に稜を持ち、外反し聞く杯部に柱状部が長く、裾部が緩やかに広がる脚がつくものである。脚部外面の上方はヘラ削り、脚部下方は内外面ともにハケ目調整である。杯部がやや斜めに傾いて接合されている。10は直立する胴部に肥厚して外反する甕の口縁。11は平底の底部で、内外面にハケ目調整がされている。

第21号住居址内出土土器 (Fig. 34の 2 ~ 9・12・13)

甕・壺・鉢・器台がある。甕は「く」字口縁で、やや大形のもの（3・4）と、小形のもの（12）があり、内外面ともにハケ目調整である。12の内面底部付近は指によりナデ押さえがみられる。壺は外弯気味に内傾し、屈曲部がやや突き出る逆「く」字口縁のもの（7・8）と、直口壺（9）、頸部に連続する刻み目をもつ台状凸帯をめぐらす大形のもの（2）がある。鉢は13のみで、口縁が短く強く外反し、平底である。器台は中位が筒状を呈す（5）と、「ハ」字形に開く脚（6）がある。

第20号住居址 (Fig. 57)

発掘区の中央部のやや南寄りに位置する。長軸5.5m、短軸4.4mの長方形を呈す。主柱穴はP 1・2の2本柱か、或いは、P 3～6の4本柱が考えられる。P 4とP 6は形態が似ている。炉は床面中央部で焼土を作っている。ベッド状造構は北側短辺沿いと南側短辺沿いの西半に設置されている。南西隅の壁は削平され確認できなかったが、ベッド状造構設置とみてよいであろう。周溝が北壁際と東壁際に残存している。なお、東側の炉との中間から高杯が出土。

第21号住居址 (Fig. 58)

5.9×4.66mの長方形を呈す。西側を試掘溝が切り西南角を欠く。主柱穴はP 1・2の2個。炉は中央部で焼土を作り、東辺中央に両端に小ピットがつく楕円形の土塙があり、出入口の可能性をもつ。北辺の東半、南辺の西半にベッド状造構がある。東南部で石窓（Fig. 134の8）。東壁側で鉄器（Fig. 139の7）を出土。

第23号住居址 (Fig. 59)

Gn-10西側に位置する。7.9m×6.64mの長方形を呈し、長軸方位はN-49°-Eを指す。本住居址は上面をかなり削平されており、壁高は最も残りの良い所で26cmを測るに過ぎない。

主柱穴はP 1～P 4の4個。柱間の距離はそれぞれ、P 1～P 2間3.84m、P 3～P 4間3.84m、P 1～P 3間2.84m、P 2～P 4間2.64mを測る。中央には不整長方形の炉を持つ。ベッド状造構は北側短辺の東角にあり、その位置に周溝が残存する。また東側長辺際からは方形の土塙が検出された。

第23号住居址内出土土器 (Fig. 35)

3は壺で、球形の胴部に強く外反し中央でやや肥厚する口縁を持つ。口縁部はヨコナデ。胴部はハケ目を施す。6・7は鉢であると思われる。6は半球形を呈し、口縁端に僅かな凹みが見られる。外面はヘラ削りとナデ、内面はヘラ削りがされている。7は緩く外反する短かい口縁が、丸味を帯びた胴部につく。底部は丸底であろう。1は高杯。2・4・5も高杯であるが、脚部を残すのみである。1は口縁端と握部を欠く。杯部は直線的に大きく開く底部から覗く屈曲、直立し、さらに外に大きく開く。脚部は柱状で、屈曲部から下が欠損している。磨滅により調整痕は不明。4・5もほぼ同様な形態をとると思われる。4の脚部には明瞭なヘラ削りが認められる。5は杯との接合部を削り形を整えた跡が見られ、支脚として使用された可能性がある。2は裾部に段がつき、屈曲部とその上方に45°位置を変え計8個の円形透孔がある。

第24・25号住居址 (Fig. 60)

第24号住居址を埋め、約1cmの貼床を施し、第25号住居址を構築している。

第25号住居址は長方形を呈すものと思われるが、西壁を削られて不詳。主柱穴はP 1・2の2個。中央に台形の炉を持つ。東壁際に土塙と周溝が検出され、土塙からは砾石が出土した（Fig. 135）。

また鉄器の出土もある (Fig.139)

第24号住居址は残存状態が悪く、形態不明である。

第26・27・33号住居址 (Fig.61)

Gn—9 西側付近に位置する。第26・27・33号住居址は重複しており、27号住居址の後に26・33号住居址が構築されている。

第26号住居址 5.5m×4.3mの長方形を呈し、長軸方位はN-21°-Eを指す。主柱穴はP 1・2の2個。中央南寄りに長方形の炉が検出された。ベッド状造構は両短辺に位置する。周溝はほぼ全周している。床面には5~7cm程黄褐色粘土の貼床が認められた。なお2個の砥石の出土がある (Fig.136の4・5)。

第27号住居址

26・33号住居址に切られており、規模不詳。東壁際南半分にベッド状造構がある。柱穴は不明。炉・周溝は検出されなかった。ガラス玉の出土がある (Fig.140)。

第33号住居址

3.96m×2.7mの長方形を呈し、長軸方位はN-11°-Eを指す。主柱穴は不明。中央に方形の炉を持つ。東壁の北半は削平されている。砥石1個が出土した (Fig.135の6)。

第26号住居址内出土土器 (Fig.37)

1は壺で、「く」字口縁をなす。両面共ハケ目調整。3・5は支脚である。共に頂部に穿孔があるが、3は面が斜めで、脚は「ハ」字形に開き、裾部でさらに開く。5の頂部は平坦面をなし、上方でややくびれ、裾は内弯気味に大きく開く。

第27号住居址内出土土器 (Fig.38)

1・6・9は壺で、1は逆「く」字口縁。口縁端は内外面共に僅かに突出している。7・8は甕で、7は直線的な胴部にハネ上がり気味の強く外反する口縁を持つ。8は張りの少ない胴部より緩やかに外弯する口縁部。共にハケ目調整がなされる。3・4・5は器台の脚部。3は内面端が突出している。4は裾が緩やかなカーブをもって開き、端部に丸味を帯びる。5は直線的に開く。3・4・5共にハケ目調整。2は鉢で尖り気味の丸底を呈し、大きく開く胴部にさらに外反する口縁部がつく。調整は内外面共にハケ目。10は高杯の裾部。緩やかなカーブで大きく開く。内外面共にハケ目調整がなされる。

第33号住居址内出土土器 (Fig.36)

3・4は壺で、3は大きく外弯して開く。4は外反する口縁で、丸味を帯びた端部はやや外側に引き出されている。1・2は甕で、1は外弯気味に外反する。2はやや強く外反する口縁。7は鉢で、平底より急に立ち上がりが深い。8・9・10は器台の受部で、直線的に開くもの(8)とややカーブを持って開くもの(9・10)とがある。

第31号住居址 (Fig.62)

5.7m×4.9mの長方形を呈し、長軸方位はN-48°-Eを指す。検出住居址中最も残りが良く壁高56cmを測る。主柱穴はP 1・2と対応する2個(推定)の計4個が考えられる。中央に梢円形の炉を持つ。ベッド状造構は南側中央部を除き全周し、周溝も同様である。ベッド状造構の欠落部分にはベッド面と同レベルに黄色土を貼っており、黄色土下に検出された土壙と合わせて、この位置に出入りの施設のあったことが考えられる。なお、砥石が2個出土した (Fig.135の3・4)。

第31号住居址内出土土器 (Fig.39)

1は壺で、丸味のある胴部より立ち上がる二重口縁を持つ。2は鉢で、丸味を帯びた平底と緩やかに外反する口縁部。3・6は小形壺で、球形の胴部とやや外反し、直線的に立ち上がる口縁部を持つ。4も小形壺の底部と思われる。5は台付の壺で、球形の胴部に外反する口縁部がつき、口唇部でさらに短かく立ち上がる。7も台付の壺か、もしくは小形の高杯であろう。8~10は高杯で、8・9は杯の一部。8は屈曲部に明瞭な棱が認められる。9は屈曲部でやや段をなす。10は脚部で、緩やかなカーブを持って開く。下部に3個の円形透孔がある。

第35号住居址と土塙 (Fig. 63)

En-9 西側に位置する。第35号住居址と土塙は重複しており、第35号住居址の後に土塙が掘り込まれている。

第35号住居址

短辺は3.6m、長辺は用途不明の土塙に切られているが、おそらく4m程度と思われる。長軸方位はN-52°-Eを指す。壁高は28cm。

柱穴は不明であるが、D-D'間、北側の2個のビットなどは本住居址に帰属するとみてよいであろう。住居址中央に検出された楕円形の炉は深く掘り込まれており床面から24cmを測る短辺の半分にはベッド状造構が設置されている。周溝は断片的に認められた。また、長辺のベッド状造構が位置する側に方形の土塙が検出された。

土 塙

前述のように用途は不明である。第35号住居址より新しく、同住居址の南側を切っている。不整楕円形を呈し、規模はおよそ3.4×2.5m程度である。

第35号住居址内出土土器 (Fig.40の1~7)

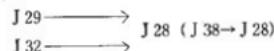
1・4は壺の口縁で、1は強く外反し、中央がやや肥厚する。口縁端は外に引き出される。内外共にヨコナデが施されている。4は弥生後期の逆「く」字口縁。流れ込みである。2・3は甕で、2は外反する短い口縁。3は外反する口縁で、外面の中央付近はやや肥厚する。口縁端は尖り気味である。5は完形の小形高杯。浅くほとんど直線的な受け部に緩やかなカーブをもって開く脚がつく。脚部下方には等間隔に5個の円形透孔がある。6・7も高杯で脚部を残すのみである。カーブを持たずにつまざく開き、端で屈曲して急に開く形式のものと思われる。

土塙内出土土器 (Fig.40の8・9)

8・9共に須恵器の蓋で完形品である。8はやや平坦な天井部に僅かに内傾する体部がつくが境は明瞭でない。9は器高が低く扁平で、端部は尖り気味である。いずれもヘラ削りを施す。

第28・29・32・37・38号住居址 (Fig.64)

H S-9 東側に位置する。5軒が重複、隣接しており、第28号住居址は第29号住居址および第32号住居址の後に構築されている。第38号住居址との関係はつかめていない。また第37号住居址と第38号住居址の新旧関係も確認できなかった。新旧関係をまとめると次のようになる。



第28号住居址

第29号住居址の東北角と第32号住居址の西北角をそれぞれ切っている。第38号住居址との関係は、同住居址の形態が不明であり確認できなかった。

5.36m × 5.36m のほぼ正方形を呈し、長軸方位は N - 4° - E を指す。壁高は 20cm を測る。

主柱穴は不明。中央や西北寄りに円形の炉を持つ。東壁際にベッド状遺構様の一段高くなつた部分があり、その中央には不整形の掘り込みが検出された。周溝は断片的に残存する。砥石が 1 個出土した (Fig.137 の 2)。

第29号住居址

第28号住居址と東北角部分が重複しており、本住居址は第28号住居址より古い。

5.36m × 3.6m の長方形を呈し、長軸方位は N - 32° - W を指す。壁高は 34cm を測る。

主柱穴は明確ではないが、P・2 の 2 個の可能性も考えられる。炉は住居址中央に位置し、床面から 5 cm 堀り込まれている。南側短辺と北側短辺の約 1/2 にはベッド状遺構が設置されている。また東側長辺際に残り掘り込みが検出された。石庵丁・砥石各 1 個が出土した (Fig.134・136)。

第32号住居址

西側部分が第28号住居址と重複しており、本住居址は第28号住居址より古い。

5.82m × 6.7m の長方形を呈し、長軸方位は N - 68° - W を指す。壁高は 16cm を測る。

主柱穴は炉を挟んで対応する P 1・2 の 2 個。住居址中央に方形の炉が堀り込まれている。ベッド状遺構は東側短辺に位置する。なお東壁北半は削平されている。周溝は断片的に残る。砥石が 1 個出土した。詳しくは Fig.135 の 5 を参照されたい。

第37号住居址 (Fig.17)

方形を呈すと思われるが、約 1/2 が発掘区域外に延びており、また第37号住居址との境界付近も明確でないため形態は不明である。住居址の規模は、炉が中央に位置していると想定すれば 1 辺がおよそ 3.7m となる。方位は N - 22° - W を指す。主柱穴は不明。東南角に一段高い部分がみられるが、これはベッド状遺構であったと考えられる。石庵丁・砥石が各 1 個出土した (Fig.134 の 1, Fig.137 の 3)。

第38号住居址 (Fig.17)

形態および規模は不明である。南側の 1 段高い部分は本住居址に伴つたベッド状遺構かとも考えられる。ベッド状遺構であるとすれば第28号住居址に切られているのであるが、炉の位置からみてそうではない可能性の方が強い。柱穴、周溝などその他詳細は不明。

第28号住居址内出土土器 (Fig.41)

1～5 は壺である。1・2・3 は二重口縁を持つ。いずれも屈曲部からさらに外反して開くが、1・3 は屈曲部より外弯気味に開き、2 は直線的にやや大きく開く。ハケ目調整が施される。4 は小形壺の胴部で、丸味球形を呈す。外面はヘラ磨き、内面はハケ目調整。5 は張りの強い胴部に外反し中位でさらに開く口縁部がつく。ハケ目が施される。6 は鉢で、丸底、器高は低く全体に丸味を帯びる。外面上部はハケ目。下部はヘラ削りがなされる。7 は支脚、もしくは器台の脚部。作りは粗雑である。8～10 は高杯で、8 はその杯部、外弯気味に外反し、端部中央はやや凹む。9・10 は脚部。低く大きく開き、下部に 4 個の円形透孔がある。11 は土錠で、算盤玉状を呈し、穿孔は片側からなされている。

第32号住居址内出土土器 (Fig.42)

1は壺の口縁で、大きく開き、内面に粘土を貼り付け肥厚させており、平坦面をなす。口縁端には粗い刻み目がつけられる。2は「く」字口縁の甕。6は手捏ね土器で、丸く小さい底部。

第37号住居址内出土土器 (Fig.43)

1～5は甕の口縁部で、外反する「く」字口縁をなす。調整はいずれもハケ目、あるいはハケ目の後にヨコナデを行なっている。6～13は壺または甕の底部で、明瞭な平底（7・9・10・11）やや丸味を帯びた平底（6・8・13）、丸底に近いもの（12）がある。14・15は鉢で、14は短く外反する口縁部。15は緩やかに外反し、内面が肥厚し稜をもつ口縁部である。16・17は底部欠損の杯であるが、台付であったと思われる。ともに杯部は半球形を呈す。18～20は高杯の脚部で、18・19は緩やかに開きながら裾部でさらに開く。18には3個の円形透孔がある。20は直線的な脚上部から内弯気味に急に開き、下部には4個の円形透孔がある。21・22・24は器台片。22は台付杯の台部である可能性もある。

第22・30・34・36号住居址 (Fig.65)

第22・36号住居址は重複しており、第36号住居址の方が新しい。第30・34号住居址も重複しており、これは第34号住居址が新しい。また第36号住居址の北壁際がベッド状遺構であれば、第30・34号住居址に切られていることになり、そうであるとすると4号の新旧関係は次のようになる。第22号住居址 → 第36号住居址 → 第30号住居址 → 第34号住居址

第22号住居址 長方形で中央に炉を持つ。主柱穴は不明。第36号住居址と重複している位置の南半はベッド状遺構と思われる。

第36号住居址 第30・34号住居址側の1段高くなっている部分は本址のベッド状遺構であった可能性もある。住居址中央に円形の炉が検出された。

第30号住居址 規模は不詳。東壁際に長方形の土塹が検出された。**第34号住居址** 長方形で中央に炉を持ち、両短辺にはベッド状遺構がある。主柱穴は不明。

出土遺物 (Fig.44) 1・3は第34号住居址からの出土。1は二重口縁の壺で、屈曲部からは垂直に立ち上がる。3は「く」字口縁の甕。2は第30号住居址出土の甕の口縁部。4・5・6・7は第36号住居址からの出土。4は屈曲部から僅かに外弯気味に内傾する逆「く」字口縁の壺。6は甕で、「く」字口縁に張りの少ない胴部を持つ。

③ 環濠 (Fig.66)**環濠内掘立柱遺構**

E-11坑をほぼ中心に位置する。6間×2間の建物址で、長軸の平均は7.47m、短軸の平均は2.67mを測る。長軸方位はN-57-Wを指す。各ピット間の距離および各ピットの径・深さは別表 (Tab. 4) に示した。

P7～P9を結ぶ線より西側は多くのピットが近接して掘り込まれており、建て替えられたことも考えられる。從って環濠内には2軒の建物が構築されていた可能性がある。その場合には東側が2間×3間、西側が2間×3間ということになろう。なお、P11・13・16に当たるピットは検出できなかった。

環濠

巾約160cm、平均の深さ約50cmで、断片は逆台形、平面形角丸方形の溝が、上述の建物址の周囲を

廻っている。南側には溝の中斷された部分があり、ここに出入り口を想定できよう。また出入り口と建物址との間は比較的広いスペースが設けられている。

溝内覆土の堆積状況はFig.55に示した。切断の位置はFig.66のS・P。各層の観察は下記のとおりである。

第I層 部分てきに炭化物を含有した暗褐色粘土層で、堅く粘性が強い。同層中より多量の土器片が出上している。他に10cm程度の角のとれた石も部分的に含む。

第I'層 第I層に比べ炭化物の含有量の少ない暗褐色粘土層。同層中からも多量の土器片出土がある。

第II層 暗茶褐色粘土層。堅く、粘性が強い。

第III層 茶褐色粘土層。堅く締まっている。

第IV層 黒褐色の腐植した粘土層。堅く、粘性は少ない。

第V層 黄褐色粘土層（地山）

上述のとおり本遺構は高床式の建物跡とそれを取り囲む溝からなっている。集落全体を廻る溝は知られているが、このようにひとつの建物のみに溝が廻らされる例は少ない。

周囲に掘り込まれた溝は建築物の重要性を物語る。高床式建物と環濠の必要性から求められる用途は収穫物の貯蔵用倉庫であり、想像を逞しくするならば、環濠は鼠除けの役割りを果たしていたものと考えられる。規模の大きさからは集落内の共同使用であったであろうことが推察できる。

遺物（土器）は溝内全面に渡って大量に出土し、特に第I・I'層に多い。出土状況からみてそれらは廃棄されたものと考える。個々の土器については後に述べるが、時期は弥生時代後期中葉～同終末期であり、この時期に渡って廃棄され続けたとは考えにくく、上層より出土した新しい部類のものはその後の流れ込みであろう。依って環濠は後期中葉までには構築されていたことになり、後期中葉に至って溝の使用が打ち切られたものである。環濠内の建物跡もおそらく同様と思われる。

第II地点内に検出された弥生時代の住居址の時期は後期後半に比定され、環濠が使用されなくなつた後に住居址が構築されているわけであり、それらの住居址と環濠との関連は一応無いものとみて差し支えない。また出入り口も住居址の位置する方向とは逆を向いており、環濠内倉庫を使用していた集落は第II地点発掘区域外に広がっていた可能性もある。

土器以外の出土遺物には石斧（Fig.133の3）と砥石（Fig.137の1）があるが、石斧は流れ込みと考えてよいであろう。

環濠内出土土器（Fig.45～54）

環濠内より出土した土器の器種には壺・甕・鉢・杯・高杯・器台・支脚があり、その他小形手捏ね土器がある。

甕（土器ナンバー1～18、20～33、35、53、62、84）（Fig.45～48・52）

口縁部のあるものは全て「く」字口縁を呈す。1・5・8はくびれ部直下に1条の三角凸帯を有す。1・8は口縁部が緩やかに外反しや厚手で、端部にはヨコナデによる凹みがみられる。5は1・8に比べ器壁は薄く口縁部は外弯気味である。8にはハケ目が施される。他は器面磨滅のため不明。2・9・10・18・22・23・53は外反する口縁が直線的に開き、口縁部外面の中位が肥厚気味のものである。2・9・22・53は端部が僅かに引き出されている。調整は概ねハケ目であるが、22にはヘラ磨き

がなされる。9はほぼ完形で、稜の明瞭でない平底を持ち、底部には不定方向のハケ目がみられる。7・11もやはり外反する口縁が直線的に開くのであるが、端部にかけて僅かに外弯する。11はハケ目調整がなされ、底部の稜は明瞭でない。4・29は強く外反する口縁で、直線的に開く。肩部の張りは少ない。ハケ目調整がなされる。3は強く外反し口縁部にかけて外弯する。13・14・28は比較的張りの少ない胸部に緩やかに外反する口縁部がつく。くびれ部内面には明瞭な稜が認められる。ハケ目調整がなされる。13の下半はヘラ削りがなされ、底部はやや丸味を持った平底を呈す。12は短く外反する口縁が緩やかなカーブをもつ胸部に続く。底部は僅かに直立する部分をもつ。器壁は全体に厚手である。ハケ目調整がなされ、下部はヘラナデが行なわれる。15は明瞭な平底からくびれをあまりもたない比較的器高の低い胸部が続き、短く外反する口縁部がつく。端部は薄く尖り気味。ハケ目調整がなされる。6・24・25・26・30はね上がり口縁を持ち、やや外弯気味に外反する。ハケ目調整がなされるが、26の口縁部外面には叩き目様の痕跡が残る。蒲田・水ヶ元周辺遺跡からはね上がり口縁の出土が多く、当遺跡においても多量の出土が予想されたが、その数は少ない。

壺（土器ナンバー19, 34, 36~58, 60, 61, 63）(Fig. 47, 48, 40~50)

36~40, 42~45は逆「く」字形を呈する口縁部である。37は屈曲部からの立ち上がりが内弯気味で、反転の角度は比較的緩やかである。外面はハケ目調整がなされ、頸部内面はヘラ削りがなされる。38は屈曲部からの立ち上がりが直線的で、内面の稜は明瞭である。36・39・42・43は屈曲部からの立ち上がりが外弯し、屈折の角度はやや鋭い。36・42・43はその端部が外に引き出され、43に特に著しい。いずれも器面は磨滅しており調整痕は明らかでないが、部分的にハケ目の痕跡がみられる。40・44・45は屈曲部からの立ち上がりが直線的で、40はほとんど直立に近い。44・45は頸部へ続く部分のカーブが大きい。ハケ目調整がなされる。

41・46は頸部と胸部との接合部で、41は1条の、46は2条の三角凸帯を有す。47・60は張りのある大きな胸部に外反する口縁部がつく。47の口縁部外面は直線的であるが、内面は中位でやや肥厚する。口縁部外面はヨコナデ、胸部外面はハケ目、内面はハケ目およびヨコナデがなされる。48は丸味のある平底を呈し、球形の胸部をもつ。最大径を測る位置に断面「コ」字形の凸帯がつけられ、楕円形の刻み目が施される。外面はハケ目、内面はヘラナデがなされる。

19, 34, 49~52, 54~58, 63は球形の胸部に外反する口縁部がつく。34、57は口縁部が直線的に外反し、内面はやや肥厚する。57の端部は外に引き出されている。ハケ目調整がなされる。49・52は平底に球形胸部がつき、外反する口縁部へと続く。49の口縁端は平坦面をなし、52は尖り気味である。調整はハケ目。50は丸底に球形胸部がつき、やや強く外反する口縁をもつ。口縁部外面は中位で僅かに肥厚する。口縁部は内外面ともヨコナデ、胸部にはハケ目が施される。51は丸底に近い底部で、球形の胸部がつく。口縁部は短かく僅かに外弯気味に立ち上がる。口縁部外面はヨコナデ、他はハケ目調整がなされる。54・56は胸部中位で大きく張り出す。54は外弯気味の口縁部がつき、端部は尖り気味である。ナデによる調整がなされる。56は平底を呈し、口縁部は54と同様であると思われる。

61は外反する口縁下に断面三角形の凸帯を1条有す。凸帯には刻み目がつけられる。口縁部はヨコナデ、内面下方はヘラ削りがなされる。

器 台 (土器ナンバー64~83) (Fig.51・52)

72はくびれ部分が明瞭でなく、受け部と裾部の径はほぼ等しい。内面中位に稜をもつ。内外面ともにハケ目調整がなされ、口縁端はヨコナデである。70は全体に細く、受け部の開きは少ない。くびれの位置は低く、下から約3分にある。受け部、脚部ともに直線的に開き、外面受け部はヨコナデ、脚部はハケ目、内面受け部はハケ目、ナデ、脚部はヘラ削りがそれぞれなされる。69・75は受け部および脚部が直線的に開き、くびれの位置は上方にある。やや小形。いずれもハケ目調整である。67は器高に比して径が大きい。受け部、脚部ともに直線的に開く。ハケ目とヨコナデによる調整がなされる。64・68・73は直線的に開く脚部に、外弯気味で端部が内側上方に突出する受け部がつく。64の受け部端には刻み目が施される。また脚部内面は内側に引き出されている。外面は叩きの後ハケ目調整がなされ、脚下部には叩き日痕が残存する。65・77・82は内弯気味の脚部をもつ。65には直線的に開く受け部がつく。脚部下方は叩き、上方はハケ目調整。77・82はいずれもハケ目調整がなされる。

器台の形態の変化は、時期差とともに上にのせる器種の違いも考慮に入れなければならないと思われる。

鉢 (土器ナンバー85~90・99) (Fig.53)

85・86は尖り気味の丸底に大きく開く脚部がつき、さらに大きく外反する口縁部がつく。内面反転部分の稜は明瞭で、86は内面に粘土を貼り付け肥厚させる。ハケ目調整がなされ、86はその上からヘラナデが行なわれている。88は半球形を呈し、端部は丸くおさめる。外面はハケ目調整がなされる。89は平底を呈し、器高は深く、端部は内弯気味に直立する。ハケ目調整がなされる。

高 杯 (土器ナンバー103~110) (Fig.54)

103は丸味を帯びた杯下部より反転して大きく開く口縁部がつく。口縁は僅かに外弯気味。脚は直線的にのび、裾は大きく開く。杯部内面はヘラ磨き、外面はヘラナデがそれぞれ行なわれている。104・105は杯部中位に稜をもち、外弯しながら外反する口縁部がつく。器面磨減のため調整痕は不明である。

支 脚 (土器ナンバー111~114) (Fig.54)

112は杏形容器台で、頂部に穿孔がなされる。穿孔は外面から行なわれる。脚部は「ハ」字形に直線的に開き、ナデによる調整がなされる。111~113・114は内弯気味に開く脚部である。111の頂部には穿孔がなされる。内外面ともにハケ目調整。115は中位やや上方にくびれを持ち、上下に開く。器面の凹凸が激しく器高は一定しない。

小形土器 (土器ナンバー91~98, 100~102) (Fig.53)

91は小形壺で、やや丸味をもった平底に中位の張り出した胴部をもつ。口縁部は欠損するが外反気味の直立に近い口縁部と思われる。調整は外面胴部がヘラ磨き、内面上半はナデ、下半にはハケ目がそれぞれなされる。92・94・97・98・100・101は手捏ね土器。92は平底で、器厚が厚い。他は丸底かそれに近い底部をもつ。概ね指頭によるナデ、押さえがなされ、作りは稚である。102もやはり手捏ねの土器で、小さな平底に細く深い胴部がつき、口縁部は内弯するタコ壺様の器形を呈している。器面磨減のため調整痕は明瞭でなく、部分的にヨコナデ痕の残存がみられる。

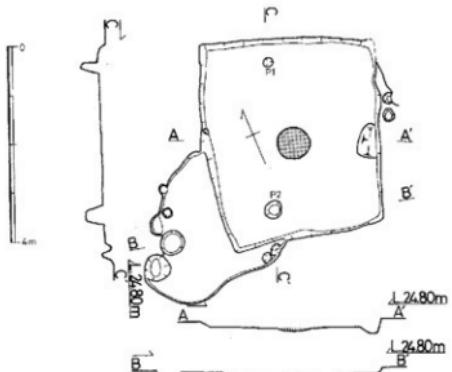


Fig. 18 第10号住居址実測図 (縮尺1/100)

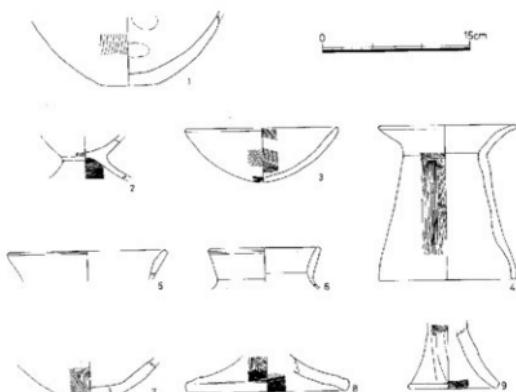


Fig. 21-1 第14号住居址実測図 (縮尺1/100)

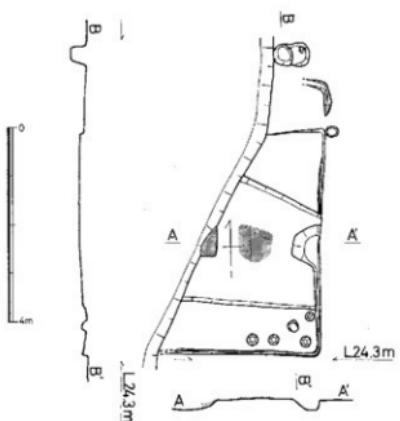


Fig. 19 第11号住居址実測図 (縮尺1/100)

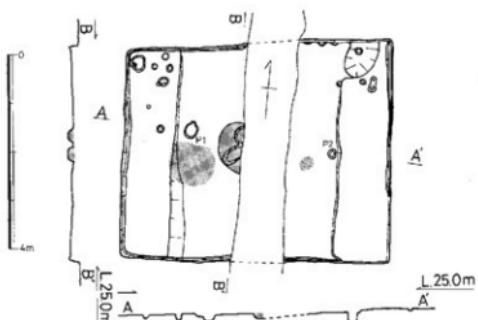
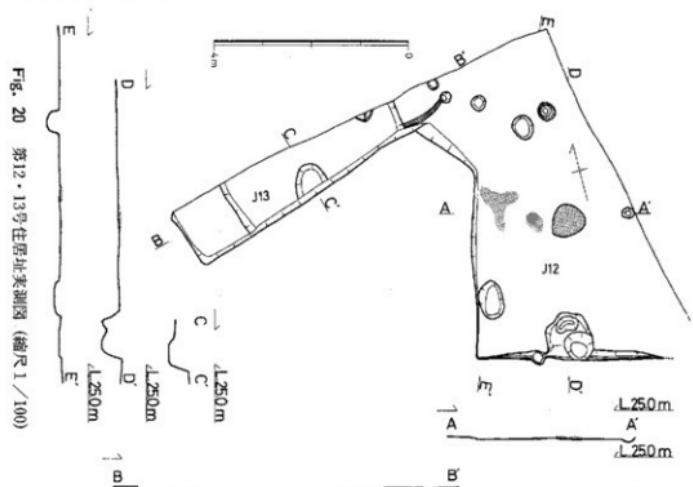


Fig. 21-2 第10・11・14号住居址内出土上器実測図 (縮尺1/100)
1~3 (J10) 4 (J11)



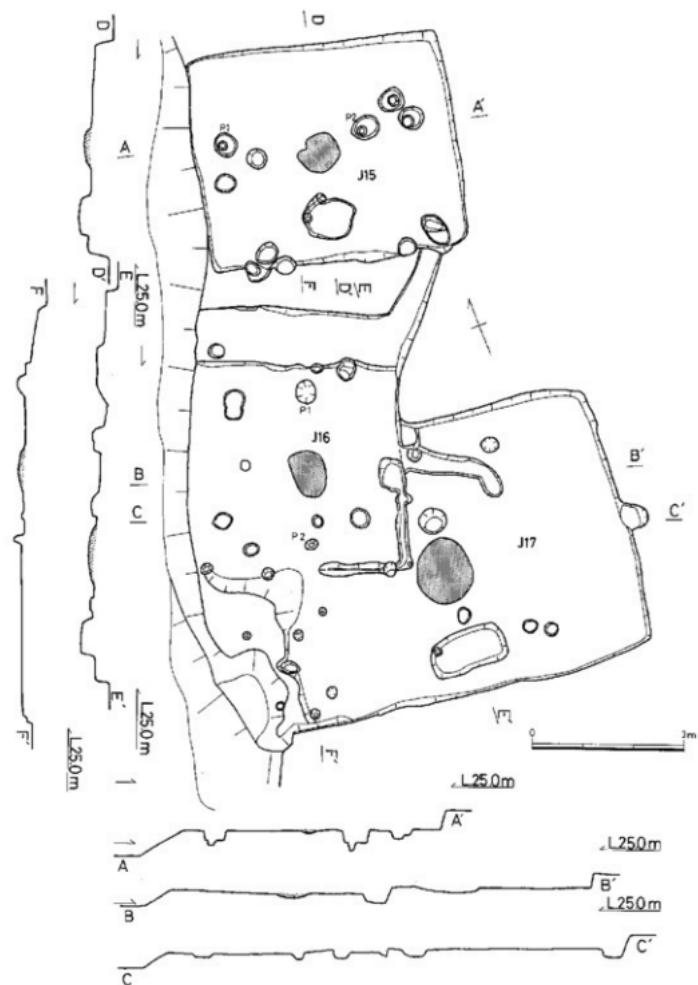


Fig. 22 第15・16・17号住居址実測図 (縮尺 1/100)

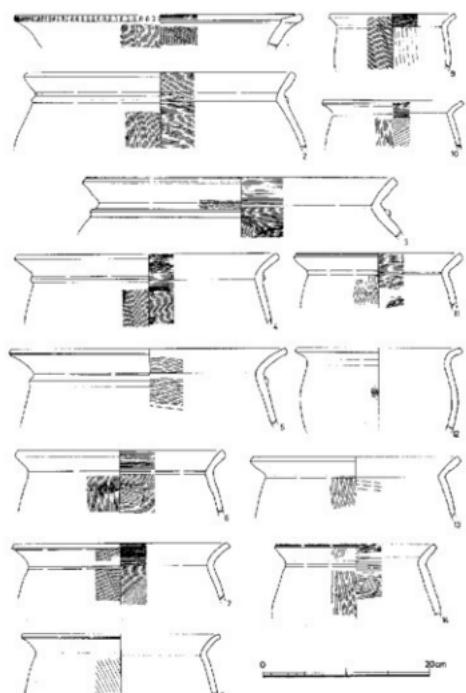


Fig. 23 第15号住居址内出土土器実測図（縮尺1／6）

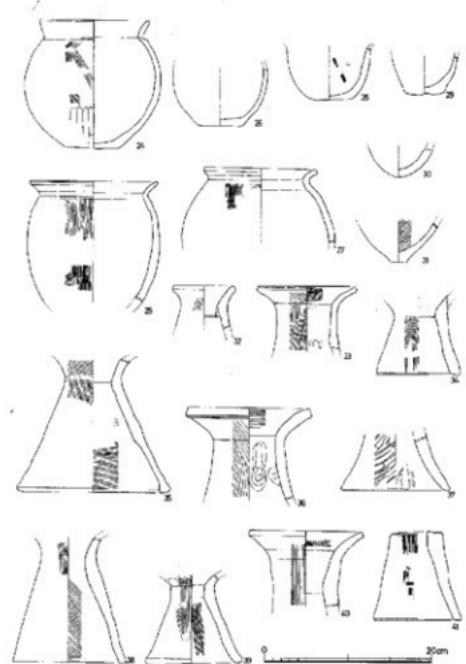


Fig. 25 第15号住居址内出土土器実測図（縮尺1／6）

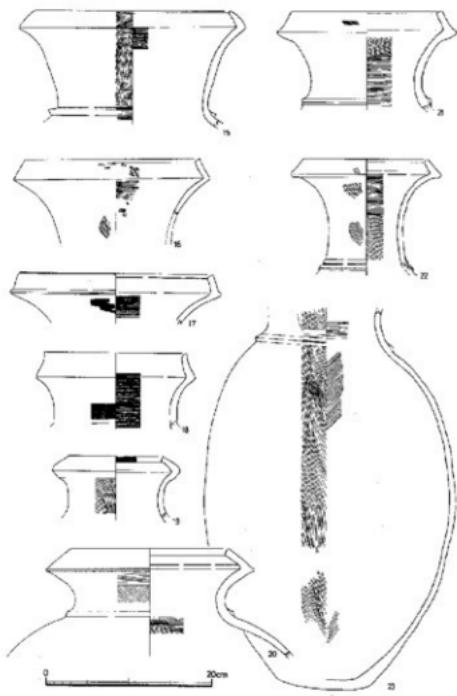


Fig. 24 第15号住居址内出土土器実測図（縮尺1／6）

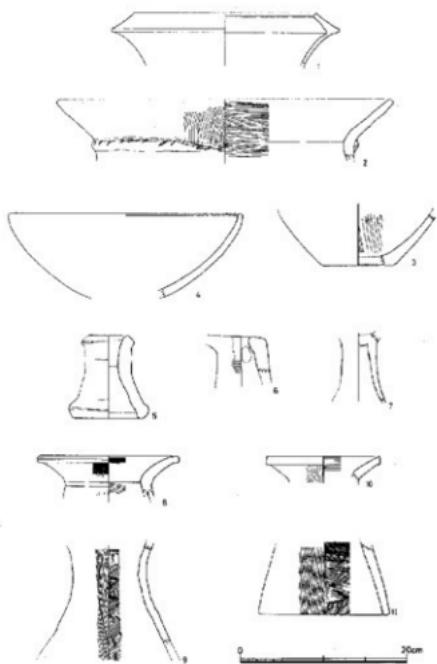


Fig. 26 第16号住居址内出土土器実測図（縮尺1／6）

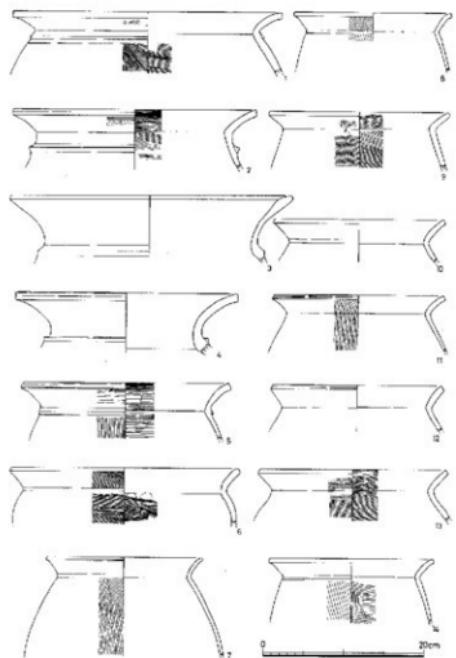


Fig. 27 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

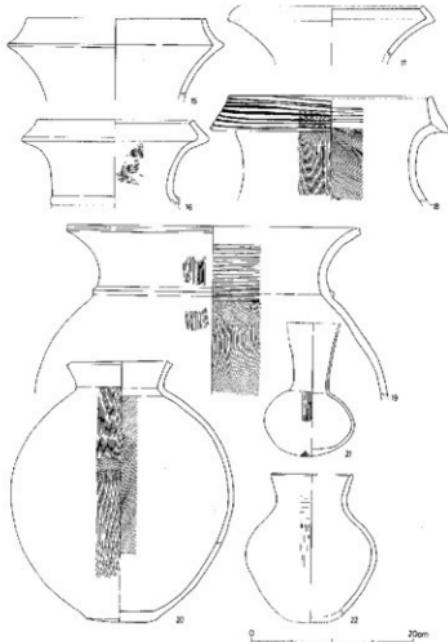


Fig. 28 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

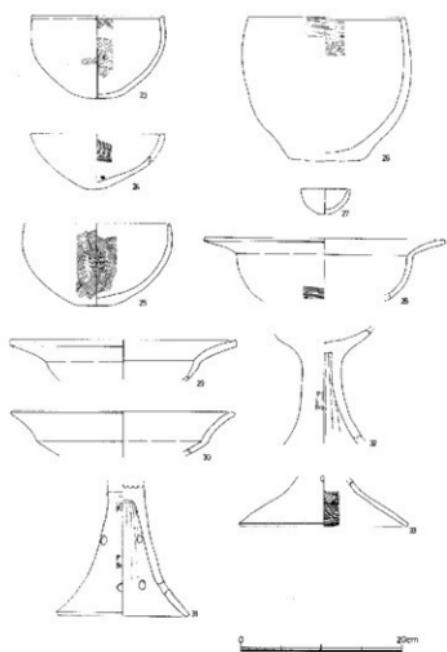


Fig. 29 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

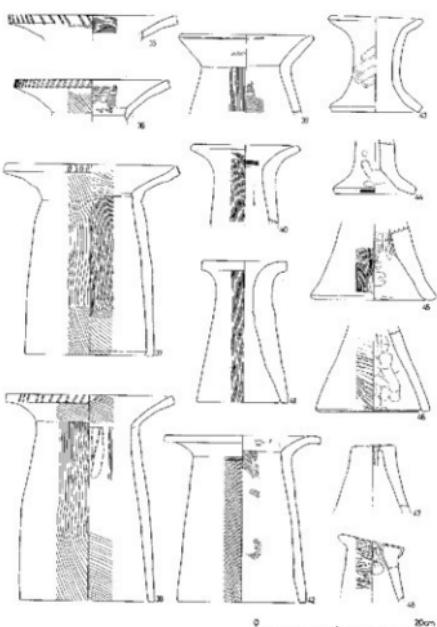


Fig. 30 第17号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

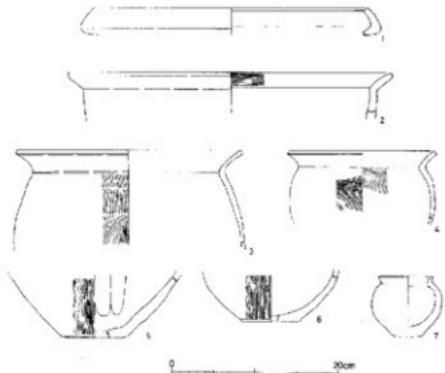


Fig. 31 第18号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）（上）
Fig. 32 第19号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）（下）

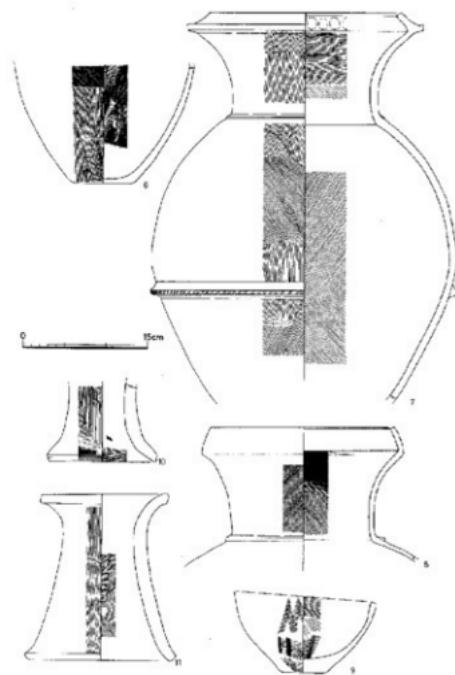


Fig. 33 第19号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

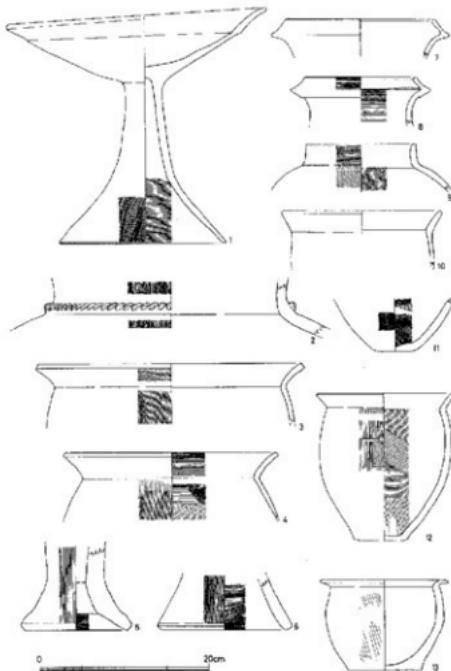


Fig. 34 第20・21号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）
1・10・11(J20), 2～9・12・13(J21)

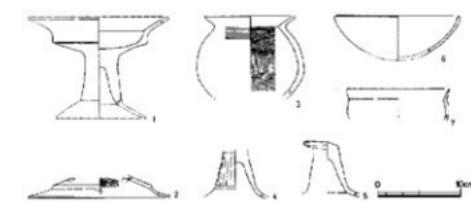


Fig. 35 第23号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

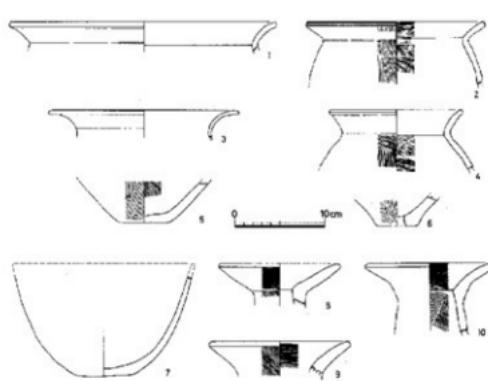


Fig. 36 第33号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

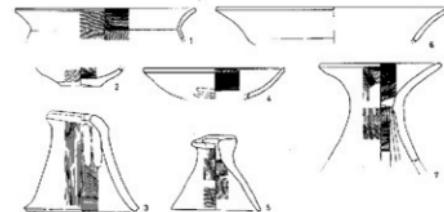


Fig. 37 第26号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

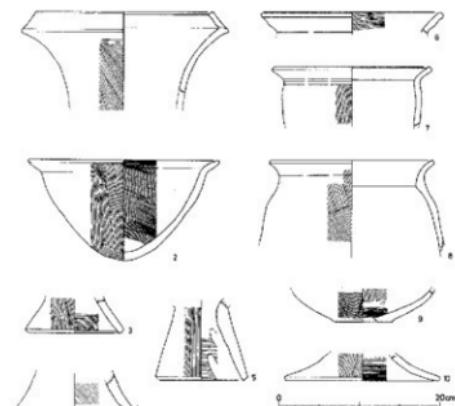


Fig. 38 第27号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

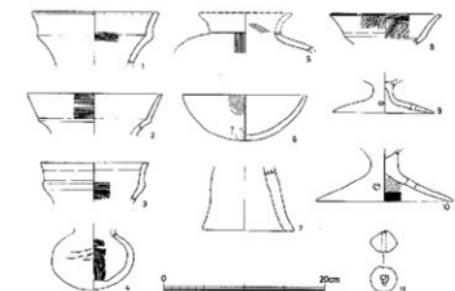


Fig. 41 第28号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

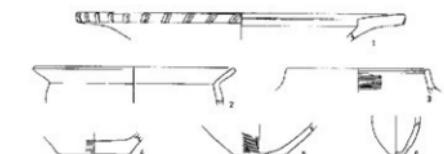


Fig. 42 第32号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

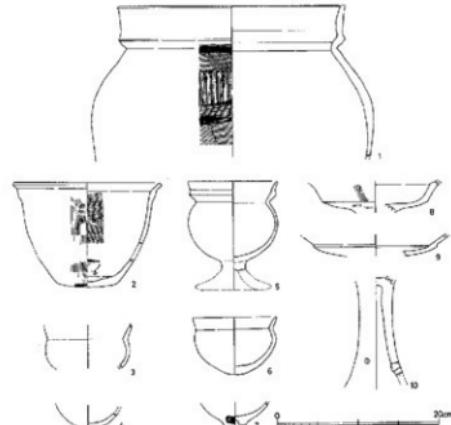


Fig. 39 第31号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

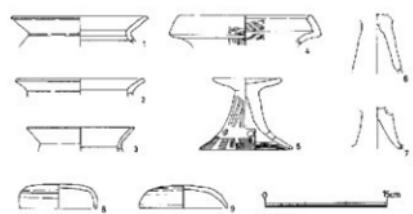


Fig. 40 第35号住居址とそれを切る工具内出土土器実測図（縮尺1/6）

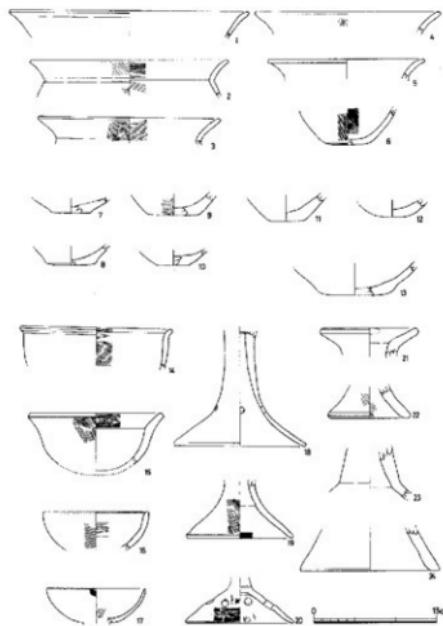


Fig. 43 第37号住居址内出土土器実測図（縮尺1/6）

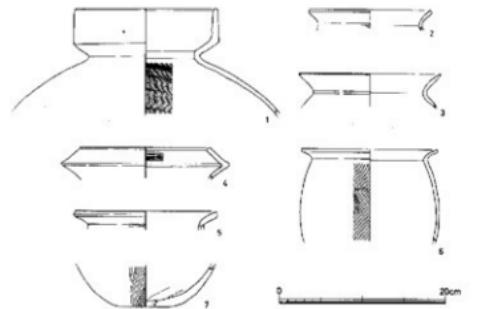


Fig. 44 第30・34・36号住居址内出土土器実測図（縮尺1／6）
2 (J30), 1・3 (J34), 4~7 (J36)

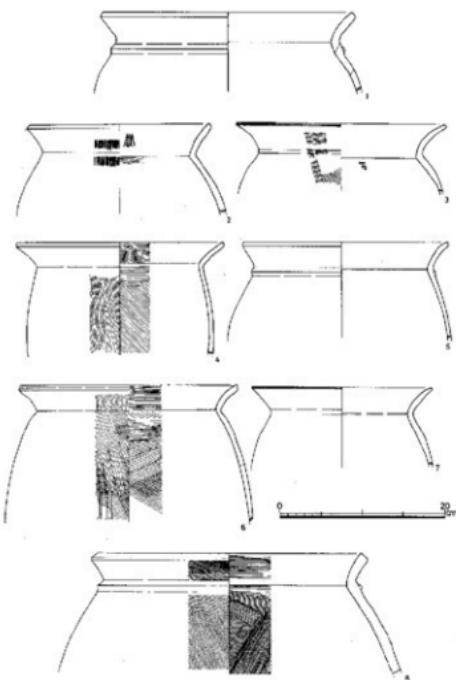


Fig. 45 環塗内出土土器実測図（縮尺1／6）

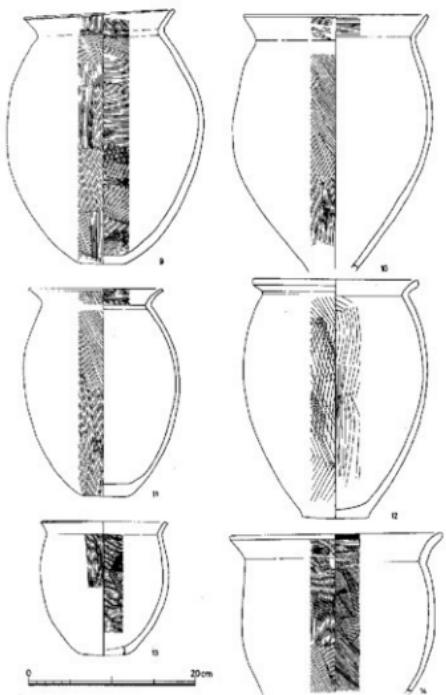


Fig. 46 環塗内出土土器実測図（縮尺1／6）

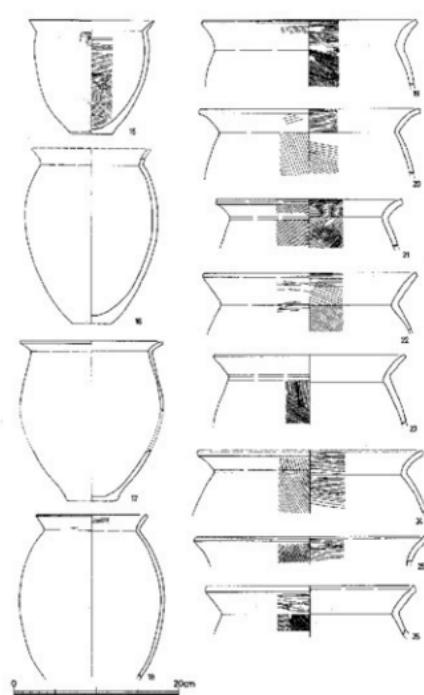


Fig. 47 環塗内出土土器実測図（縮尺1／6）

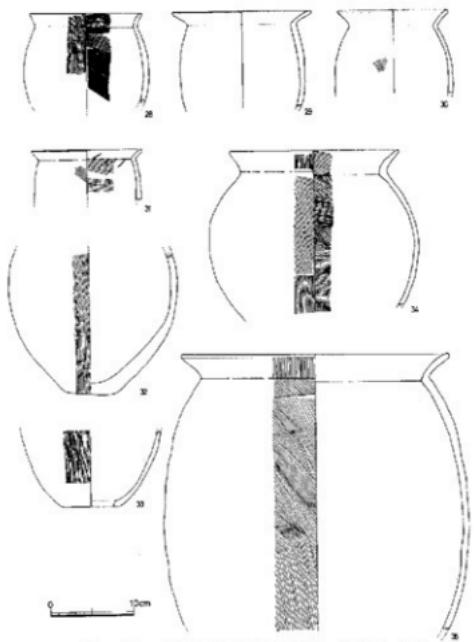


Fig. 48 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)

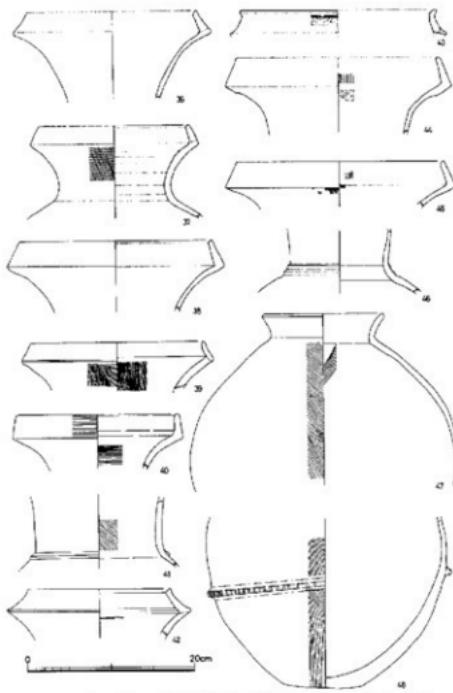


Fig. 49 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)

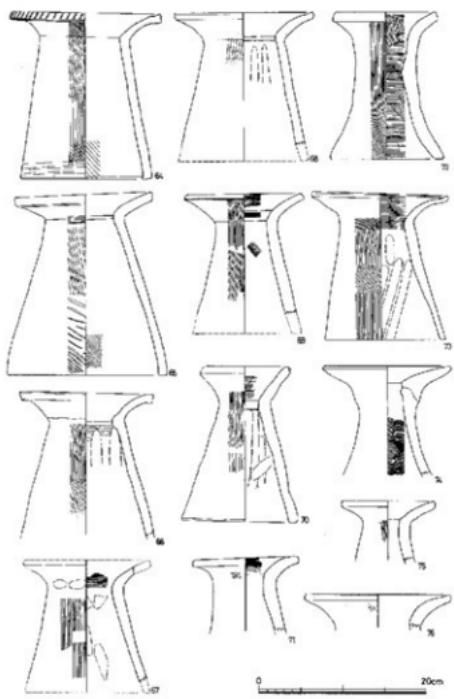


Fig. 51 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)

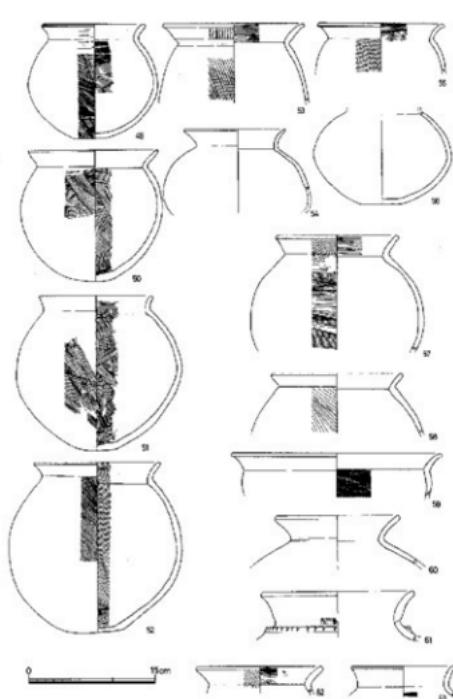


Fig. 50 環濠内出土土器実測図 (縮尺1/6)

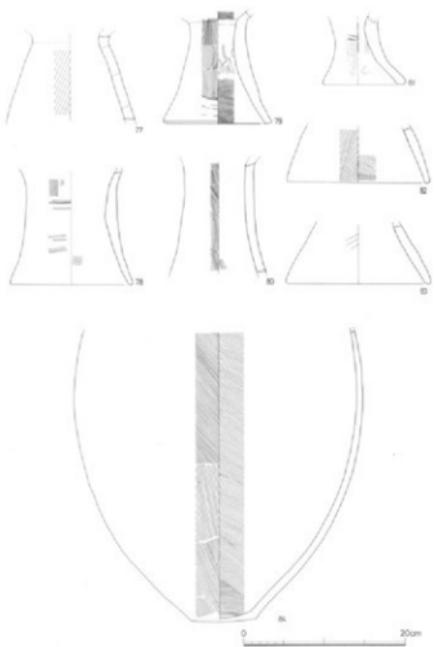
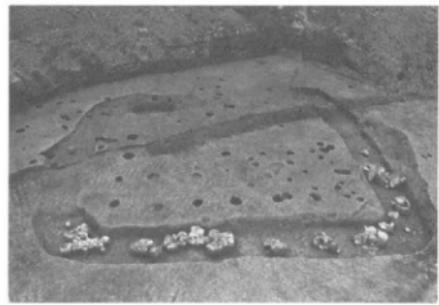


Fig. 52 環塗内出土土器実測図（縮尺1／6）



環塗遠景 (Ph. 6)

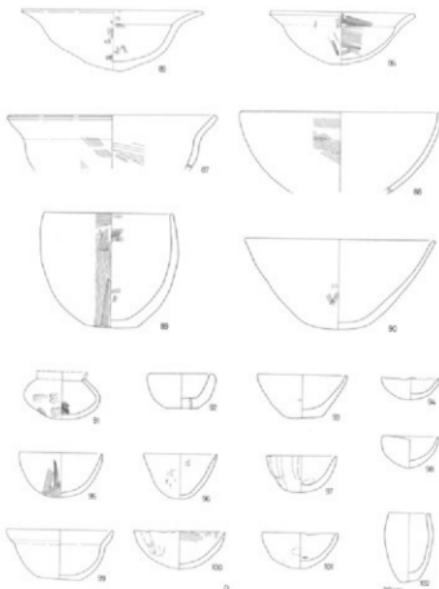


Fig. 53 環塗内出土土器実測図（縮尺1／6）

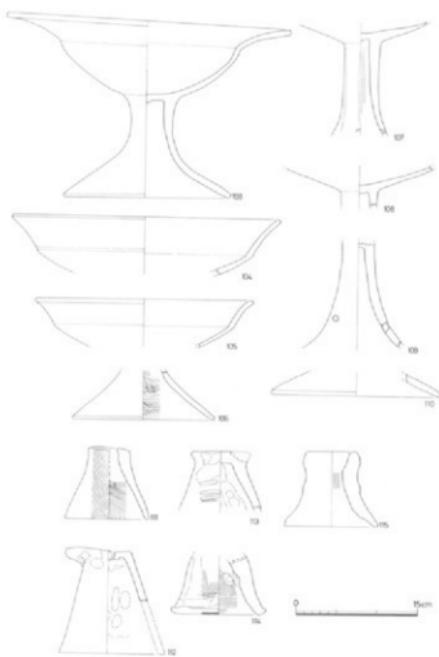


Fig. 54 環塗内出土土器実測図（縮尺1／6）

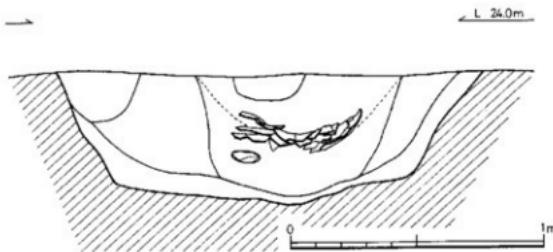


Fig. 55 環濠土層セクション図 (縮尺1/20)

Tab. 4 環濠内掘立柱造構表

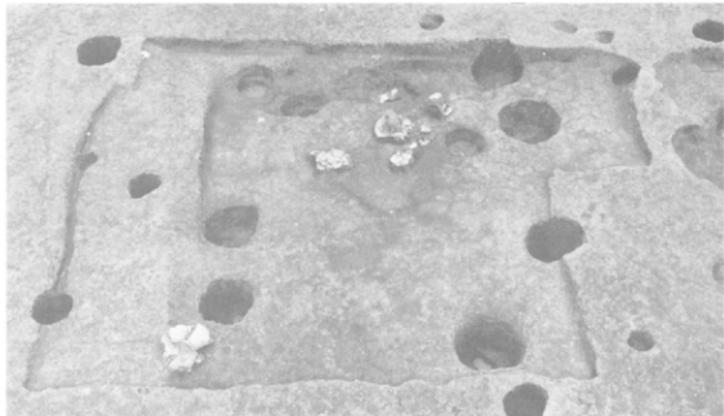
P 1 ~ P 4	138	P 1 ~ P 19		P 3 ~ P 6	112	P 3 ~ P 21		P 1 ~ P 2	150	P 1 ~ P 3		P 19 ~ P 20	138	P 19 ~ P 21	
P 4 ~ P 7	110			P 6 ~ P 9	116			P 2 ~ P 3	130		280	P 20 ~ P 21	128		266
P 7 ~ P 10	140			P 9 ~ P 12	136			P 4 ~ P 5	116	P 4 ~ P 6		平均	135.8		267
P 10 ~ P 13	—			P 12 ~ P 15	118			P 5 ~ P 6	142		258				(単位cm)
P 13 ~ P 16	—			P 15 ~ P 18	118			P 7 ~ P 8	142	P 7 ~ P 9					
P 16 ~ P 19	—			P 18 ~ P 21	140			P 8 ~ P 9	122		264				
P 2 ~ P 5	126	P 2 ~ P 20		平均	126.3	747.3		P 10 ~ P 11	—		—				
P 5 ~ P 8	128						(単位cm)	P 11 ~ P 12	—						
P 8 ~ P 11	—							P 13 ~ P 14	—		—				
P 11 ~ P 14	—							P 14 ~ P 15	138						
P 14 ~ P 17	138							P 16 ~ P 17	—		—				
P 17 ~ P 20	122							P 17 ~ P 18	152						

	径	深さ		径	深さ		径	深さ		径	深さ	
1	42	58	6	37	24.5	11	—	—	16	—	—	
2	38	29	7	27	9.5	12	39	40	17	47	12	
3	24	26	8	31	5.5	13	—	—	38	34	10	
4	37	24.5	9	47	35	14	40	9.5	19	45	26	
5	22	18	10	39	35	15	37	46.5	20	26	16	
(単位cm)										21	33	23.5



Ph. 7 通路遠景

Ph. 8 第20号住居址



Ph. 9 作業風景

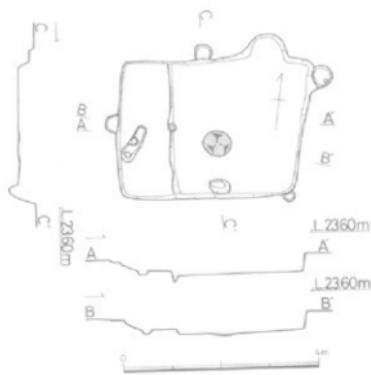


Fig. 56 第18号住居址実測図 (縮尺 1 / 100)



Ph.10 第31号住居址



Ph.11 第15号住居址

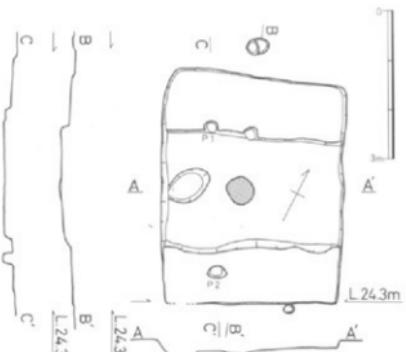


Fig. 57 第19号住居址実測図 (縮尺 1 / 100)

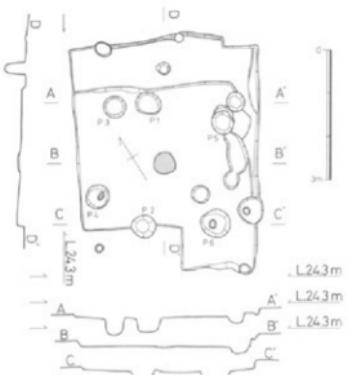


Fig. 57' 第20号住居址実測図 (縮尺 1 / 100)

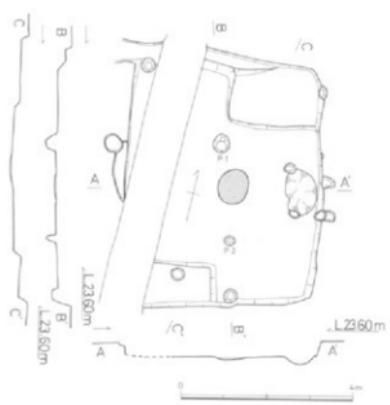


Fig. 58 第21号住居址実測図 (縮尺 1 / 100)

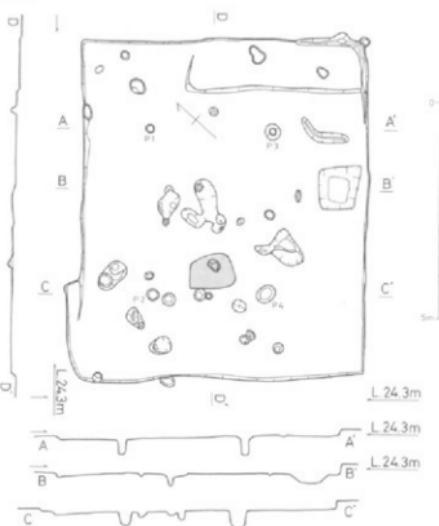


Fig. 59 第23号住居址実測図 (縮尺 1 / 100)

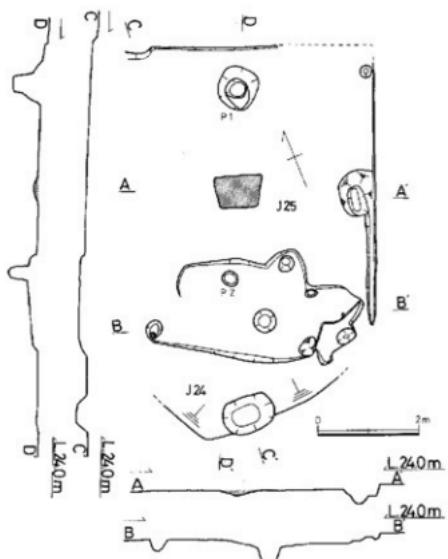


Fig. 60 第24・25号住居址実測図 (縮尺1/100)

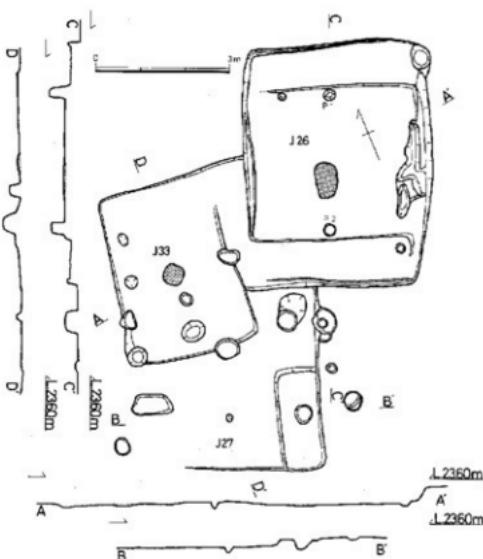


Fig. 61 第26・27・33号住居址実測図 (縮尺1/100)

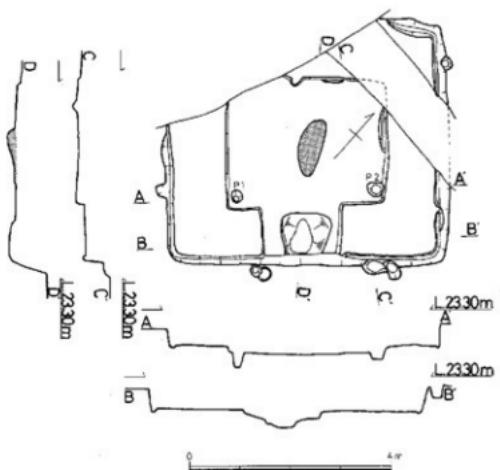


Fig. 62 第31号住居址実測図 (縮尺1/100)

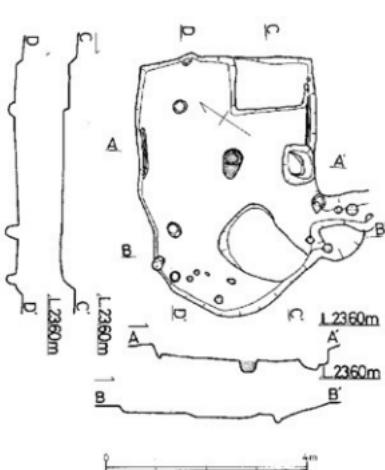
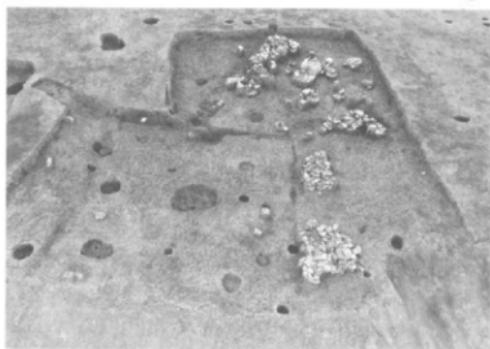


Fig. 63 第35号住居址と土地実測図 (縮尺1/100)



Fig. 64 第28・29・32・37・38号
住居址実測図 (縮尺1/100)



第16・17号住居址 (Ph. 12)



第19号住居址 (Ph. 13)

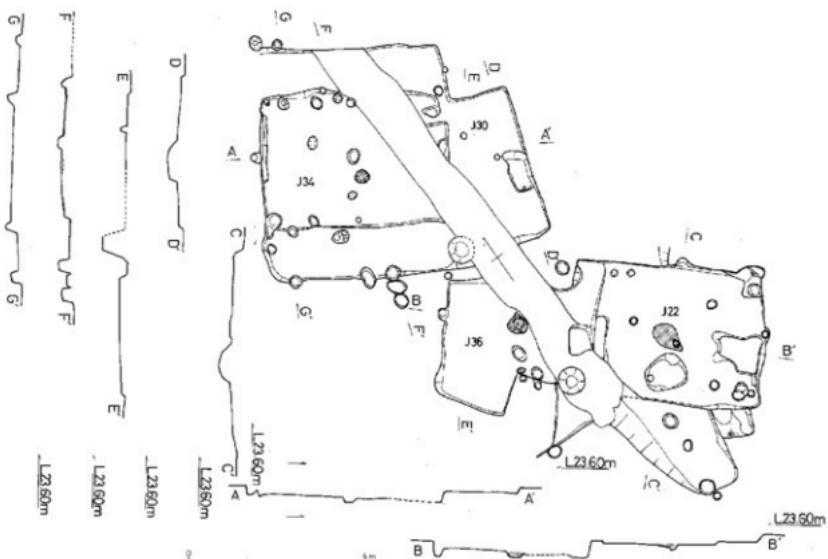


Fig. 65 第22・30・34・36号住居址実測図 (縮尺1/100)

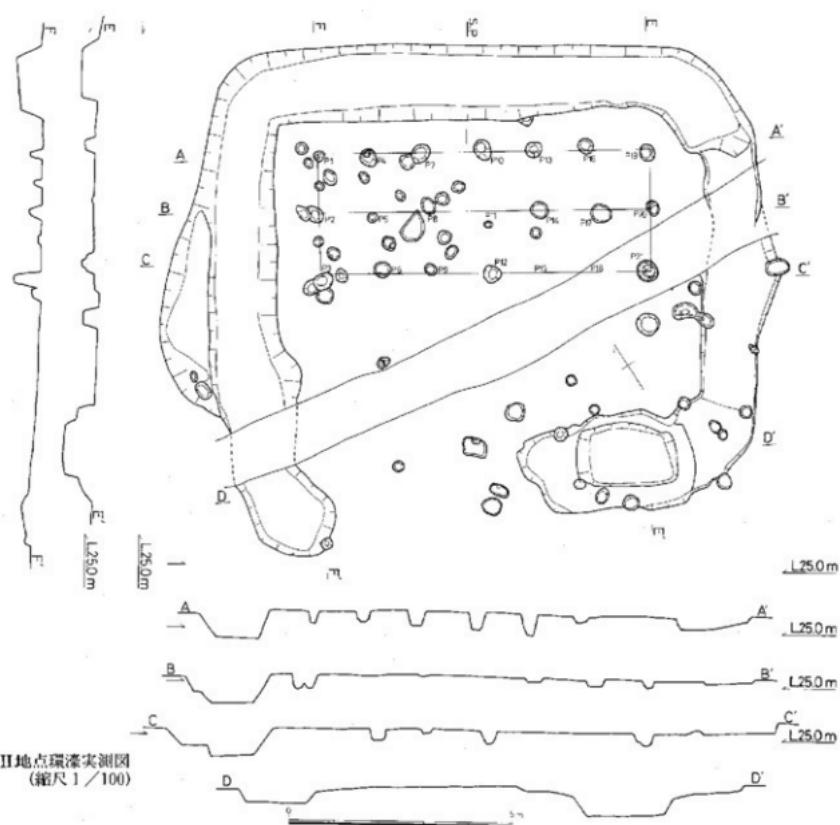


Fig. 66 第II地点環濠実測図 (縮尺1/100)

Tab. 5 第II地点 住居址一覧表

No.	地名	緯度 (度)	東経 (度)	面積 方位	ヘッド 状 態 横	計	構	土地 (面積)	構	主軸	面	方	No.
10	米刀町	4.38±3.48	N=29°-E	なし	中央	伊内	【東側山小丘】	なし	2	西偏角、土礫を含む。		10	
11	"	5.65±X	北北東(北北東) N=2°-E	西側辺(東・西)	右(半左少?) 伊と土塁の半周	豪庭場 豪庭場の前壁	豪庭場 豪庭場	豪庭場	不規	西半を削ぎきっている。		11	
12	"	5.62±4.35	N=15°-E (半左)	なし	中央	伊内	豪庭場の前壁	豪庭場	豪庭場	一帯削り落ち、土礫の塊を残している。(焼土の少む)炭化物塊。		12	
13	[]	5.62±5.22	N=7°-E	西側辺(東・西)	不明		【豪庭場半周】	豪庭場より一歩後	豪庭場	豪庭場内にはない。他の場所へも搬入を検討。		13	
14	"	4.44±5.45	N=54°-E	(東方)N=43°-E	x ()	中央	豪庭場の内側(北)、 豪庭場の外側(南)	豪庭場	平規	はびき風景。(壁等を守らせていない)。少し削り落していいかも。		14	
15	"	6.32±5.2	N=76°-W	なし	x	伊内		豪庭場	平規	半周に炭化物、灰化物、灰土を多量に残す。ベック場		15	
16	"	5.32±4.3	N=19°-E	北北西向	中央や南側割り	0	豪庭場	豪庭場	なし	西壁は水平面。		16	
17	"	5.32±7.24	N=55°-W	なし	中央	0	豪庭場中央	豪庭場	不規	西斜配軸。丁口を埋めている。		17	
18	"	2.14±3.84	N=41°-E	西北隅延	中央や南側割り	0	豪庭場	豪庭場中央	なし	J17-J18		18	
19	"	4.66±5.76	N=27°-W	西側辺(東・北)	中央や南側割り	0	豪庭場	豪庭場中央	なし			19	
20	"	5.5±4.2	N=32°-E	北北東(北)N=34°-E	中央	x	不規	豪庭場と北に壁	2テク	豪庭場西の西の(ベック付道路の横)角が削平されている。		20	
21	"	4.66±5.3	N=15°-W	西北隅延(南北)	中央	x	豪庭場	豪庭場中央	なし	西側に南北に炭化物塊が入っている。西側角は壊されている。		21	
22	"	(1.1) X.1	N=30°-W	豪庭場の前壁はあった可能あり	x	x	なし	なし	平規	J19に壊されている。		22	
23	"	7.39±6.64	N=29°-E	北北西向の東3/5	北壁軸上、南モリ	x	豪庭場北中央	豪庭場北中央	なし	J19に壊されている。		23	
24	不明	—	—	—	—	—	—	—	—	J25に壊されている。一部が残るのみで跡跡のみ。		24	
25	夷刀町	4.28±4.15	N=21°-E	なし	中央	伊内	豪庭場中央	豪庭場中央	2	J14-J15 東側内、西側を削ぎきっている。疑問。		25	
26	"	5.5±4.5	N=21°-E	豪庭場(東・北)	中央や西南寄り	x	不規	豪庭場と西南寄り	J17-J18	J17を壊す。J17-J18		26	
27	[]	5.62±X.0	N=7°-E	豪庭場内の南側	中央	0	豪庭場	豪庭場	J18-J19	J18-J19の間で南側、西側部分を削り下されている。		27	
28	夷刀町	5.44±6.36	N=4°-E	—	中央や西正斜り	伊内	豪庭場中央	豪庭場・南端の一帯	J28	J28で切ってある。南側部分を削り下されている。		28	
29	夷刀町	5.36±3.6	N=23°-W	豪庭場似と北斜傾斜の東半	中央	x	豪庭場中央	なし	2テクニーJ28に残る。			29	
30	"	5.52±X	N=72°-W	狂石浜にはなし	—	—	豪庭場部分にはなし	豪庭場部分にはなし	J34-J35	J34で切られる。炭化物塊が残る。J34を切りつつある。J35不規。		30	
31	"	5.77±(1.9)	N=46°-E	西側辺の南端を除き全	中央	伊内	【豪庭場中央付近の土壠】	豪庭場中央付近の土壠	J34-J35	西側辺削除され、土壠付近は削除。		31	
32	"	1.82±6.7	N=58°-W	豪庭場延	—	x	豪庭場中央	豪庭場中央	J35-J36	J35-J36に残る。		32	
33	"	3.95±2.7	N=19°-E	なし	x	x	不規	豪庭場	なし	J29-J30に残る。		33	
34	"	5.38±4.3	N=34°-E	西側辺(東・北)	x	—	豪庭場沿いに一部残存	豪庭場沿いに一部残存	J30	J30を留め。J31-J34で削り取る。		34	
35	"	4.10±3.0	N=37°-E	北北西向の東半	x	x	豪庭場中央	豪庭場沿いに一部残存	J30-J34	豪庭場少し部に残る。		35	
36	夷刀町方面	5.43±3.76	N=37°-W	その他の岩山(南半)と北半	中央	x	豪庭場	豪庭場	J30-J34	J30-J34に壊されていることも考慮される。		36	
37	夷刀町(南) (5.68±4.25)	(5.73±3.7)	N=22°-W	東側、一端高くなっている。右 ぐん・ベッドか?	右	x	豪庭場	豪庭場	J30-J34の切り合いで、右(約3度)夷刀町域。			37	
38	芋崎	—	—	西側ベッドか?	x	x	豪庭場	豪庭場	J30-J34に壊されている。左を考慮。J37との切り合いで、右、削除。			38	

* () は検定及び不規定などを示す。

Tab. 6 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺跡(住居址 番号(井戸番号))	種類・名前	法 (個体数)	形 重 の 特 徴		手 法 の 特 徴	物 士	焼	色 調	編 号	写真 番号
			口 径	底 径						
1	J10 酢・白湯	(底付) 6.0	手平底瓶より、外方に立ちあがる。	外観: ハイ口 内面: 網状の彫刻した儀。ナット。	四柱式小石柱を 支え、外側に倒れる。且 て、内側に倒れる。	四柱式小石柱を 支え、内側に倒れる。且 て、外側に倒れる。	外表面: 浅褐色 内表面: 深褐色	21-2 1		
2	小印志軒・接待場	—	器形は、外方に伸び、脚は開く。	外観: 扇形の(そのひげ部分に低いハナ口)。瓶の口 内面: 扇形の(そのひげ部分に低いハナ口)。	真柱式・砂輪を吹 いたままの(そのひげ部分に低いハナ口)。	真柱式・砂輪を吹 いたままの(そのひげ部分に低いハナ口)。	内表面: 黄褐色	x	x	2
3	鉢	15.5	3.5	15.5	小さな丸瓶から上方に大きく開く。口部は丸味をもつ。	内観: ハイ口 内面: 丸味をもつ。瓶の内側は、複数の方向からハサキが削りあわせてある。	大柱式・真柱式・砂輪を吹 いたままの(そのひげ部分に低いハナ口)。	外表面: 中やや青色 内表面: 褐色	21-3	
4	J11 塗布	14.0	15.8	14.0	瓶底狀に腰を打つ。これか左側にもある。受け端給水。 底部の裏蓋は口蓋になり、丸味をもつ。	外観: ハイ口、内側は不規則。内面: 接着剤は堅く剥離している。	小柱式多くは青色 内面: 不規	21-4		
5	J14 盆・臼無脚	14.4	—	外観する白磁。外側は鏡面的、内面はややくらみを持つ。	外観: 浅腹盤の角、不規。	白磁で擦傷を含む 内面に	黄褐色	21-5		
6	" " "	11.5	—	必ずしも外気に触れない。立ちあがる。	ハナ口	高石柱・雲母等を 主に含む。	黄褐色	21-6		
7	" " 西園	(底付) 6.5	平底。	外観: ハナ口 内面: 筒型の角、不規。	小柱式を含む 中柱式。	内表面: 浅褐色	x	21-7		
8	夷刀・削除	(底付) 16.5	地盤内に嵌まら、外側に大きく崩く。	外観: 上部ハナ口 (ハナ突起の後のもの)。脚 内面: つぼがあり、下方はオーバー、瓶の口付。	四柱式・脚	四柱式を含む 内面: 黄褐色	x	21-8		
9	器首・切妻火鉢	(底付) 9.5	ハナ・字形に倒く崩す。	外観: 上部ハナ口 (ハナ突起の後のもの)。脚 内面: つぼがあり、下方はオーバー、瓶の口付。	四柱式・脚	四柱式を含む 内面: 黄褐色	x	21-9		
10	瓶・口無脚	34.4	瓶底附近に縦溝、刮り目を有する。口線上部内腹に引めの平腹面をなし、旋つ。	外観: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-1		
11	" "	32.0	口無脚底部に下に内凹一部。最もくじれた部分は凸形の上方、1cm程度の間にある。	外観: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-2		
12	" "	27.5	—	外観: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-3		
13	" "	31.4	" " 手内縦、口無脚底部下に三角内凹一部。最もくじれた部分は凸形の上方、1cm程度の間にある。	外観: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-4		
14	" "	33.0	" " 手内縦、口無脚底部下に三角内凹一部。(手内縦は物語により、かなり手筋を付けてあります)	外観: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-5		
15	" "	21.8	" " 手内縦、口無脚底部下にやや崩みを残す。	外観: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-6		
16	" "	33.8	—" " 手内縦。	外観: ハナ口、口無脚底部下にハナ口。内面: ハナ口。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-7		
17	" "	23.3	—" " 手内縦。	外観: 丹波堀コナギ。開口、底の低いハナ口。内面: 丹波堀から口面下1cm程度までコニカル。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-8		
18	" "	19.1	底直角の開口より緩やかカーブで外反する口縁、小柄。	外観: ハナ口、丹波堀底部ハナ口。開口、底の低いハナ口。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-9		
19	" " 口無脚	16.8	" " 字口縁。	外観: 丹波堀コナギ。開口、底の低いハナ口。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	白釉	22-10		
20	" "	20.0	" " 字口縁、口無脚部西が、比較的大丸味を残している。	外観: ハナ口、口無脚底部下にハナ口。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-11		
21	" " 壁脚丸	19.2	張りの少ない調節より常に、隙間に白線を残す。開く口縁。	外観: 口無脚底部下にハナ口。張りの少ない調節により、隙間に白線を残す。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	砂輪・小石柱を 支え、内側に倒れる。	黄褐色	22-12		

Tab. 7 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物名及生産年 (生産地)	基盤・基盤	法 量 (ml)	形 塵 の 特 徴	下 沢 の 対 像	地 土		遺 産	色 彩	備 考	法 号	類 号
					上	下					
33 △ 15 鐘・鉦鉢	25.0		「く」字口縁。口縁部はやや斜らだ。	外縁: 鐘部ハケ月 内縁: いじれ唇部にハケからハケへによる剥離部。	中性系の土の表面に白い砂を多く含む。	黄	淡黄色	23	13		
14 △ × × 19.2			「く」字口縁。口縁部の先端がわずかに削れている。	外縁: 2ヶ目、口縁部先端は鋸歯状ハケ月の上から内縁: 1ヶ目	細かい瓦砾塊、剥離部等を含む。	△	△	△	14		
13 △ 中・鉢鉢口以下	33.4		追「」字口縁。脇に側面溝例の内溝。底部はやや窪み。底面部は凹凸状で、底部周囲は少し隆起。	外縁: 2ヶ目、口縁部先端は鋸歯状ハケ月の上から内縁: 1ヶ目	細かい瓦砾塊、剥離部等を含む。	△	△	△	15		
16 △ × × 20.0			追「」字口縁。脇面の他の部分内部にも剥離。口縁部から脚部までの底面はほぼ同じ。	外縁: 略に2ヶ目と思われるが不明確。底部も含む。	小砂利多く含む。斜方部が少々汚れる。	△	△	△	16		
27 △ × 直線鉢	23.0		追「」字口縁。やや内面溝跡はない。底面部はやや突出して、内面よりも外側より上方にモコナ。下方ハケ月。	外縁: とげた2ヶ目と思われるが不明確。底部も含む。	外縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。内側: 略にモコナ。	△	△	△	17		
18 △ × × 17.0			追「」字口縁。やや内面溝跡の複数で削ぎが多い。内縁部が下に向っている。	外縁: 2ヶ目、内縁部はモコナの底面。	外縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。内側: 略にモコナ。	△	△	△	18		
19 △ 中・直線鉢	11.2		やや圓錐形。笠状の頂に追「」字口縁。斜面部丸みもある。接合部はやや内側に凹む。	外縁: 略に2ヶ目。底面部は少々削ぎ。内縁部はモコナ。	外縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。内側: 略にモコナ。	△	△	△	19		
20 △ × 直線鉢以下	19.0		斜面部後り、追「」字口縁。外縁部が多少歪んである。追「」字口縁。斜面部丸みもある。追「」字口縁。	外縁: 斜面部後りが削ぎで歪んである。外縁部後りが追「」字口縁。斜面部丸みがある。	外縁: 少々汚れる。内側: 略にモコナ。	△	△	△	20		
21 △ × × × 18.2			追「」字口縁。底面部「M」字の認められたものと思われるが削ぎが多い。接合部がやや内側に凹む。	外縁: 斜面部後り。底部。外縁部はハケ月。	△	△	△	21			
22 △ × × × 15.0			追「」字口縁。底面部が多少歪んである。斜面部後りに二条のやや丸みを有する。	外縁: 斜面部後り。内縁部はモコナ。	小砂利含む。少々汚れる。	△	△	△	22		
23 △ × × 口捕器欠 (焼付) 11.2	30.3		やや丸みをもつ平底より続いて常に斜る丘陵形の底。脚部下には三脚部の痕跡がある。	外縁: 2ヶ目。内縁部はモコナの斜面に多少カツハの跡がある。	小砂利を多量に含む。少々汚れる。	△	△	△	23		
24 △ × 12.5 15.3		15.9	直線部の脚部で、底面でわずかな段をなし、因み、口捕器は斜面部を多く有する。	外縁: 口捕器コナ。	外縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。	△	△	△	24		
25 △ 鐘・鉢鉢	15.0		縫合せな「く」字口縁。口縁部はなくなり。丸みを帯びる。	外縁: 口捕器コナ。斜面部ハケ月。脚部下はハケ月。	外縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。	△	△	△	25		
26 △ 小形盆・口捕器 (焼付) 5.0			底面。	外縁: 1ヶ目。外縁部は約2cm(±0.3cm)でマコナで脚部が3ヶ所にまたがる。	外縁: 少々汚れる。	△	△	△	26		
27 △ 直・直線鉢	13.5		脚部から直線にかかる部分で、やや市立ちも、斜面部は斜く外反する。	外縁: 2ヶ目。内縁部はモコナ。	外縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。	△	△	△	27		
28 △ 小型盆・山腹鉢 (焼付) 5.0			平底より、やや丸みをもつ上方に凹む。	外縁: 斜面部の底。不規則。	鍋底	△	△	△	28		
29 △ × × × (焼付) 4.5			手取の口沿において、底面中央に固めもある。立ちあがりの間隔が少々ある。	内縁: ハケ目。底面のものが研磨されるが不明確。	小石粒を多量に含む。	△	△	△	29		
30 △ 手取盆・山腹鉢 (焼付) 5.4	6.0		手取の縁。尖り到達部の裏切。	内縁: 略に2ヶ目。	内縁: 略に2ヶ目含む。少々汚れる。	△	△	△	30		
31 △ 小形盆・口捕器 (焼付) 1.5			小さい車輪から見て進行する。口捕器は、やや内面溝跡になるが認められる。	内縁: 少々汚れる。	鍋底を含む。	△	△	△	31		
32 △ 盆・口捕器	7.5 (焼付) 11.7		縫合せなびぐれが上方にある。	外縁: 弧形あり。	鍋底。	△	△	△	32		
33 △ × × 口捕器	11.8		比較的溝少で、受け口が崩壊部に聞く。両面上方にびくれ部分の被覆が明瞭。	外縁: ハケ月。受け口はハケ月の上をコナ。内縁: 受け口はハケ月。脚部へ張り。	表面に少々の縫合せ。被覆も少々多い。	△	△	△	33		

Tab. 8 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物名及生産年 (生産地)	基盤・基盤	法 量 (ml)	形 塵 の 特 徴	下 沢 の 対 像	地 土		地 土 色	地 土 色	地 土 色	地 土	地 土
					上	下					
34 △ 15.5 塵・土器	(焼付) 9.0		小豆。びぐれは中央より上や下方にある。	外縁: ハケ月 内縁: ハケ月上にテラコナ。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
35 △ × × × 15.0			びぐれは下方にあり、脚部は大きく「く」字形に近く。脚部は厚めをもつ。	外縁: 上部が2ヶ目で斜面部が1ヶ目。内縁部はモコナ。	砂砾・石粉を多く含む。	△	△	△	△	△	△
36 △ × × 西端丸	16.9		受け口は頭部形状に戻り、びぐれ尾は上方にある。受け口端部は内縁部。	外縁: ハケ月。口捕器コナ。受け口周辺はハケ月。	砂砾・石粉を多く含む。	△	△	△	△	△	△
37 △ × × 剥離	(焼付) 12.5		破端がやや奥く、底面はやや深くなる。	外縁: 12.5ml。	△	△	△	△	△	△	△
38 △ × × 受け口	(焼付) 13.5		びぐれ尾が上方にある。底面はやや深。	外縁: 13.5ml。	△	△	△	△	△	△	△
39 △ × × × (焼付) 11.5	11.9		小豆で、びぐれ尾が上方にある。	外縁: ハケ月。底面部2ヶ所に凹凸があり。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
40 △ × × 墓端丸	13.5		脚部空間がしまり、やや内面溝を呈す。受け口は縫合か間に聞く。	外縁: 弧形または2ヶ目。底面は4ヶ所。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
41 △ × 定型	11.2 10.0 30.4		「く」字形の底。弧形に粗孔をもつ。上縁の脊部が深く、下縁に脚部がなくなる。	外縁: 10.0ml。上縁2ヶ目。底面4ヶ所。内縁: 11.2ml。上縁2ヶ目。底面4ヶ所。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
1 J16 中・山腹鉢	21.9		「く」字形。手取と側面溝跡は内縁部す。内縁部は丸みを呈り、脚部をなし、やや突き出る。	外縁: 21.9ml。	△	△	△	△	△	△	△
2 △ 圓 - × 46.6			中空端部に削いた凹底で、凹縁上に不整的な凸部をめぐらす。凸部は2ヶ所。	外縁: 圓柱形。底面は2ヶ所の凹部で底面が2ヶ所ある。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
3 △ 圓? 改正	(焼付) 8.1		底端中央が、ややむちむかに若われる。	外縁: 圓柱形。底面は2ヶ所。	砂砾・石粉を多く含む。	△	△	△	△	△	△
4 △ × 墓端丸	26.3		内側気泡に大きく欠け、口唇部で立ちあかる。	外縁: 墓端丸。	砂砾を含む。	△	△	△	△	△	△
5 △ 盆	6.2 9.9 9.6		底盤が厚く、脚部下でやや傾く。底盤でいよいよ。	外縁: 盆。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
6 △ × 墓端丸			脚部は、今や丸めに曲がる。丸がある。	外縁: 2ヶ目。	砂砾・石粉を多く含む。	△	△	△	△	△	△
7 △ 圓・腹上部			脚部内側の中央に丸く瘤をもつ。腰やかに広がる。	外縁: へたりり 内縁: へたりり。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
8 △ 圓・墓端丸	17.2		脚部内側に脚部をもつ。腰やか。腰が明顯。	外縁: 17.2ml。底面部2ヶ所。	砂砾・小砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
9 △ × × 受け口	13.7		中間部で今や丸めになり、上方・下方が異なる。	外縁: ハケ月。	砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
10 △ × × × 受け口	13.7		口縁部に底面をつくり、腰やか。腰が明顯。	外縁: ハケ月。底面部2ヶ所。	砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
11 △ × × × (焼付) 13.8			中や内面氣泡に底面をつくり、腰やか。	外縁: ハケ月。底面部2ヶ所。	砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
1 J37 Ⅲ・口縁板	35.3		やや外縁に開く口。口縁部の腰が明顯。口縁板下に三角形の一端。斜面部にかけた。今や突き出し気泡。	外縁: 35.3ml。底面部2ヶ所。	砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△
2 △ × × ×	36.3		やや内面氣泡に底面をつくり。腰が明顯。口縁板のヨコナ。上縁2ヶ所で底面が2ヶ所となる。今や丸めに腰の3倍の大きさ。	外縁: ヨコナ。内縁: ヨコナ。	砂砾を多く含む。	△	△	△	△	△	△

Tab. 9 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物名 (出土地點 の記号)	器種・部品	次 量 目 寸 寸 合 合 合 合 合 合	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	地 土 地 域	色 調	備 考	Fig. 番 号
3 丁17 勝・山脚型	35.6		外舟で削ぐ様。縁端部にやや厚みある。ねじ部分は三角凸 形。	素面削の丸、平底。	小石粉と砂利を 含む。	茶褐色地 灰白色。	22 3	
4 ハ - - -	27.5		丸く外舟で削ぐ。口沿部分が後で削取。口幅部に三角凸 形。	外舟: 手打ちでヘタによさず削取。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	小石粉を多く含む 内舟: 砂利を含む。 外舟: 口を保つ ため、やや厚い。	茶褐色地 灰白色。	24	
5 ハ - - -	26.0		外舟外側の白磁底下に内舟内側。口沿部分にわずか凹み がある。	外舟: ハセヨリカツ。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 手打ちで削 取。内舟: 三角凸 形。	茶褐色地 灰白色。	25	
6 ハ - - -	28.5		縁がかなづく。字形舟。口幅部に外舟をもつ。縁端にかけてやや 厚みある。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 手打ちで削 取。内舟: 三角凸 形。	茶褐色地 灰白色。	26	
7 ハ - - - 脱落口下穴	19.3		「く」字舟形。内舟部は丸底をもつ。内舟から外舟する。脱落口 先がやや歪曲。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を 多く含む。	茶褐色地	7	
8 ハ - ハ	19.5		「く」字舟形。口舟部が外舟する。	外舟: ハセヨリカツ。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を 多く含む。	茶褐色地 灰白色。	8	
9 ハ - - - 山脚型	22.3		「く」字舟形。	外舟: 手打ちで削取。上舟は、ハセの上にヨリカツ。内舟: ハセヨリカツ。(口舟部を削除して)。	外舟: 小石粉を 多く含む。内舟: 内舟: 砂利を含む。	茶褐色地 灰白色。	9	
10 ハ - - -	21.4		「く」字舟形。	外舟: 手打ちで削取。(内舟底コヨナ形の外舟の底の 内舟: ハセヨリカツ。内舟: ハセヨリカツ。	外舟: 手打ちで削 取。内舟: 三角凸 形。	茶褐色地 灰白色。	10	
11 ハ - - -	21.4		「く」字舟形。くじれ模様の縁が外舟。	外舟: ハセヨリカツ。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を 多く含む。	茶褐色地	11	
12 ハ - - -	21.4		「く」字舟形。口舟部が外舟する。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を 多く含む。	茶褐色地 灰白色。	12	
13 ハ - - -	23.5		「く」字舟形。	外舟: 手打ちで削取。下舟はハセ舟。内舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を 多く含む。内舟: 内舟: 砂利を含む。	茶褐色地 灰白色。	13	
14 ハ - - -	20.3		「く」字舟形。内舟部分がやや削る様。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。縁端ハサキ。	外舟: 小石粉を 多く含む。内舟: 内舟: 砂利を含む。	茶褐色地 灰白色。	14	
15 ハ - - 滅失口下穴	22.3		「く」字舟形。口舟部が外舟で削除。くじれ模様の縁が外舟 の底部分がない。	外舟: 略削より上方にケロ。下舟は底削により 内舟: 削除。	小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	15	
16 ハ - - 脱落口下穴	19.2		「く」字舟形。口舟部の丸底を残す。舟の底部分が外舟 の底部分がない。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	16	
17 ハ - - -	22.5		「く」字舟形。口舟部が削除され、口舟部は弧形。内舟部分に削除 する。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	17	
18 ハ - - -	25.5		「く」字舟形。内舟部分が削除される。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	18	
19 ハ - - -	36.2		丸く外舟する。底に内舟の丸底。口舟部の丸底が外舟。	外舟: ハセヨリカツ。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	19	
20 ハ - - -	13.0 32.3	27.4	丸底を手打ちで削取の跡が残り、「縫隙」は外舟削除する。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	20 25	
21 ハ - - - 剥離底穴	6.5 15.3		「く」字舟形。口舟部の丸底を残す。舟の底部分が外舟 の底部分がない。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	21	
22 ハ - - -	10.0 18.5		「く」字舟形。内舟部分を削除する。内舟底コヨナ形の外舟 の底部分がない。	外舟: 手打ちで削取。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	22	
23 ハ - - -	16.3 16.4		内舟に底削れの跡がある。口舟部が外舟削除し、底をも つ。	外舟: 略削より底削れ。内舟: ハセヨリカツ。内舟底コヨナ 形。内舟: リム部はヨリカツ。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地	23	

Tab. 10 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物名 (出土地點 の記号)	器種・部品	次 量 目 寸 寸 合 合 合 合 合 合	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	地 土 地 域	色 調	備 考	Fig. 番 号
24 丁17 勝・山脚型	17.6		丸底より外舟方に削ぎ、立ちあがる。	外舟: 略削の丸、不明。 内舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を 多く含む。	茶褐色地 灰白色。	29 24	
25 ハ - -	28.5		手舟より上舟を削ぎ、はん剥削はわずかに内舟部分に直結する。 内舟部分は丸底をもつ。	外舟: 丸底とするハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	25	
26 ハ - -	19.1 20.3		舟の丸底をもつ。ハセが付属する。外舟方にさきあがり、ハセ端部で 多少削除する。内舟部分は内舟底コヨナ形の平底である。	外舟: ハセ舟。 (内舟のハセ舟は底削によりあるが、内舟底コヨナ形の内舟部分を削除する。)	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地	26	
27 ハ - - - 剥離	8.1		小舟の剥離。丸底のある平底。	外舟: ハセハサキのもののが、かずらに保存。	外舟: 大根葉等を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	27	
28 ハ - - - 剥離火	23.6		丸く丸くある丸底がよく付ける。外舟部分は削除。内舟部分は削除する。	外舟: ハセハサキのもの。 内舟: ハセ舟。	外舟: 大根葉等を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	28	
29 ハ - - - 剥離	29.0		剥離は、中内舟部分に立ちあがり。ハセ部は外反しきく高く、 常に引張る。内舟部分は平底。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	29	
30 ハ - - -	27.7		内舟部分を削る。内舟底コヨナ形の外舟部分を削除する。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を 多く含む。	茶褐色地 灰白色。	30	
31 ハ - - - 剥離	(剥離) 16.3		剥離が付いて、内舟部分が削除する。内舟部分は削除する。内舟 部分を削る。内舟部分が削除する。内舟底コヨナ形の内舟部分を削除する。	内舟: 剥離舟。	内舟: 大粒の砂等を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	31	
32 ハ - - -			剥離との複合部など立ちあがし、種類別へとなる。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	32	
33 ハ - - - 剥離	(剥離) 20.9		「く」字形に剥離。舟の下部がわずかに丸底。	内舟: ハセ舟。	内舟: 大根葉等を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	33	
35 ハ - - - 剥離火	18.2		剥離部に丸く立つ。剥離部が削除する。	外舟: 剥離舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	35	
36 ハ - - -	19.2		剥離部に丸く立つ。剥離部が削除する。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	36	
37 ハ - - -	21.6 23.5 21.0		剥離部に丸く立つ。外舟に凹むがみられる。くじれ部が上方にあり。 剥離部が削除する。くじれ部が上方にあり。剥離部は削除しない。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	37	
38 ハ - - -	20.8 25.5 20.8		剥離部に丸く立つ。くじれ部が上方にあり。剥離部は削除しない。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	38	
39 ハ - - - 剥離火	16.6		剥離部に丸く立つ。受け剥離が丸底をもつ。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	39	
40 ハ - - - 剥離火	13.5		剥離部に丸く立つ。くじれ部が丸底で立ちあがる。内舟をや くひきる。	外舟: ハセ舟。	外舟: 小石粉を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	40	
41 ハ - -	30.4 17.4 31.5		上方にあるくじれ部に外舟する受け剥離が起きる。かついで押すを な。砂利が多い。	内舟: ハセ舟。	内舟: 砂利を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	41	
45 ハ - - - 剥離	(剥離) 13.4		「く」字形に丸く立つ。縫隙部が丸底で立ちあがる。縫隙部が底陥没する。	内舟: 剥離舟。	内舟: 砂利を多く 含む。	茶褐色地 灰白色。	45	

Tab. 11 第II地点 住居址内出土土器一覧表

通名 区分(地番)	地番・番号	法 令 規 定 (参考)	量 目 標 (参考)	形 式 の 特 徴	手 法 の 特 徴	様 土	性 質 色 調	圖 考	出 處 目 録
46.	○・○・○	13.2 <small>(参考)</small>	13.8	「ハ」字形は圓周線、底端は、やや内凹気味。	外側：直角。内側の尖部は削られた感じがある。内側：上方に向て緩やかな丸みがある。	新しい砂質。芯 部は黄褐色。表面は茶褐色。	良 好 茶褐色		32 16
47.	○・火輝・西野火			腰端が狭く、底部へ入る所をもつ、腰毛の部分にあたる軸上が削られ、内側に底面下にぼり輪。	基盤部底の角、内側。	新規。小石板。芯部は 金剛等のもの。	やや 茶褐色		37 47
48.	○・井野也・阪本火	13.3 <small>(参考)</small>	8.2	底にふくれるもの。表底部を欠いて、新規性をもつものの、底面部中央に直あり。	外側：「ハ」字形で内側も口ききで包まれている。底部：削られた感じのもの。内側：「ハ」字形で内側も口ききで包まれたもの。	砂質。底及び内側 部を含む。	内 部：薄褐色 内 部：深褐色		48
1.	J 18 重・山田地	34.3		内凸状の底と「く」字形底。	基盤部底の角、内側。	新規。小石板。芯部は 金剛等のもの。	新規。小石板。芯部 は金剛等のもの。		33 1
2.	○・篠・口根原	26.4		底に延びるわざりの新規形に附する口縁。内側部ともに複雑な形。	外側：「ハ」字形で内側を含む所。内側：「ハ」字形。	砂質。小石板。芯 部は金剛等のもの。	良 好 灰褐色		2
3.	○・豊・喜多川河原	26.7		空。	外側：「ハ」字形で内側を含む所。内側：「ハ」字形。	良石・石質良好。 外側：少量。	外 部：浅褐色 内 部：深褐色		3
4.	○・○・○	17.8		火漆をもつ個例。外底する口縁。	外側：腰端部・口縁。内側：「ハ」字形。	砂質の右端少 量。芯部。	良 好 灰褐色		4
5.	○・重・深堀	7.8 <small>(参考)</small>		内側底をもつ口縁。	外側：「ハ」字形で内側を含む所。内側：「ハ」字形。	小石板等を多量 に含む。	浅 い茶褐色		5
6.	○・○・○	8.8 <small>(参考)</small>		底部の立ちあがり部分に、若干の瓦が焼かれた平底から埋めかね。	外側：「ハ」字形		良 好 灰褐色		6
7.	○・小野合	6.5 <small>(参考)</small>	7.3	ハ下方にのびる。	横部の外縁とも「ハ」字形。腰端部多量の少しあり。内側に腰端部を含む。	新規等を含む。 内側。	外 部：高麗等のもの。		7
1.	J 19 重	13.1 <small>(参考)</small>	13.8	もちらし。更に口下に荒す。	内側部底端に凹にはげたハケが腹底部に。	小石板等を含む。	外 部：浅褐色 内 部：深褐色		32 1
2.	○・○・底深火	12.1		腰端部を含む口縁。腰端部の間に腹底部を削らせる少ない半段。	外側：口縁部「ハ」字形。内側：「ハ」字形の腰端部。	新規。起步部多く 削られたもの。	良 好 茶褐色		2
3.	○・○	16.4 <small>(参考)</small>	13.9	ひずみあるところ。	内側：「ハ」字形で内側を含む所。外縁：「ハ」字形。	細長い片状を 含む。芯部。	内 部：浅褐色 外 部：深褐色		3
4.	○・林	19.3 <small>(参考)</small>	11.6	右端。腰端部上方に延びるわざり。火漆は、結ゆかに外底する。	内側：「ハ」字形。	小石板等を含む。	良 好 灰褐色		4
5.	○・豊・底深火	26.2		口縁部を丸めたり。左端、火漆部は中段にく。腰やか「く」字形底。口唇部は先端を削る。	外側：「ハ」字形。	外 部：白川陶器。	外 部：浅褐色 内 部：深褐色		5
6.	○・○・口根原河原	17.5 <small>(参考)</small>	7.6	腰端部をやりかねを盛る平底。	外側：「ハ」字形。	小石板等を多 量に含む。	良 好 灰褐色		6
7.	○・○・○	22.0	37.1	基盤部底の「く」字形は、外側部底端に左右に突出があり、腰端部を含む。	外側：腰端部は直角的。腰端部は「ハ」字形で内側を含む所。内側：「ハ」字形。	細長い片状を 多く含む。	外 部：高麗等のもの。		7
8.	○・○・中西口以下	27.1		腰端部底に小さな「く」字形。外側部底端部より上を腰端部に引く所をもつる所の右端部を削る。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	多量の灰白色を含む。 芯部。	良 好 灰褐色		8
9.	○・洋	17.0 <small>(参考)</small>	9.7	腰端部はやや内凹気味。腰端部アーチと右端部。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	細長い片状を 多く含む。	外 部：高麗等のもの。		9
10.	○・番古・下川原	15.2 <small>(参考)</small>		腰端部の弧度などを左右に歪めたり。右端部に腰端部を削る。	外側：「ハ」字形。	新規。起步部はハケの後ナメ。	新規。起步部多く 削られたもの。		10
11.	○・番古	25.3 <small>(参考)</small>	20.8 <small>(参考)</small>	受け付部腰端部を削る。上方に腰やかなくがれをもつ。	外側：「ハ」字形。 内側：「ハ」字形。	新規。起步部多く 削られたもの。	外 部：白川陶器 内 部：深褐色		11

Tab. 12 第II地点 住居址内出土土器一覧表

通名 区分(地番)	地番・番号	法 令 規 定 (参考)	量 目 標 (参考)	形 式 の 特 徴	手 法 の 特 徴	様 土	性 質 色 調	圖 考	出 處 目 録
1.	J 20 山原	36.8 <small>(参考)</small>	37.8 <small>(参考)</small>	斜板は大きく開き、縁部との接合部に外側部とともに扱があり、口縁部がかかる所。	口縁部は斜板の「く」字形で内側を含む所。内側部底は直角的。	腰端の右端を含む。芯部。	良 好 灰褐色		34 1
2.	J 21 重・山原			腰端部底に斜板形の「く」字形をもつ右端部である。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	腰端部を含む。	良 好 灰褐色		2
3.	○・豊・山原	33.8		などらかな「く」字形底。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	小石板を多く含む。	良 好 灰褐色		3
4.	○・○・○	25.5		「く」字形底。口唇部部は背子の丸みをもつ。	外側：口唇部は斜板。「く」字形。	腰端の右端を含む。芯部。	外 部：浅褐色 内 部：深褐色		4
5.	○・番古・受火跡	17.0 <small>(参考)</small>		腰端部は斜板と直し、腰やか大きく「く」字形。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	小石板を多く含む。	良 好 灰褐色		5
6.	○・○・○	16.0 <small>(参考)</small>		「く」字形に斜板。	内外部とも「ハ」字形。腰端部は斜板。	腰端の右端を含む。	良 好 灰褐色		6
7.	○・重・山原	17.6		外側部内に内側部をもつ「く」字形底。腰端部が引き出されてやや尖向を呈する所と、内側部との接はばは。	基盤部底の角、内側。	小石板を含む。	良 好 灰褐色		7
8.	○・○・○	12.3		外側部底に内側部をもつ「く」字形底。腰端部がやや尖めて、内側部の端も直し、腰端部底に削る所を含む。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	腰端の右端を含む。芯部。	外 部：浅褐色 内 部：深褐色		8
9.	○・○・○	12.1		直底。腰端部はやや丸味をもつ。ヨコ端やアーチと右端部。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	腰端の右端を含む。	良 好 灰褐色		9
10.	J 20 重・山原	19.2		直底をもつ右端部をして外底する口縁。	腰端部底の角、内側。	小石板を多く含む。	良 好 灰褐色		10
11.	○・○・○	14.4		腰端部を斜板にして外底する口縁。	外側部と「ハ」字形。	小石板を多く含む。	良 好 灰褐色		11
12.	J 21 重	16.4 <small>(参考)</small>	17.6 <small>(参考)</small>	やや丸味をもつてつた「く」字形底。腰端部は平底。	外側：腰端部は直角的。内側：「ハ」字形。	腰端の右端を含む。	良 好 灰褐色		12
13.	○・林	12.2 <small>(参考)</small>	12.2 <small>(参考)</small>	直底。腰端部はもつてつた「く」字形底。腰端部は平底。	内側：全部に腰端部がある。	小石板を多く含む。	外 部：白川陶器 内 部：深褐色		13
14.	J 22 山原・山原火・幡山	16.7 <small>(参考)</small>	17.5 <small>(参考)</small>	直底。そぞろく筋と斜板をする腰端部。斜板部の底端部は腰端部と接合する。腰端部は斜板の「く」字形底。	腰端部底の角、内側。	腰端の右端を含む。	良 好 灰褐色		15 1
2.	○・○・○	18.9		腰端部の斜板部に「く」字形底。腰端部の斜板部の底端部は腰端部と接合する。腰端部は斜板の「く」字形底。	内側：腰端部は直角的。外側：腰端部は斜板の「く」字形底。	腰端の右端を含む。	良 好 灰褐色		2
3.	○・重・山原火	10.9		腰端部の斜板部に「く」字形底。腰端部の斜板部の底端部は腰端部と接合する。	外側：腰端部は斜板の「く」字形底。	砂質の右端を含む。	良 好 灰褐色		3
4.	○・山原・山原			腰端部を削り、内側部を削る。	外側：「ハ」字形。	砂質の右端を含む。芯部。	良 好 灰褐色		4
5.	○・重・山原			腰端部を削り、内側部を削る。	外側：「ハ」字形。	砂質の右端を含む。芯部。	良 好 灰褐色		5
6.	○・重・山原火	15.0 <small>(参考)</small>	15.8 <small>(参考)</small>	腰端部を削り見る。	外側：「ハ」字形。	砂質の右端を含む。	良 好 灰褐色		6
7.	○・○・○	12.3		わざかに内側しながら外底する物で右端。口唇部は薄くなる。	腰端部底の角、内側。	砂質の右端を含む。	良 好 灰褐色		7

Tab. 13 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物 地上位置 番号 (位置)	名前・基部 寸法(目盛)	底 面積(cm) 口 径 高 度 (cm)	形 態 の 特 徴	子 供 の 特 徴	和 土	堆 積	色 調	編 号	写 真 番 号
1 J26 壁・石縫部		22.3	「く」字口縫。	口部周囲にヨココナ。内筒面ともハナ口。	粗粒の石縫を含む。	灰	黄褐色	37 1	
2 × 壁・壁端	(位置) 5.0		底部中央が凹み、右側になっている。	外表面ともハガ口。	砂粒・細かい石 粉多く混入。	灰	灰色地	× 2	
3 × 先鋒	3.7	12.5 (底位) 14.2	底部内側に凹みがある部分をもつ。「ハ」字形に開き、窓縫で幅を聞く。 脚部破損の中央や左側。	外表面:ヨココナの下にトントンの凹み。 内表面:ヨココナの下にトントンの凹み。 内筒:ヨココナの下にトントンの凹み。 底面:窓縫で斜めにチサ。	小孔を多量に含む。	灰	赤茶褐色を帯びた暗褐色	× 3	
4 × 窓・窓縫欠	17.4		右側男性の場合は壁下部には小さな窓をなす。薄く張る様。	外表面:窓縫で斜めにチサ。	砂粒・二方に小 孔を多量に含む。	灰	赤茶褐色	× 4	
5 × 定縛			上方で若干のくびれをみせず、脚部が薄く、底部に前の風孔あり。	外表面:ハガ口。上方は、窓縫のハガ口は凹凸の跡 内表面:腰窓は、脚により堅材。下方はハガ口。	砂粒・細かい石 粉多く混入。	灰	赤茶褐色	× 5	
6 × 高杯・石縫部	29.2		外表面周囲に大きく窓の縫。	底部周囲の角、平底。	砂粒・腰窓の石 縫を含む。	灰	赤茶褐色地に 白色の花斑地	× 6	
7 × 壁・石縫部	18.1		脚部周囲に大きく窓縫。	外表面:ハガ口。内筒:窓縫のハガ口は凹凸の跡 内筒:腰窓は、脚により堅材。	砂粒・腰窓の石 縫を含む。	灰	赤茶褐色	× 7	
1 J27 壁・窓縫以下灰	22.8		「く」字口縫。わずかに外窓跡等に内嵌する。窓縫の幅は複数段階。	外表面:窓縫等にヨココナ。下部にハカ口。 内表面:窓縫等にヨココナ。	粗粒の石縫等を含む。 灰	赤茶褐色	38 1		
2 × 窓	23.6	12.4 - 23.6	脚部が矢張り窓縫。脚部は大きめ開き、右側は外反し同じ。	外表面:ハガ口。内筒:窓縫等はヨココナ。	砂粒・小石粒を含む。	灰	赤茶褐色	× 2	
3 × 窓・脚部	(底位) 12.2		「ハ」字形に開き窓縫。右側東上方に向かがある。	外表面:ハガ口。内筒:窓縫等はヨココナ。	砂粒・小石粒を含む。	灰	赤茶褐色	× 3	
4 × × ×	(底位) 14.0		「ハ」字形に開き窓縫。脚部は丸い。	外表面:脚部の角、不明。 内筒:腰窓等。	砂粒・小石粒を含む。	灰	赤茶褐色	× 4	
5 × × × 壁	(底位) 11.3		「ハ」字形に広く窓縫。	外表面:ハガ口。 内筒:腰窓等とハガ口。及び輪文による特下方での窓縫。	砂粒・腰窓等。	灰	赤茶褐色地に 白色の花斑地	× 5	
6 × 壁・口縫部	22.6		外反する口縫。ヨココナによる内筒のみある。	外表面:ヨココナ。	砂粒・腰窓地。	灰	赤茶褐色	× 6	
7 × 壁・虫歯穴	20.0		またて上部に穿る跡に内筒に外反する腰窓をもつ。刀縫跡の複数個が確認。口縫部内側はわざわざねじねじり軋出。	外表面:ヨココナ。腰窓等。 内筒:ヨココナ。腰窓は新規のナカウコロ。	砂粒・腰窓を含む。	灰	赤茶褐色	× 7	
8 × × ×	20.4		腰窓等よく窓から外れる口縫をもつ。内筒の形状不明。	外表面:ハガ口。内筒:ヨココナ。	砂粒を多量に含む。	灰	赤茶褐色	× 8	
9 × 壁・脚部	(底位) 7.2		半腰上口縫から腰窓を立てるまであり。大きく窓縫。	外表面:腰窓等。	砂粒を多量に含む。	灰	赤茶褐色	× 9	
10 × 高杯・石縫部	(底位) 16.1		外側に大きく窓の縫。	外表面:内筒上りもしや軽いハガ口。 内筒:ハガ口。	砂粒・腰窓等。	灰	赤茶褐色	× 10	
1 J33 壁・石縫部	29.3		外側を立てる口縫。	外表面:ヨココナ。 内筒:ハガ口部分にハガ口。	砂粒を多量に含む。	灰	赤茶褐色	36 1	
2 × × ×	19.7		中や軽く外反する「く」字口縫。	戸縫:ヨココナはハガ口。内筒:ハガ口。内筒:ヨココナ。	砂粒を多量に含む。	灰	赤茶褐色	× 2	
3 × 壁・口縫	21.0		腰窓の内側で軽く口縫。	腰窓等を多量に含む。	砂粒を多量に含む。	灰	赤茶褐色	× 3	
4 × × ×	14.6		外反する口縫。口縫部は左側を垂げる。	外表面:口縫部はハナハナのヨココナ。左側はヨココナ。 内筒:ハガ口。	砂粒を多量に含む。	灰	赤茶褐色	× 4	

Tab. 14 第II地点 住居址内出土土器一覧表

地上位置 番号 (位置)	底 面積(cm) 口 径 高 度 (cm)	形 態 の 特 徴	子 供 の 特 徴	和 土	堆 積	色 調	編 号	写 真 番 号
5 J32 *・窓	(底位) 5.6	平底。	外表面:ハガ口 内筒:上部にハガ口。	砂粒等を少量含む。	外表面:種々褐色地 内筒:褐褐色	36 5		
6 × × ×	4.4	小さい平底。	腰窓:ハガ口 内筒:ハガ口によるナガ。	砂粒・砂粉等を含む。	外表面:赤茶褐色地 内筒:褐色褐色	× 6		
7 × 壁・石縫部	(底位) 20.0 (底位) 12.5	やや丸味を帯びた平底。	腰窓等の角、平底。	砂粒を多量に含む。	外表面:黄褐色 内筒:黄褐色	× 7		
8 × 壁・脚部	13.5	やや深窓内に屈く柔軟性。	外表面:ハガ口。	砂石・石英砂・砂 粉や多量に含む。	外表面:深褐色地 内筒:褐色褐色	× 8		
9 × × ×	15.7	腰窓を圍む。	内筒等もハガ口。	砂粒等を多量に含む。	外表面:赤茶褐色	× 9		
10 × × 下脚穴灰	14.6	受け皿が側面附近に開き、ぐびれ部は上方にあると思われる。内筒 ぐびれ部の腰窓の周囲。	内筒:腰窓等の角、腰窓等であるが、ハガ口が施されていたと思われる。	×	外表面:「H」字 型の腰窓等。 内筒:褐色褐色。	× 10		
1 J31 壁・脚部腰窓灰	27.9	腰窓等内側に外反し、やや突出した腰窓から上部にのびる筋 をもつ。口縫部はやや尖ら。足底を立てる所。	外表面:ヨココナ。腰窓等はハガ口。内筒:ハガ口。内筒:ヨココナ。	砂粒・白陶粉等 多く含む。	外表面:白陶粉等 内筒:褐色褐色	37 1		
2 × 腰・腰窓一部灰	18.2 (底位) 12.2	腰窓をもった平底。腰窓等に外反する所。	外表面:ヨココナ。腰窓等はハガ口。内筒:ハガ口。(外側にハ ガ口はない)。	白陶・白陶粉等 多く含む。	外表面:赤茶褐色地 内筒:褐色褐色	× 2		
3 × 小切口・腰窓灰	16.8	やや弱めの方に腰窓的に立ちあかる口縫。内筒にぎれ部の筋が複数個。	腰窓等の角、平底。	白陶・白陶粉等 多く含む。	外表面:白陶粉等 内筒:褐色褐色	× 3		
4 × *・窓		丸底。	腰窓等の角、平底。	石英砂・砂粉等を 少量含む。やや 褐色の底。	外表面:褐褐色地 内筒:褐色褐色	× 4		
5 × 口付縫・脚部灰	11.9 (底位) 13.1	腰窓等開き、外底直上に突く穴があき。口縫部は腰窓に由ゆ て腰窓部に立ちあかる。	口縫部内側ともナガ。 腰窓等の筋が屈く不規則。	砂粒・小石粒等を 多量に含む。	外表面:褐褐色 内筒:褐色褐色	× 5		
6 × 小切口・腰窓・茎部	10.2	7.5 10.2	やや手狭な小窓の腰窓。腰窓は上方に張る。やや外反し、腰窓等 に立ちあかる腰窓をもつ。	口縫部内側ともナガ。 腰窓等の筋が屈く不規則。	砂粒・小石粒等を 多量に含む。	外表面:褐褐色 内筒:褐色褐色	× 6	
7 × 小切口・茎部・茎部			腰窓は丸、立ちあかるがものと思われる。	内筒:白陶等にハガ口。ぐびれ部下方にヨココナ。	砂粒から無、 白。	外表面:「H」字 型の腰窓等 内筒:褐色褐色	× 7	
8 × 茎部・脚部、腰窓			腰窓等上部に開いて、やや外反し内側に腰窓をもち、腰窓が外 部に立つ。	内筒:ヨココナ。腰窓等はハガ口の後にヨココナ。 内筒:ヨココナ。	砂粒等を少量化 させる。	外表面:「H」字 型の腰窓等 内筒:褐色褐色	× 8	
9 × × ×			外筒の口縫との複合部分に腰窓等が複数個で、やや腰窓をなす。	外表面:ヨココナ。腰窓等はハガ口の後でヨココナ。 内筒:ナガ。	砂粒等を含む。	外表面:褐褐色 内筒:褐色褐色	× 9	
10 × × × 腰縫			腰窓等下方に円形腰窓を2個。腰窓に開く。	内筒:ハガ口とヨココナ。腰窓等はハガ口の後でヨココナ。 内筒:ナガ。	砂粒等を含む。や や腰窓。	外表面:褐褐色	× 10	
1 J35 壁・脚部	16.9		腰窓等外反する口縫。口縫部はナガ立ちあかる。硬い。	内筒等もヨココナ。	骨灰・青白い砂 粉を含む。	外表面:白陶地 内筒:褐色褐色	40 1	
2 × 壁・×	16.0		外反する口縫。	腰窓等の角、平底。	砂粒から無 化する。	外表面:褐色褐色 内筒:褐色褐色	× 2	
3 × × ×	13.2		外反する口縫。	×	砂粒から無 化する。	外表面:褐色褐色 内筒:褐色褐色	× 3	
4 × 壁・×	16.3		複数「く」字口縫。内筒や腰窓等に内嵌する。	外表面:ハガ口 内筒:腰窓等にハガ口の先のなでつけ痕の跡が一列。	砂粒から無化する。	外表面:褐色褐色 内筒:褐色褐色	× 4	
5 × 高脚形腰部	8.3	9.0 (底位) 11.3	受け皿が腰く、腰窓がどちらかがなく、即ち下方に腰窓等で腰 窓をもつ。腰窓の基部は下方で窓となる。	内筒:ヨココナ。	骨灰等を含む。	外表面:褐褐色	× 5	

Tab. 15 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物 出土地点 番号(性質番号)	器種・部品 目	法 量(高さcm) ロ 径 幅 最 大直 径	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	物 土 陶 成 法	色 調	備 考	Fig 番 号
6 J35 高原・東上田			複合窓の中央に小さい孔2個と凹凸がある。	外縁:ココナデ 内縁:へこたる子だ。しまりあり。	きれめぐく、丸 目で滑らかで、	自然色を帯びた深赤 色		44 6
7	+	+	縫合部で削除し、更に軽く。	外縁:複数の縫合部分、へこたる子だ。	石高熱・鉛熱を 用いて、火候を 保つ。	茶赤色		7
8 (J35 のもの) 窓	9.4	3.8	9.7	やや不規則な天津桜形。わずかに内側する押出がつく。 窓蓋。	外縁:二重の縫合部分、へこたる子だ。	高熱で早く窓を 作る。	深赤色	8
9	+	10.7	2.8	11.0	窓蓋が強く傾斜し、縫合は丈夫に仕上がる。底板。	窓蓋をよく窓に 押しつけ、火候を 保つ。	灰白色	9
1 J26 今・口輪器	15.6			窓蓋端よりやや外側突起にのせる窓口端。	窓蓋端の角の丸、 内縁:へこたる子だ。	窓蓋をよく窓に 押しつけ、火候を 保つ。	深赤色	1
2	+	16.3		縫合端で今窓口なし持続する三重打継。	外縁:輪郭部より引 き出る子だ。	窓口:小石を含む 青白。	青白	2
3	+	13.3		縫合端でやや済みをもつ。段をなし、わずかに口縫が外側する 窓口端。	縫合端:窓縫合は内縫合としにハケ目。 窓縫合は外縫合。	窓縫合:窓縫合を 外側に仕上げる。	青白色	3
4	小窓・口輪器			丸窓端の内回りをもつ。	外縁:へこたる子だ。(窓縫合あり) 内縁:ハケ目	窓縫合	青白	4
5	今・窓板			口縫部は外反し、中縫で更に削る。窓部は急に張り出す。窓口の やいだ。	外縁:窓端二つ目。 内縁:口縫から窓にかけて、ハケ目及びココナデ。	窓板:小石を含む 青白。	青白	5
6	井	15.2	5.7	15.2	中縫は必ずす。	窓縫合:窓縫合は内縫合としにハケ目。	青白	6
7	火 火鉢?	(窓縫合) 11.3		窓縫合がやや仄く。被覆を多め。	内縁:端ともすかにハケ目が窓内。 内縁:窓縫合をもつ。	やや火炎の火 色を含む。	青白	7
8	火 窓板・被覆	13.8		大きめく縫合。口縫端部はナテによるもの。中央がやや凹ん でいる。	内縁:窓縫合の上からココナデ。口縫端部ココナデ。 内縁:ハケ目。	窓縫合:窓縫合の小 火炎を含む。内縫合:火 炎を含む。	青白	8
9	火 火 火 火縫合	12.5		窓縫合との窓縫合から外側で大きく広がり、縫合端は、やや内縫 合よりも外縫合となる。内縫合は、(窓縫合)4.4倍。	内縁:窓縫合子だ。ナラココナデ。 内縁:ハケ目。	窓縫合:窓縫合を 含む。	青白	9
10	火 火縫合	17.0		人大きめに引き、縫合は低い。円形窓。(径約3.5) 4 個。	窓縫合:かすかなハリ目が窓内。 内縁:ハケ目。(上口は丸いハサウエ。下部は楕円)。	窓縫合:小石を含む 青白。	青白	10
11	火 土鍋	(窓縫合) 3.3	(火口) 2.6	丸窓と中央の部分を若干多く、整髪型模様のもの。	穿孔は、片からされている。	石質:石英等の 物質を少額含む。	青白	11
12 J32 今・口輪器	40.7			人大きめに窓。上縫合部や火平縫、内縫に浮みをもつ。内縫 合が最も立ちあらる。口縫に窓口部。	内縫:斜めの刃形の窓口目。 内縁:窓縫合の二つ目。	石質:石英等の 物質を多額含む。	青白	12
13	火 火	24.9		「く」字口縫。	外縁:「く」字口縫。 内縁:「く」字口縫。	石質:斜めの刃形の窓口目。 内縁:「く」字口縫。	青白	13
14	火 火	17.5		逆「く」字口縫と老われ、やや外側突出に内縫。	外縁:ココナデ。口縫端部ココナデ。 内縁:窓縫合の二つ目。	石質:火炎を含む。	青白	14
15	火 火 火	9.5		半机。	外縁:ハケ目。 内縁:窓縫合と火縫合に窓縫合にハケ目。	小石を含む。	青白	15
16	火 火 火	6.0		平縫。	外縁:ハケ目。 内縫:火縫合的窓。	小石を含む。	青白	16
17	火縫合 火 火			丸い小さい五芒星の小形の窓。	外縁:ハラ先でひっかけた棒な感じが所にある。	小石を含む。	青白	17

Tab. 16 第II地点 住居址内出土土器一覧表

遺物 出土地点 番号(性質番号)	器種・部品 目	法 量(高さcm) ロ 径 幅 最 大直 径	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	物 土 陶 成 法	色 調	備 考	Fig 番 号
1 J32 今・口輪器	29.6		内側する口縫。口縫端で内縫にやや浮みをもす。	窓縫合部の角、不規 則。	窓縫合に細かい長 方形の窓縫合を内縫 部に仕上げる。	火炎:白熱を含む 青白:暗赤色。		43 1
2	火 火	24.7		「く」字口縫。	外縁:ハケ目。	火炎:火炎を含む。	青白	2
3	火 火 火	22.6		外反する口縫。	内縫:火縫合。	火炎:火炎を含む。	青白	3
4	火 火 火	22.0		内反する口縫。	外縫:ハケ目。	火炎:火炎を含む。	青白	4
5	火 火	19.3		外反する口縫。	火縫合から外縫はココナデ。	火炎:火炎を含む。	青白	5
6	火 火	5.3		火や火炎を書いた火瓶。	窓縫合:ハケ目。窓縫合ハケ目。 内縫:火縫合を書いたハケ目。	窓縫合:火炎を含む。	青白	6
7	火 火	4.7		底部の立ちあがりの部分はやや丸みがあり、縫合をなす平縫。	窓縫合部の角、不規 則。	火炎:火炎を含む。	青白	7
8	火 火	5.2		火や火炎を書いた平縫。	火縫合:火や火炎を含む。	火炎:火炎を含む。	青白	8
9	火 火	6.3		平縫で比較的厚手。	外縫:ハケ目。窓縫合ハケ目。 内縫:ナナ子。	火炎:火炎を含む。	青白	9
10	火 火	3.7		平縫。	内縫端ともナナ子。	火炎:火炎を含む。	青白	10
11	火 火	4.9		平縫。	基盤部の角、不規 則。	火炎:火炎を含む。	青白	11
12	火 火	3.5		丸縫に近い。	内縫端ともナナ子。	火炎:火炎を含む。	青白	12
13	火 火	5.6		縫合がやや肥厚し、丸縫を書ける。可憐な縫みられた。	窓縫合部の角、不規 則。	火炎:火炎を含む。	青白	13
14	火 火縫合	18.8		縫合に近い立ちあがりの縫合部に外側する丸縫。	外縫:火縫合ココナデ。 内縫:ハケ目。	火炎:火炎を含む。	青白	14
15	火 火	15.6 (火口) 7.8	16.0	縫合より、縫合からやや内側にやや狭めの口縫。内縫端部は窓縫合す るよう下方に口縫端部をもつ。	外縫:上方ハケ目。 内縫:口縫端部はココナデによりハケ目。	火炎:火炎を含む。	青白	15
16	火 火	13.0		半縫影を呈す。	外縫:ハケ目。窓縫合は窓縫合の内縫端部をもつ。	火炎:火炎を含む。	青白	16
17	火 火縫合	12.5		半縫影を呈す。	外縫:ハケ目。窓縫合は窓縫合の内縫端部をもつ。	火炎:火炎を含む。	青白	17
18	火 火	13.3		縫合端で大きく開く。	外縫:ココナデ。窓縫合は窓縫合の内縫端部をもつ。	火炎:火炎を含む。	青白	18
19	火 火	13.3		縫合端で大きく開く。	外縫:ナナ子。上縫は、ハハ目のハラマ。	火炎:火炎を含む。	青白	19
20	火 火	12.4		わずかに内縫端部に大きく開く。縫合は窓縫合の内縫端部をもつ。	外縫:ココナデ。窓縫合は窓縫合の内縫端部をもつ。	火炎:火炎を含む。	青白	20
21	碧玉・愛称	12.0		縫合端に開く。	外縫:内縫から、窓縫合を書く。	火炎:火炎を含む。	青白	21

Tab. 17 第II地点 住居址・環濠内出土土器一覧表

遺跡名・地點 番号(底塗)	基盤・基盤 寸・径・厚・側面大形	底・壁(2cm) 寸・径・厚・側面大形	形・態・の 特・徴	手・法・の 特・徴	胎・土	焼・成	色・調	備・考	Pig 測量番号
22 J-32 台面・裾部 (底塗) 10.0			「ハ」字形に開く孔、小形。	内外面にシハケ付。表面漆はナゲ。	胎の表面に二 ヶ所シハケ付。	真	赤褐色		43 22
23 ハ 高床・腰板 (底塗) 17.1			腰板に施し開く。	外腹：動物の頭、不明。 内腹：無縫、ヘラテ。	腰板に二ヶ所 シハケ付。表面 漆はナゲ。	外腹：暗赤褐色 内腹：茶褐色。			9 23
24 ハ 腹・腰板 (底塗) 17.1			「ハ」字形に開く。	内腹：漆無痕。	腰板に二ヶ所 シハケ付。表面 漆はナゲ。	漆無痕。	漆無痕		6 24
1 J-34 盆・腰板以下 下		17.8	口縁は、わずかに内凹状に外反し、腰板を直線上に折げる二重口縁。腰板は丸く、腰縁も腰縁がある。	内腹と二重縁から腰縁にむけてヨコナギ。 内腹底部はハリ目。	腰縁・小石粘土 多く含む。	外腹：漆無痕 内腹：漆無痕。	漆無痕		44 1
2 J-36 壁・山根部 上	16.8		内反する口縁。	外腹くびれ部附近ナマ底ハケ付。	胎和少量含む。	外腹：漆無痕 内腹：漆無痕。	白灰を帯びた黄褐 色		6 2
3 J-34 壁・ 上	37.1		「く」字口縁。	腰板無痕の角、不明。	胎の表面に二ヶ所 シハケ付。	真	黑色		6 3
4 J-36 上	15.4		「く」字口縁。わずかに外昇気味に内凹する。 山根部の内側傾斜で、内腹で口縁がある。	内腹：「ハ」字形のものでヨコナギ。山根部にはハリ 目。腰縁はナマ底。	胎の表面に二ヶ所 シハケ付。	白灰を帯びた黄褐 色	白灰を帯びた黄褐 色		6 4
5 ハ 腹・ 上	17.8		外反する口縁。	腰板等ヨコナギによってやや凹みあり。くび 縁はハリ目。	小石粘土多く含む。	外腹：漆無痕 内腹：漆無痕。	漆無痕		6 5
6 ハ 上・底部火 上	16.2	18.6	「く」字口縁。口縁に張りの少ない腰縁。	外腹：口縁くびれ部ヨコナギ。腰縁ハケ付。 内腹：漆無痕の角、不明。	胎の表面に二ヶ所 シハケ付。	白灰を帯びた黄褐 色	白灰を帯びた黄褐 色		6 6
7 ハ ? 壁部 (底塗) 6.0			やや丸まじった平底。	外腹：ハリ目。底部に凹み。 内腹：腰板は腰から上に向かってなづけ状。	腰板の形状を少 量含む。	漆無痕 (底塗部分に黒 色)	漆無痕		6 7
1 残端 壁・腰板以下火 下	30.7		紙やかな「く」字口縁。腰板下に三角内唇一筋。	腰板無痕の角、不明。 わざかにハリ目と凸唇にヨコナギが残る。	石突起・砂粒等 多く含む。	漆無痕	漆無痕		45 1
2 ハ 上	22.3		「く」字口縁。内腹にかけてやや張り出した気味。	外腹：ハリ目。口縁はハリ日の後ヨコナギ。 内腹：腰にハリ目と凸唇。	胎の表面を含む。胎 心。	漆無痕	漆無痕		6 2
3 ハ 上	25.3		外張する口縁。腰縁にかけてやや張り出した気味。	内腹と二ヶ所シハケ付。	小石粘土多く含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 3
4 ハ 上・腰板以下火 下	25.2		「く」字口縁。腰縁の張りがない。	内腹：腰板ヨコナギ。腰縁ハケ付。	漆無痕	漆無痕	漆無痕		6 4
5 ハ 上	24.8		外反する口縁。口縁下に二凸二凹一条。(費減が新しい)。	腰板無痕の角、不明。	胎の表面を含む。良	漆無痕	漆無痕		6 5
6 ハ 上	26.4		「く」字口縁。口縁はやや丸めに内ねじかる。	外腹：ハリ目。口縁下に二凸二凹一条。(費減が新しい)。 内腹：腰板は腰から上に向かってなづけ状。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 6
7 ハ 上	21.6		「く」字口縁。腰板が厚くなり、底縁は丸い。	外腹：腰板からくびれ部ヨコナギ。 底縁は不規。	小石粘土多く含む。	漆無痕	漆無痕		6 7
8 ハ 上	33.2		やや外反する細い口縁下に三角内唇一筋。大型でやや厚壁。	外腹：ハリ目。口縁はナマ底ヨコナギ。 内腹：ハリ目。	胎の表面を含む。良	白灰を帯びた黄褐 色	白灰を帯びた黄褐 色		6 8
9 ハ 上	17.9 30.5	23.4	「く」字口縁。軽柔よりやや丸めをして立ちあがり、飛丸底を 腰板に仕切る。	外腹：口縁はハリ日の後ヨコナギ。腰板はハリ 目。腰板は腰から上に向かってなづけ状。	小石粘土多く含 む。	漆無痕 (底塗部分に黒 色)	漆無痕 (底塗部分に黒 色)		6 9
10 ハ 上・底部火 上	22.2	24.0	「く」字口縁。腰板中位より腰縁に向かう直線的にすさまじく 内張する腰縁を有する。	外腹：腰板からくびれ部はハリ目。口縁はナマ底ヨコナギ。 内腹：口縁ハケ付。	胎の表面を含む。 良	漆無痕 (底塗部分に黒 色)	漆無痕 (底塗部分に黒 色)		6 10
11 ハ 上	36.0	25.9	「く」字口縁。口縁部はやや厚くなり、外張部で、腰に切換る。 腰縁は丸い。	外腹：ハリ目。口縁はハリ目。口縁はナマ底ヨコナギ。 内腹：腰板ハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕 (底塗部分に黒 色)	漆無痕 (底塗部分に黒 色)		6 11

Tab. 18 第II地点 環濠内出土土器一覧表

遺跡名・地點 番号(底塗)	基盤・基盤 寸・径・厚・側面大形	底・壁(2cm) 寸・径・厚・側面大形	形・態・の 特・徴	手・法・の 特・徴	胎・土	焼・成	色・調	備・考	Pig 測量番号
12 地盤 壁	10.8 28.6 22.1		極外反する「く」字口縁。わずかに直立する部分をもつて腰に 腰から輪郭部。	内腹：腰板からハリ目へと変化。腰板表面はナマ底ヨコナギ。 外腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	赤褐色	赤褐色		45 12
13 ハ 上・底部火 上	15.0 16.1 13.1		やや外反する腰縁が腰から腰縁へと続く。底縁はやや丸めをも つて立ちあがったと思われる。	外腹：腰板はヨコナギ。腰板上部ハリ目。西口へ 向かってなづけ状。	小石粘土を多量に 含む。	真	黑色		6 13
14 ハ 上	23.8	25.8	外反する口縁。約10分の2の張りの少ない腰縁がつく。	外腹：腰板はナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。 内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 14
15 ハ 上	13.0 13.7 13.0	15.0 13.0	腰縁が約10分の2で外反し、内腹、腰縁から腰板中央部を 底縁へとやや張り替える。	外腹：腰板はナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。 内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 15
16 ハ 上・唇部火 上	14.5 21.0 16.0	16.0	「く」字口縁。底火は神明や上方にある。底縁は 腰板に仕切る。	外腹：ナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。 内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕 (底塗部分では無 色)	漆無痕		6 16
17 ハ 上・側面火 上	17.2 (底塗) 19.3	17.3	「く」字口縁。腰縁、底火で、立ちあがり部分がやや尖点を含む。	腰板無痕の角、不明。 外腹はハリ目とされる。	小石粘土を多量に 含む。生糸状。	漆無痕	漆無痕		6 17
18 ハ 上	13.4	17.0	「く」字口縁。腰板中位に底火をもつ。	腰板無痕の角、不明。 外腹はハリ目とされる。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 18
19 ハ 上	26.1		やや腰から腰板へ外反し、内腹、腰縁から腰板中央部を 底縁へとやや張り替える。	内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 19
20 ハ 上	26.8		「く」字口縁。口縁が外折れし、崩く。	外腹：ハリ目。口縁はナマ底ヨコナギ。 内腹：ハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 20
21 ハ 上	22.5		「く」字口縁。腰板が外折れる。腰板漆は、ヨコナギよりナマ 底板に替わる。	外腹：腰板はナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。 内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 21
22 ハ 上	26.4		「く」字口縁。口縁漆は前の口腔面をなす。	外腹：腰板はナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。 内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 22
23 ハ 上	23.2		「く」字口縁。口縁漆は丸底火を含む。	外腹：口縁はナマ底ヨコナギ。腰板ハリ目。 内腹：ハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 23
24 ハ 上	27.2		強く外折する「く」字口縁で、腰板上部がね上がり崩れて、 内腹にヨコナギによる凹い込みがみられる。	外腹：腰板はナマ底ヨコナギ。腰板はハリ目。 内腹：腰板はナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 24
25 ハ 上	26.3		外張する口縁の口縁上方がね上がり崩れて、内腹の腰縁が崩れ、 外縁は丸底を含む。	腰板と腰縁をつむぎようにしてヨコナギ。 内腹はハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 25
26 ハ 上	25.5		「く」字口縁。腰板上方がわざかにね上がり崩れて、先端は 丸底を含む。	腰板と腰縁をつむぎようにしてヨコナギ。 内腹はハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 26
27 ハ 上	22								6 27
28 ハ 上・底部火 上	13.5	15.0	「く」字口縁。腰縁から外折する「く」字口縁。	口縁漆ヨコナギ。内腹とナマ底。	小石粘土を少量含 む。	漆無痕	漆無痕		6 28
29 ハ 上	16.6		張りの少ない腰から強く外折する「く」字口縁。腰板は丸底 をもつ。	腰板無痕の角、不明。	小石粘土を少量含 む。	やや腰縁を帯びた 黄褐色	漆無痕		6 29
30 ハ 上・腰板以下火 下	13.3		「く」字口縁。口縁漆は腰縁の邊。	外腹：口縁はナマ底ヨコナギ。腰板はナマ底ヨコナギ。 内腹：ナマ底ヨコナギ。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 30
31 ハ 上	13.2		幅く、外折する「く」字口縁。腰縁は底縁に近い。	外腹：口縁はナマ底ヨコナギ。腰板はナマ底ヨコナギ。 内腹：ハリ目。	胎の表面を含む。 良	漆無痕	漆無痕		6 31
32 ハ 上・口縁火 上	6.0		やや丸底を含む平底。	外腹：ハリ目。底縁は丸底。	小石粘土を多量に 含む。	漆無痕	漆無痕		6 32

Tab. 19 第II地点 環濠内出土土器一覧表

遺物名(地番)	器種・品目	計量(㎤)	形 畜 の 特 徴	手 法 の 特 徴	縦	横	色 調	備考	Fu
33 潟窓 売、刷器	(破損)	0.8	平底。	外縁:ハケ目 内縁:テナ。	細かい砂粒を含む 内縁:少々凹む。	白	白系無地	スズ付黒	46 33
34 ハ 雷形火	26.1	側面のある断面を中心とする火鉢。	外縁:ハケ目 内縁:ハケ目	細かい砂粒を含む 内縁:少々凹む。	白	白系無地	スズ付黒	54 34	
35 ハ 売、火	33.8	くびれ部の後が幅広な「く」字型縄。器の少ない側縁。	外縁:ハケ目 内縁:ハケ目	小石粒を多量に含む 内縁:火。	白	浅褐色	スズ付黒	55 35	
36 ハ 売、断面以下	20.1	造「く」字口縁。口唇部が上方にやや尖る形。	外縁:火・内縁:火	粗面感の強い、不明。 内縁:ハケ目は痕跡がわずかに残る。	白	白系無地	スズ付黒	56 36	
37 ハ 売、火	15.6	大きく外側らす火鉢に、すこし内側寄りに内側する造「く」字口縁。	外縁:ハケ目	沙粒・小石粒を 多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	57 37	
38 ハ 売、火縁部	22.6	外縁周縁に縄、直縁部に内側する造「く」字口縁。直縁部の厚	造筋部の内・外縁	小石粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	58 38	
39 ハ 売、火	26.8	造「く」字口縁。石子灰く、外縁側に内側し、底部は中腰から もつ。	底部と上方は、内側部ともヨコナリ。 内縁より下部の内側と火口部。	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	59 39	
40 ハ 売、火	19.0	立柱の高い立ちあがりを呈す。造「く」字口縁。口唇部は丸丸。 口縁:下にはハケ目。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	60 40	
41 ハ 売、火縁部		直立する断面下に三角高腰一帯。	外縁:火の断面下に五つの縫合をへらすで、周ナギ。	細かい砂粒を含む。 内縁:ハケ目。	白	白系無地	スズ付黒	61 41	
42 ハ 売、火縁部	16.9	造「く」字口縁。外縁部に内側する。口唇部はやや外側に突き出で、内側とも立ちあがりもつ。	口唇部は、直縁部裏面はヨコナリ。 内縁:火・火口部。	細かい砂粒を含む。直縁部 内縁:火。	白	浅褐色	スズ付黒	62 42	
43 ハ 売、火	33.3	造「く」字口縁。外縁部に内側し、口唇部は外反し、外縁に火縁 火縁をもつ。	内縁と上方はヨコナリ、外縁にハケ目が残る部分 あり。	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	63 43	
44 ハ 売、火	24.8	直縁部に内側する造「く」字口縁。外縁部底の下方は、ややく くらみをもつ。直縁部の底は直縁。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。火口部はヨコナリ。	白	浅褐色	スズ付黒	64 44	
45 ハ 売、火	24.4	直縁部に内側する造「く」字口縁。直縁部の底は直縁。	内縁と上方はヨコナリ。	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	65 45	
46 ハ 売、火縁部		直立する直縁上に現れる二条の三凹型。	直縁部:ヨコナリ。凸縁部:ヨコナリ。	砂粒を含む。直縁部 内縁:火。	白	浅褐色	スズ付黒	66 46	
47 ハ 売、火縁部以下	14.4	外反する口縁、やや直線的な腹壁から底が弧を描く。	外縁:口唇部ヨコナリ、内縁:ハケ目。 内縁:火・火口部ヨコナリ。底にハケ目。底不規則が 丸みがある。	砂粒を含む。不規則が丸みがある。	白	浅褐色	スズ付黒	67 47	
48 ハ 売、火縁部	(破損) 8.7	丸底のあら平底。断面の腰部に椎円形の剣目をもつ「コ」字型 底盤をもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。腰部はヨコナリ。底盤はハケ目。	白	浅褐色	スズ付黒	68 48	
49 ハ 売	13.3 13.7	丸底・火被りの平底。断面の腰部。口縁はやや立ちあがりをもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。底盤は丸底。	白	浅褐色	スズ付黒	69 49	
50 ハ 売	13.3 15.7	丸底。直縁の腰部。口縁は外反し、上方がわずかに内側張り。	外縁と口縁はヨコナリ。	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	70 50	
51 ハ 売	13.5 18.4	丸底に近い直縁。底部の腰部。口縁部と外反側底に立ちあがり。 口唇部は丸底をもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	71 51	
52 ハ 売	15.0 20.4	丸底に近い直縁。底部の腰部。口縁はやや立ちあがりをもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	72 52	
53 ハ 売、断面以下	18.7	「く」字口縁。口唇部が腰部、薄唇下がやや突出して底が傾斜。 くびれ部分はナテの少しだんでる。	外縁:ハケ目 内縁:ハケ目	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	73 53	

Tab. 20 第II地点 環濠内出土土器一覧表

遺物名(地番)	器種・品目	計量(㎤)	形 畜 の 特 徴	手 法 の 特 徴	縦	横	色 調	備考	Fu
54 潟窓 金・火蓋火	12.9	裏面をもつ断面に外反側底の口縁。口唇部はやや窪い。	外縁:山唇ヨコナリ。腰部:火。 内縁:火・火口部はくわふた痕が3箇所に めぐらされている。	細かい砂粒を含む。 内縁:火・火口部はくわふた痕がある。	白	浅褐色	スズ付黒	59 54	
55 ハ 売、火	15.1	外反する口縁。口唇部は、わずかに下がり寝ます。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	55 55	
56 ハ 売、火縁部	(破損) 4.8	半底。腰部中央で大きめ張り出します。	腰面の凹:火。	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	56 56	
57 ハ 売、火縁部	14.6	強く火反し、やや長い山縁。腰部は直縁。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	57 57	
58 ハ 売、火縁部以下	15.5	「く」字口縁。口唇部は腰部、口唇部は丸底をもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	58 58	
59 ハ 売、火縁部	20.8	外反する口縁の口唇部がやや外反側底で、腰をなす。	口唇部:火・外反側底:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	59 59	
60 ハ 売、火	14.8	強烈な火反の口縁。腰部を削除。口唇部は丸底をもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	60 60	
61 ハ 売、火	19.2	外反する口縁下に緑み目を施す三角高腰一帯。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	61 61	
62 ハ 売、火	15.6	内反する口縁。	内縁と火口部。	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	62 62	
63 ハ 売、火	12.2	やや外反する口縁。断面は丸底をもつ。	外縁:腰部:火、内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	63 63	
64 ハ 売	17.5 19.0	丸底前部に腰部、上方に立ちあがり腰部側面と側縁とて で腰部とし、腰部は丸底をもつ。	外縁:火・内縁:火	砂粒を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	64 64	
65 ハ 売、火	18.6 21.8	受け皿部分腰部に腰部。口唇部が外側に腰部、半らな腰部をなす。 くびれが上まで、「びれ部」の内縁に腰部がある。	外縁:火・内縁:火	砂粒を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	65 65	
66 ハ 売、火	15.8	受け皿部分腰部に腰部。口唇部が外側に腰部、半らな腰部をなす。 くびれが上まで、「びれ部」の内縁に腰部がある。	外縁:火・内縁:火	砂粒を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	66 66	
67 ハ 受け皿 鋼錠	(移変) (破損) 15.0 12.8	受け皿は倒錠部に開き、「びれ部」が上方にある。錠部は直錠部を窓く。	外縁:火・内縁:火	砂粒を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	67 67	
68 ハ 売、火	16.7 (破損) 17.6	受け皿は倒錠部に開き、「びれ部」が上方にある。錠部は直錠部を窓く。	外縁:火・内縁:火	砂粒を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	68 68	
69 ハ 売、火	14.6 18.5	受け皿は倒錠部に開き、「びれ部」が上方にある。錠部は直錠部を窓く。	外縁:火・内縁:火	砂粒を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	69 69	
70 ハ 売	16.8 (破損) 13.7	受け皿は倒錠部に開き、「びれ部」が上方にある。錠部は直錠部を窓く。	外縁:火・内縁:火	砂粒を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	70 70	
71 ハ 売、火	12.5	受け皿は外反して腰、腰が傾斜。	外縁:火の上に腰部ナラ。口唇部はヨコナリ。 内縁:火・火口部。	砂粒等を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	71 71	
72 ハ 売	12.4 17.6	(破損)	受け皿部に腰部、腰部底上でやや突出を呈し、腰部:火。 内縁:火の腰部をもつ。	砂粒等を含む。	白	浅褐色	スズ付黒	72 72	
73 ハ 売	16.2 17.7	受け皿部と外縁部で腰部、腰部がわざに立ちあがる。「びれ部」が上方に ある。	外縁:火・内縁:火	砂粒等を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	73 73	
74 ハ 売、火	12.3	受け皿部と腰部部分が分離し、腰部はさく外縁に窓く。 腰部:火。	外縁:火の上に腰部ナラ。口唇部はヨコナリ。 内縁:火・火口部。	砂粒等を多量に含む。	白	浅褐色	スズ付黒	74 74	

Tab. 20 第II地点 環濠内出土土器一覧表

遺物 出土地番 (地図)	器種・基部 口径(直径) 底径(高さ)	形 務 の 特 徴	手 法 の 特 徴	地 土	地 色	備 考	Fig. (遺物番号)
75 鐘	器口: 幅下平厚脚 11.1	縦隔壁に開く受け窓。	外輪: 「これ組合に組の酒器。縦隔壁ハケル。 内輪: 窓」	小孔を多く含む 縦隔壁	灰	75	
76 □	△・受け脚 17.4	軸側面に開く受け脚。	外輪: ハケル 内輪: 縦隔壁は底面に張る際の漆器調の例。	數孔の印を二つ 多量含む。	灰 淡灰色	△ 26	
77 □	△・受け脚、直脚 火	△△△△より「△」字形に異く。	外輪: ハケル 内輪: 縦隔壁は底面に張る際の漆器調の例。	△△△△の印を二つ 多量含む。	灰 △△△△を筆記した船底あり。	△ 27	
78 □	△・受け脚 15.0	明瞭な△くぎれのない、やや無地に近いもの。基部も中空で厚くなっている。	内輪: へたり腰きが部分的にある。 内輪: ハケルがわずかに残る。	石突部等を含む 縦隔壁	外輪: 富貴色と同 内輪: 黒褐色	△ 28	
79 □	△△△△	瓶口に向かって縦やむ間に開く。横構造は平造。	外輪: ハケル 内輪: 縦隔壁と下輪脚はハケル。△△△△が部分洗付 △△△△。下部は「△△△△」の印を筆記する。	△△△△を筆記 多量含む。	外輪: 富貴色 内輪: 淡褐色	△ 29	
80 □	△・受け脚、直脚 火	△△△△が上方で、瓶底の開きが少なく筒状に近く、下方でやや開く。	外輪: へたり腰きの後、ハケル。△△△△が部分洗付 △△△△。下部は「△△△△」の印を筆記される。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 火	△ 30	
81 □	△・受け脚火 30.2	瓶底の開きが、形がややいびつな。小部分のみ。	外輪: 瓶底に△△△△。縦隔壁は底面に張る際の△△△△。 内輪: 縦隔壁は底面に張る際の△△△△。下部は△△△△。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 火	△ 31	
82 □	△・直脚 47.4	中や内側斜面に「△△」字形に開く。	内外輪ともハケル。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 32	
83 □	△△△△	△△△△字形に開く。	昔器調の所、不明。	粗か△跡付△△△△	△△△△	△ 33	
84 □	△・直脚火 6.2	不安なやや丸底の直脚。大き目外反する口輪脚をもつ。直脚の脚部。	内外輪ともハケル。	粗か△跡付△△△△	△△△△	△ 34	
85 □	△	やや尖り足底の直脚。大き目外反する口輪脚をもつ。直脚の脚部。	外輪: ハケル 内輪: 口輪脚ハケル。脚上部2カナ、下部下脚アット。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 35	
86 □	△	やや△びつな直脚。外反する口輪脚。口輪脚はやや厚く、直脚底は丸底あり。	外輪: ハケルの上部をへたり腰き。口輪脚は、ハケルの上部。 内輪: ハケル	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 36	
87 □	△	丸底のある瓶底に横やや外反する口輪脚。口輪上方面は、ねだりで、瓶底は横ヨコナロコナロ。直脚ハケルの脚部。ナメ。	外輪: 瓶底は横ヨコナロコナロ。直脚ハケルの脚部。ナメ。 内輪: 瓶底はハケルからナメアリによる瓶底不規。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 37	
88 □	△・直脚火 24.8	や座面に近く、口部はやや内側弧底で、直脚は丸底をもつ。	外輪: ハケルの上部からハラリと下部。口輪脚ヨコナロコナロ。直脚ハケルの脚部。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 38	
89 □	△	△△△△と直脚。	外輪: ハケル。瓶底に△△△△。不規則にあかすか跡付△跡付△△△△。直脚底は△△△△。	△△△△を多量に 含む。	△△△△	△ 39	
90 □	△	△△△△と直脚。	外輪: △△△△の裏底は直脚ハケル。△△△△にあかすか跡付△跡付△△△△。直脚底は△△△△。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 40	
91 □	△・直脚・口輪脚火 9.4	△△△△と直脚。口輪脚は丸底をもつ。直脚底は口輪の△△△△の裏底が△△△△である。	外輪: 丸底へたり腰き。 内輪: 上部はナメ。下部はハケル。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 41	
92 □	△・直脚火土器 8.0	△△△△と直脚。	此瓶底は△△△△一定している。頭をもれりに盤づけられ ている。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 42	
93 □	△・直脚 10.9	△△△△と直脚。	外輪: △△△△の裏底。ヨコナメ。ナメアリ。 内輪: ナメアリ。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 43	
94 □	△・直脚火土器 7.2	△△△△の底が△△△△と直脚。	外輪: 直脚ハケル。口輪脚はナメアリ。 内輪: ナメアリ。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 44	
95 □	△・直脚 10.2	丸底に近い直脚。内側斜面に丸底がある。	外輪: ハケル。口輪脚部分はヨコナメ。直脚の脚部。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 45	

Tab. 22 第II地点 環濠内出土土器一覧表

遺物 出土地番 (地図)	器種・基部 口径(直径) 底径(高さ)	形 務 の 特 徴	手 法 の 特 徴	地 土	地 色	備 考	Fig. (遺物番号)
96 鐘	小形杯 9.0	丸底。△は複雑に複雑になる。	内外輪とも口縁部が多少みられる。	細かい△跡付△△△△ 多少含む。	内輪: 丸底暗 外輪: △△△△と直脚	53	36
97 □	△・直脚火土器 8.6	△△△△と直脚で、口輪部が複雑になる。△△△△の脚部。	外輪: △△△△と直脚で押された瓶底。 内輪: 上部ハケル。下部に△△△△。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 97	
98 □	△	△△△△の脚部。瓶底と直脚と△△△△。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 98	
99 □	△・直脚 14.1	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 99	
100 □	△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 100	
101 □	△・直脚火土器 9.4	△△△△と直脚。直脚に△△△△と直脚から△△△△。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 101	
102 □	△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 102	
103 □	△・直脚 15.3	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 103	
104 □	△・直脚 33.0	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 104	
105 □	△・△△△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 105	
106 □	△・直脚 17.6	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 106	
107 □	△・△△△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 107	
108 □	△・△△△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 108	
109 □	△・直脚 9.3	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 109	
110 □	△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 110	
111 □	△・直脚 5.2	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 111	
112 □	△・直脚 8.6	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 112	
113 □	△・直脚 7.2	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 113	
114 □	△・△△△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 114	
115 □	△・△△△	△△△△と直脚。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△を筆記 多量含む。	△△△△	△ 115	

6. 第III地点の調査



Fig. 67 第 III 地 点 遠 景 (Ph.14)

① 第III地点の概要

本地点は本遺跡のはば中央に位置する。本地点の周辺部は圃場整備のため削平を受け、また本地点も大幅な削平を受ける。遺存する遺構は方形周溝遺構2基のみである。第1号は輝緑凝灰岩の未製品石包丁6個と弥生時代後期壺形土器を出土している。この遺構を墓址とするか否かの結論は周辺の調査知見を待ちたい。

② 方形周溝遺構

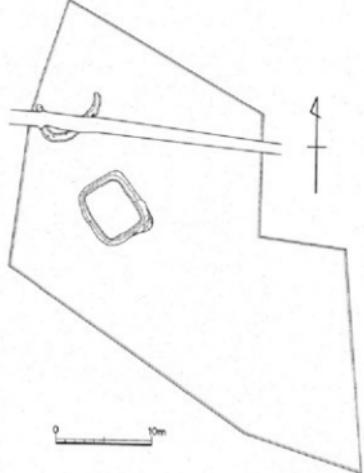


Fig. 68 第III地点遺構配置図（縮尺1／500）

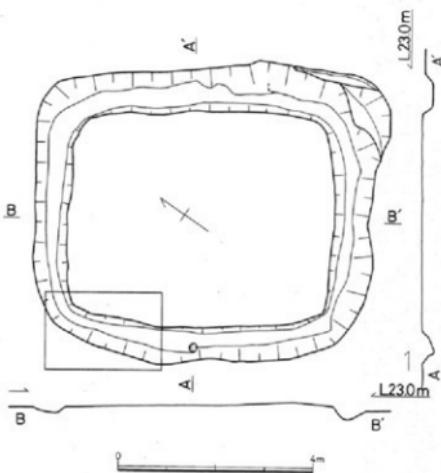


Fig. 69 第1号方形周溝実測図（縮尺1／80）

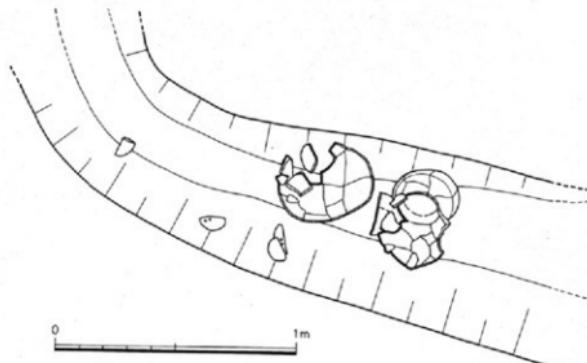
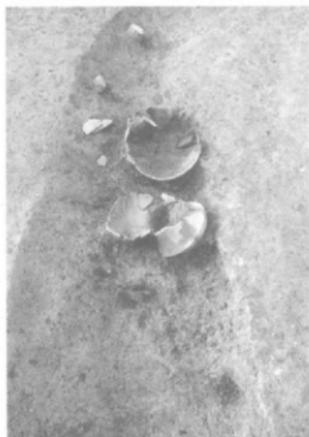


Fig. 70 第1号方形周溝内遺物出土状況実測図（縮尺1／20）

Fig. 71 第1号方形周溝遺構内出土土器
(Ph. 15)

6. 第III地点の調査

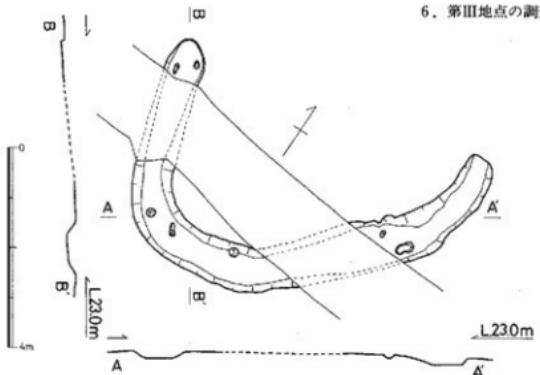


Fig. 72 第2号方形周溝実測図(縮尺1/100)

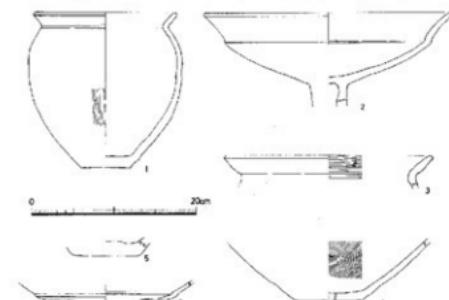
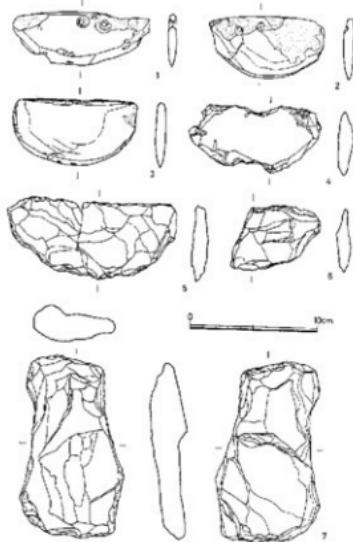
Fig. 73 第1・2号方形周溝内出土土器実測図(縮尺1/6)
1~4(第1号方形周溝) 5・6(第2号方形周溝)

Fig. 74 第1号方形周溝出土石器実測図(縮尺1/4)

Tab. 23 第III地点 第1・2号方形周溝内出土土器一覧表

番号	出土遺構	器種・器形	法量 (単位cm)	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考	Fig.
1	第1号方形周溝	甕	口 径 17.2 基 高 18.7 最大径 18.5	口縁と他の結合部にやや段をなし、梗部の外側とともに明顯である。 「ノ」字口縁。腹部は厚手。	口縁部内外面ともヨコナギ。 内面：梗部へラ筋をもつ。 外縁：内縁より外側へ、高い はナギ。下部下方 2cm處に指で押せんこ。 なでた痕あり。	細かい長石粒・ 石英粒・砂粒を含み、きめ、や や細い。	良	淡青褐色		73
2	"	高 粱 鋤削灰	口 径 30.3 基 高	口縁部の結合部にやや段をなし、梗部の外側とともに明顯である。 口縁部は青少味で口縁には若干丸味をもつ。	器底磨滅の為、不明。	多量の細かい長石粒と砂粒などの他の小石粒を含む。 きめ細かい。	?	淡褐色 外縁一部は淡褐色		?
3	"	甕 口縁部	口 径 25.3 基 高	外反する口縁。	外縁：口縁部上方とくびれ付近に1cm程の粗先によるヨコナギがあり、更に口縁部全面にヨコナギ。 内面：ハケ目	小石粒を多量に含む。	?	外縁：若干の赤味 を帯びた淡褐色 内面：淡褐色		?
4	"	甕 追削	口 径 8.0 基 高	平底。	外縁：磨滅の為、不明。 内面：ハケ目。底面付近はナギ。	砂粒・小石粒を多量に含む。	?	外縁：やや暗い褐 色 内面：暗褐色		?
5	第2号方形周溝	?	底 径 8.1 基 高	若干の丸味をもつ厚手の平底。	底部外側に部分的に単位1.3 cmの細かいヶ口あり。	?	?	淡青褐色		?
6	"	高杯 口縁・脚削灰	口 径	杯底部が薄く、やや平らな面をなす。結合部に段があり、梗が明顯。	器底磨滅の為、不明。	?	きめ細かい。	淡赤褐色		?

7. 第IV地点の調査



Fig. 75 第 IV 地 点 遠 景 (東南から) (Ph.16)

7. 第IV地点の調査



Fig. 76 第IV地点構造配置図 (1/500)

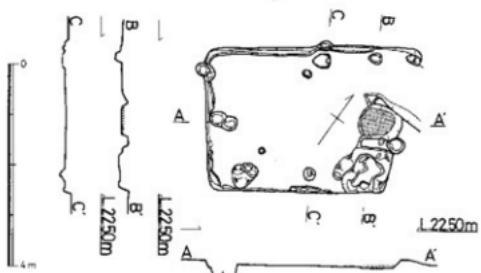


Fig. 77 第5号住居址実測図 (縮尺1/100)

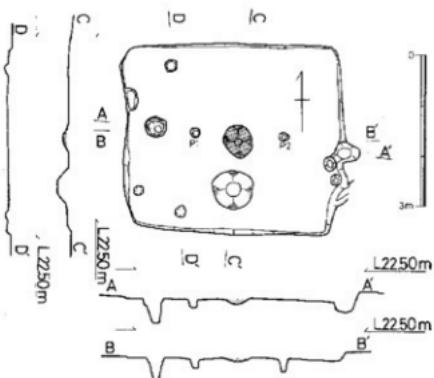


Fig. 79 第6号住居址実測図 (縮尺1/100)



Fig. 78 第5号住居址出土
紡錘車 (縮尺1/3)

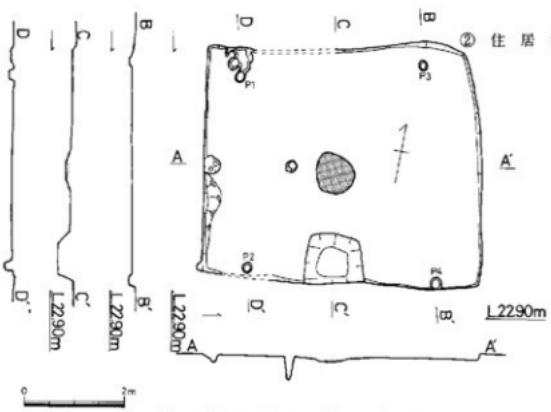


Fig. 80 第7号住居址実測図（縮尺1/100）

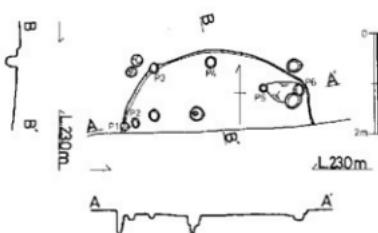


Fig. 82 第9号住居址実測図（縮尺1/100）

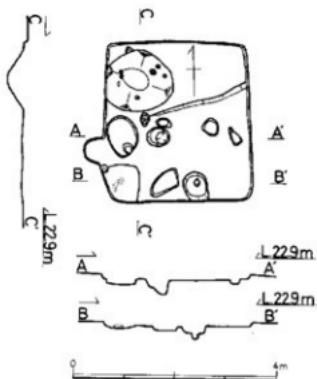


Fig. 81 第8号住居址実測図（縮尺1/100）

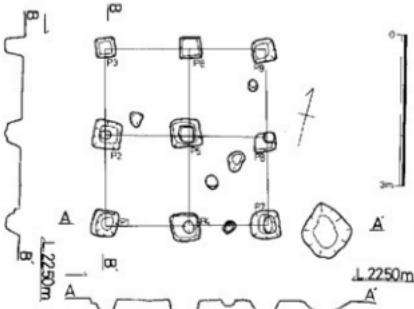


Fig. 83 第4号掘立柱実測図（縮尺1/100）

① 第IV地点の概要

遺跡の西部に位置し標高23メートルから22メートルの高さに立地しているのが本地点である。北端は急に落ち込み現在の水田面へと続き、南は標高21メートルと本地点より低く後世の削平は受けていないものの遺構は見えない。東側は塙場整備の削平を受けているようである。西側は九州の流通を支える九州縦貫自動車道が南北へと走る。

本地点の南半に住居址10軒と1軒の方形の柱穴をもつ掘立柱遺構が検出されている。第9号住居址は形状からみて弥生時代中期に築造されたものと思われるが、第5号から第8号住居址と第4号掘立柱遺構は、古墳時代終末期から奈良時代の所産と思われる。

住居址を概観すると9号住居址は円形の平面プランに柱穴を配している。5号住居址から8号住居址まで平面プランは方形の形状を示している。炉址は中央部に遺存するもの（第6号と第7号）と窓の痕跡をもつもの（第5号と第8号）がある。柱穴から柱の配置を類推するに第7号が4本の柱と思われる以外定形的な姿は見られない。恐らく2本柱が主流かと思われる。

方形の柱穴を有つ掘立柱遺構は見た目に堅牢な建造物を支えた柱の想影をとどめている。

本地点の北半には弥生時代中期に営なまれた甕棺墓主体の共同墓地が検出されている。

②住居址

第5号住居址 (Fig. 77)

第IV地点発掘区の西寄り南側に位置する。本遺跡で、カマドを有する唯一の住居址である。長軸3.88m、短軸2.88mの長方形を呈するが、北辺が4.16mとやや長い。主柱穴は不明である。カマドは東辺中央部にあり、櫛部に相当する盛り上がりも残存している。カマド内部からは焼土も検出されている。カマドに接して東南隅に不整形の土塙がある。周溝は東壁側を除き、ほぼ一周していたと思われるが、深さも6cm、或いはそれ以下と浅く、南側では部分的に途切れている。床面は平坦。壁高は10~14cm程度で、上面がかなり削平されている。長軸方位はN-54°-Eである。本住居址の東北角が、東西に延びている溝状遺構を切っていることから、溝状遺構よりも新しいといえる。なお、石製の紡錘車 (Fig. 78) が1個出土している。径44mm、厚さ8.5mm、孔径7mmである。断面が台形を呈すもので、面も平滑である。

第5号住居址内出土土器 (Fig. 83'の1・2・5)

出土土器は少なく、いずれも小片である。甕・椀・高杯があり、1は大きく、なだらかに外反する甕の口縁と思われる。外面下方に巾の広いハケ目状のものが施されており、その上方はヨコナデである。2と5は須恵器である。2の椀の底面端は、ヘラにより一削り整えられている。3は高杯と思われる。脚部を欠いているが、杯部は楕円形を呈すものである。

第6号住居址 (Fig. 79)

第IV地点発掘区の西寄りで、第5号住居址の北東6.8m、第7号住居址の西5mに位置する。長軸4.4m、短軸3.78mの長方形を呈す。住居址の東方に、東辺南側の壁際より北東方向に延びる細い溝と細長い土塙が続いているが、弥生時代中期頃の遺構と思われ、この遺構よりも本住居址の方が新しいといえるであろう。主柱穴はP1・P2の2個で、炉を挟んで東西方向にある。径が約20cm、深さ16~25cm程度で、この2個のピット間の心心距離は1.76m。炉からの距離もほぼ等しくなっている。P1と西辺の中間に径40cm程のピットがあり、この延長線上、東壁にやや突き出て径48cm程のピットがみられる柱穴に関係するものかは不明である。炉は床面中央にあり、やや楕円形を呈し、炉内より焼土も検出された。炉と南辺の中間に径78cm、深さ21cmの不整円形の掘り込みがある。床面は平坦。壁高は非常に浅く、削平が著しいが、東壁では20cm弱である。長軸方位は、ほぼ東西方向である。なお、出土土器はいずれも小片で、復元しえなかった。

第7号住居址 (Fig. 80)

第6号住居址の東方5mに位置する。長軸5.5m、短軸4.6mの長方形を呈す。主柱穴はP1~4の4個で、各々径20cm程で深さはP3が最も浅く約5cm、P2が約14cmである。南側の2個は壁際にあり、北側の2個は北壁より26~42cm程離れた所に位置している。心心距離はP1~P2、P2~P4が3.8m。P1~P3が3.68m、P3~P4が4.3mである。炉は床面中央にあり、焼土を伴う。南壁際、中央部に120×96cmの方形の土塙がある。床面は平坦。壁高は6~12cm。

発掘区の東寄りに位置する。長軸3.2m、短軸2.92mでは正方形を呈す。長軸方位は南北方向である。主柱穴は不明。炭化物含土が西南隅にあり、焼土もここより少量、検出されたのみである。西側の北寄りに長径1.28mのすり鉢状を呈する土塙がある。又、北側の床面は一段高くなっている。壁付近の床面はしっかりしていたが、中心に向かって、やや軟らかな状態であった。壁面は約8cmであ

る。なお、すり鉢状の土坑内より鐵器片 (Fig.139の1) が出土している。

第8号住居址内出土土器 (Fig.83'の4・7・8) 4と7は高杯の脚部。7は小形高杯で、稜をなし裾部が開くもので柱状部外面はヘラ削りが明瞭である。8は須恵器で、甕の口縁かと思われる。

第9号住居址 (Fig.82)

発掘区の東寄り南端、第8号住居址の南9.6mに位置する。発掘区域外にかかり、全体の強度を欠いている。円形で推定径は約3.8mである。主柱穴は不明であるが、考えられるものは、30~40cmと比較的深い西側壁際のP1、P3とP4、東側のP5の4個か、或いは、やや浅いが、大きさと壁より10cm前後、離れた位置等から考えられるP2・P4・P6の3個のビットであろう。

炉はこの範囲内では検出されなかった。床面は赤黄褐色土で粘土質の土も混入しており、かなり柔らかい。壁際で緩やかに上がり、全体では東側に行くに従い、やや下がり気味である。壁高は10cm弱で、上面を削平されている。出土遺物は土器片10数片と少なく、土師器や須恵器の杯片等が含まれており、流れ込みが多いと思われる。いずれも小片で、復元しえなかった。

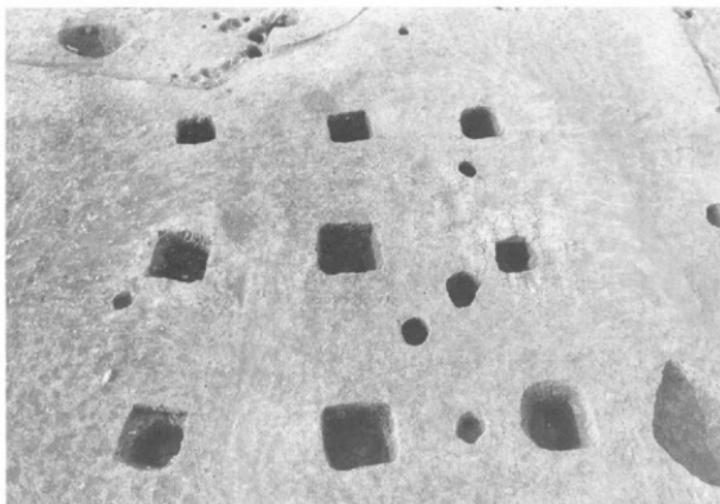
③ その他の遺構

第4号据立柱遺構 (Fig.83)

第6号住居址の南35cm (最短距離)、第7号住居址の西方2.4m (最短距離) に位置する。残りのよいもので、正方形プランを呈し、2間×2間の規模をもつ。桁行が350cm・梁行320cmである。桁行方向はN-15°-W。柱間の寸法もほぼ一定しているが、表 (Tab.30) を参照されたい。柱穴のプランは正方形。



第IV地点遠景 (Ph.17)



第4号堀立柱造構(Ph.18)

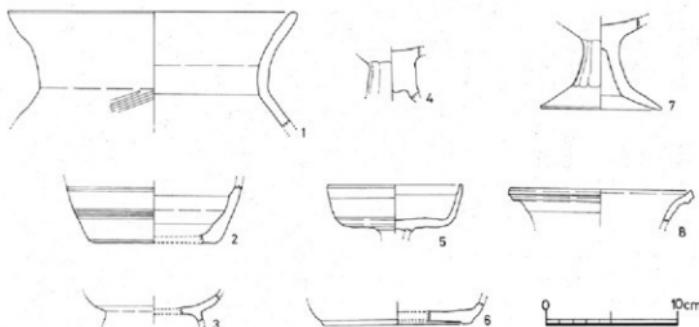
Tab. 24 第4号堀立柱造構計測表

第IV地点 第4号

(単位cm)								
P1～P2	P2～P3	P4～P5	P5～P6	P7～P8	P8～P9	平均	P1	P2
幅 186	170	178	172	176	174	175	49	55
行 350		350		350		350	35.4	32
P1～P4	P4～P7	P2～P5	P5～P8	P3～P6	P6～P9	平均	29.5	32
梁 164	156	166	154	166	154	160	33.5	43
間 320		320		320		320	37.5	44

P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	平均
49	55	38	57	59	43	57	43	44	49.3
深 29.5	32	35.4	32	43	33.5	43	37.5	44	36.7

標 (東に向かって) 小数点2位4捨5入
方位N-15'-W (14.5')

Fig. 83 第5・8号住居址、第4号堀立柱造構内出土土器実測図(縮尺1/4)
1・2・5(J 5)、4・7・8(J 8)、3・6(第4号堀立柱造構)

Tab.25 第IV地点 住居址一覧表

No.	形態	規模(m)	長軸方位	ペツド状通構	板及びカマド	焼土	土迄の通穴隙	流溝	主柱穴	備考
5	長方形	2.88×3.88	N=54°-E	なし	カマド内	ガマド内	カマドの雨側に所々穴開きあり。	東壁側を除き、13全	不明	東北角、溝を切っている。
6	"	3.78×4.4	N=89°-W	"	炉中火	炉内	炉中火	なし	なし	(2)
7	"	4.64×5.32	N=80°-E	"	"	"	南壁際中央	"	4	
8	12は正方形	3.2×2.92	南北方向	"	不明	南側角に焼土を含む う土塗あり	不明	"	不明	
9	円形	(幅径)約3.8	—	"	"	なし	—	—	—	溝跡が廻路区画外

Tab.26 第IV地点 住居址・掘立柱造構内出土土器一覧表

遺物番号	出土場所(住居址)	器種・器形	法量(単位cm)	形の特徴	微	粘土	地底	色調	備考	Fig.
1	J 5	口付杯形	口径 21.6	外縁：口輪下部／びびり唇に沿 て、コナツゲ状の縫合部に沿 て、大いゝヶ日日のもの。 内面：簡略的、不規。	縫合部を含み、長 石片等も多少含 む。	良	外縁：黒褐色 内面：白褐色	外縁：黒褐色 内面：白褐色	83*	
2	"	梅口杯・底部一 部穴	口径 9.0	須彌器 直縁型に立ちあがる。 外縁：増方向に4～7本程度の縫 合部がある。	縫合部を含 み、稍良。	n	明灰色	n	n	
3	第4号圓 立柱造構 穴	口付杯 高台付	口径 10.0	高台の付け根の裏面、ヘラ削りの 後、なでた可塑性あり。	微細の石粉を若 千含み、良。	n	外縁：黒褐色 内面：黒褐色	n	n	
4	J 8	高杯 基と脚の接合 部	口径 10.9	接合部の裏味がある。 外縁：ヘラ削り 内面：ヘラにより削り整形	長石粒等を若干 含む。	n	淡赤褐色	n	n	
5	J 5	高杯 脚部欠	口径 10.0	須彌器 小形で、杯底部より背離し、立 ちあがる。口輪部は薄くなれる。	口唇部ヨコナナ 度の必ずしも味を含む。	n	淡赤褐色	n	n	
6	第4号圓 立柱造構	口付杯 底部	口径 10.9	台形ばかり丸味を含むている。 ヨコナナ度及びナナ度。	砂質の少量化 した細かい。	n	白味がかっ た赤褐色	n	n	
7	J 8	高杯 杯部欠	口径 9.2	小形。相撲にかかる部分で頭曲 し、後をなして更に曲く。瓶身 部も僅くなる。	微細の小石粒を 含む多く含 む。	n	外縁：白味がかっ た赤褐色 内面：淡赤褐色	n	n	
8	"	盤 口付杯	口径 14.0	外縁：口輪部 内面：口輪部外縁に 突き立て段を作なす。	ヨコナナ度	n	若干、緑色がかっ た灰白色	n	n	

④ 妄 棺 墓

第IV地点北半に弥生時代中期の妄棺墓群即ち共同墓地があり、その西側に流れる自然流路の溝北端に、共同墓地を祭る祭祀造構が見える。

妄棺墓に与えられた整理番号は34号までであるが、この内妄棺片をもつ墓坑が4基（K 6、24、27、31）、縄文時代前期の土器溜り造構（K30）が含まれており、妄棺と認定された基数は29基である。

妄棺墓に遺存する人骨は皆無である。妄棺のみの形状から可視的に把えて成人、小児の分類を図れば、成人用14基、小児用15基で、妄棺片をもつ墓坑をその破片の形態から小児と考えれば小児用が19基となる。小児の死亡率の高さは他の遺跡の資料と比較して平均値を保つものである。

成人、小児用の妄棺墓には合わせ口式のものと単式のものがあって、成人用は合わせ口式7基、単式7基、小児用は合わせ口式5基、単式10基である。

成人用の合わせ口式の組み合せを見ると鉢と甕のものが4基、甕と甕が2基、不明形態と甕が1基である。小児用の合わせ口の組み合せは鉢と甕が2基、甕と甕が2基、壺と甕が1基である。

祭祀造構を見ると、浅く埋められた土坑に壺形土器や高杯形土器が見られるが、土器が精製された纖細な胎土であるが故に覆土に侵蝕され復元不能な面が多々あったが、蓋付高杯形土器をどうにか図化している。

本妄棺墓の時代は弥生時代中期に比定されるが、小規模な共同墓地である。小規模な共同墓地の有り方が、弥生時代農耕社会にどう位置付けられるのか今後の課題となる。



Fig. 84 妄 棺 墓 遠 景 (西から) (Ph.19)

④ 瓷棺墓

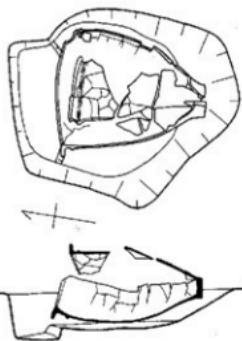


Fig. 85 第1号甕棺墓実測図（縮尺1／20） Fig. 86 第2号甕棺墓実測図（縮尺1／20） Fig. 87 第3号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

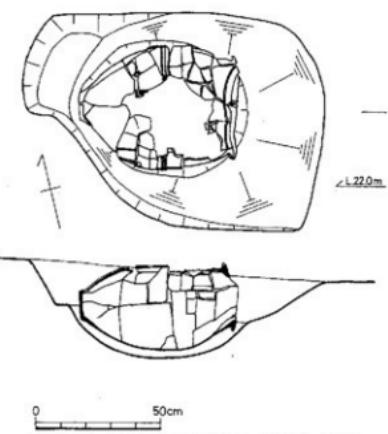


Fig. 88 第4号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

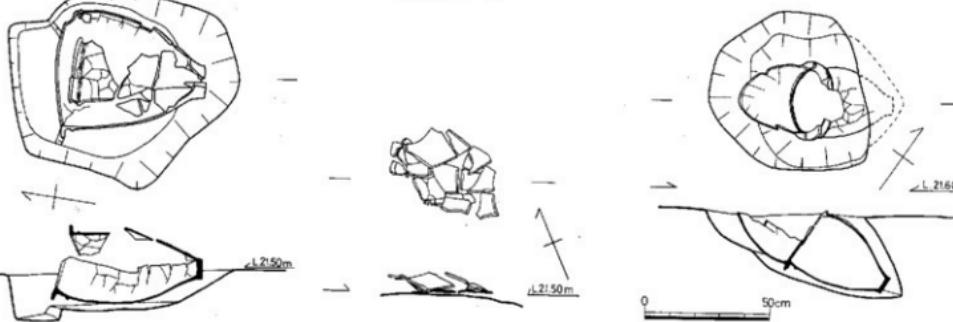


Fig. 86 第2号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

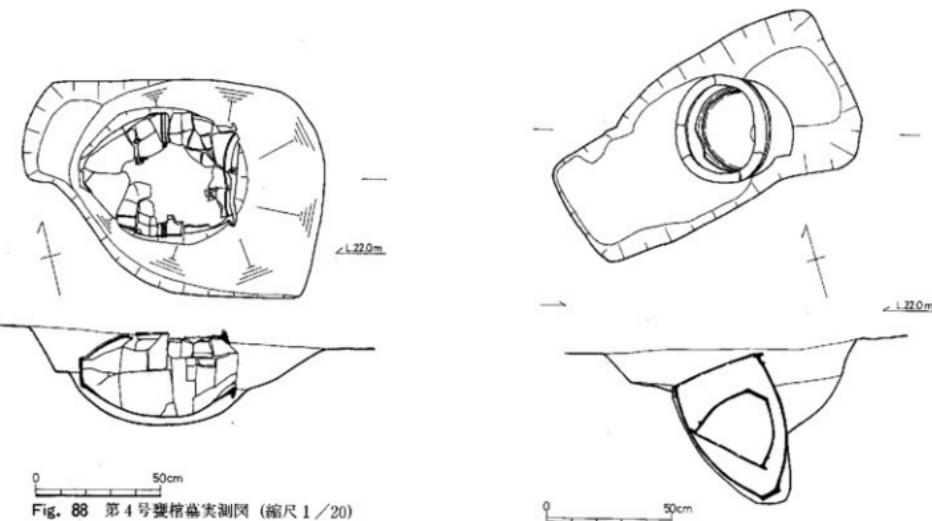


Fig. 89 第5号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

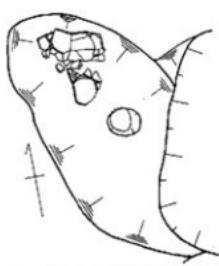


Fig. 90 第6号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

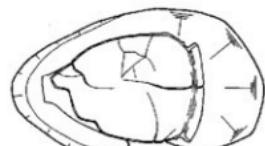


Fig. 91 第7号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

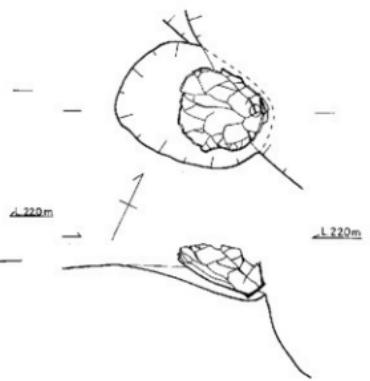


Fig. 92 第8号甕棺墓実測図（縮尺1／20）

Fig. 93 第9号棗情墓実測図 (縮尺1/20)

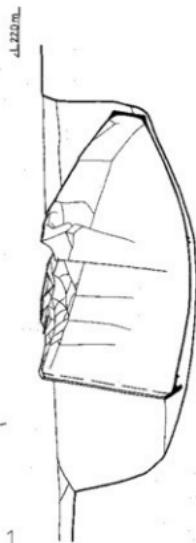
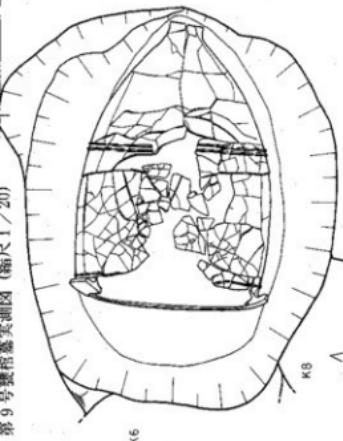


Fig. 94 第11号棗情墓実測図 (縮尺1/20)

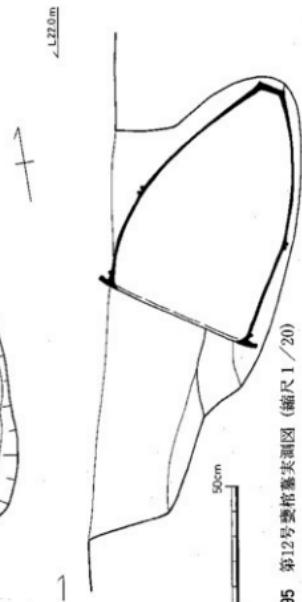
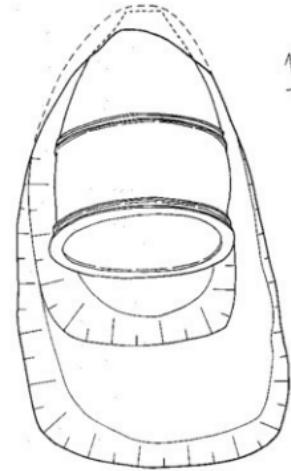
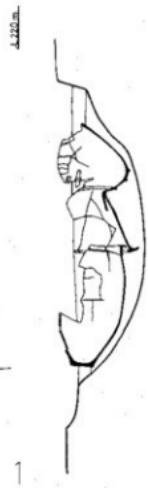
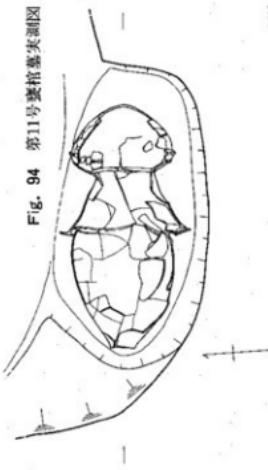


Fig. 95 第12号棗情墓実測図 (縮尺1/20)

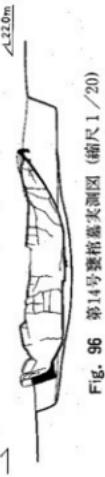
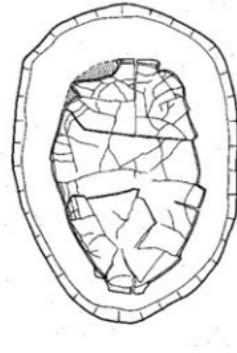


Fig. 96 第14号棗情墓実測図 (縮尺1/20)

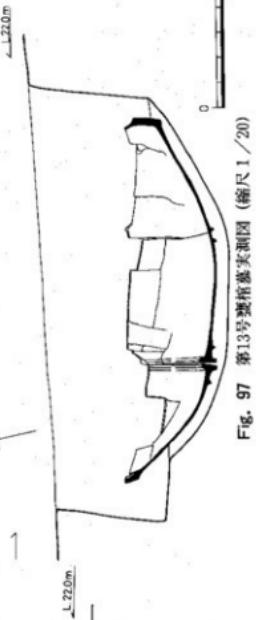
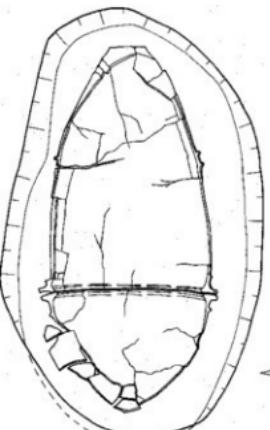


Fig. 97 第13号墓室实测图 (缩尺1/20)

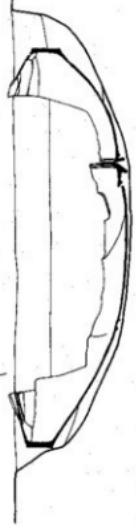
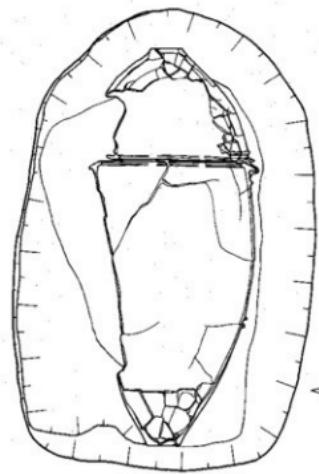


Fig. 98 第15号墓室实测图 (缩尺1/20)

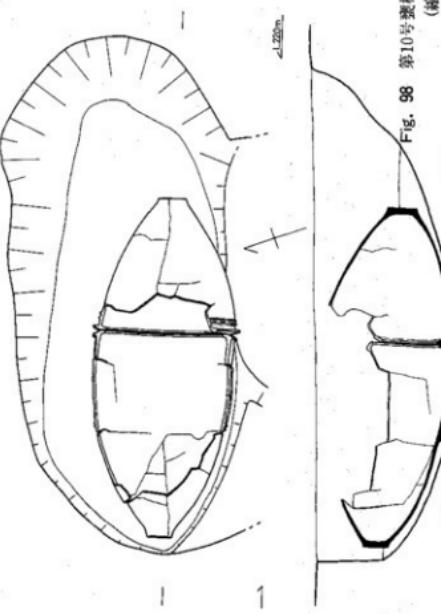


Fig. 99 第10号墓室实测图 (缩尺1/20)

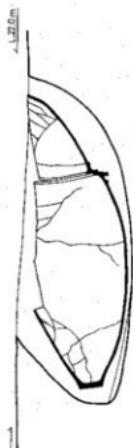
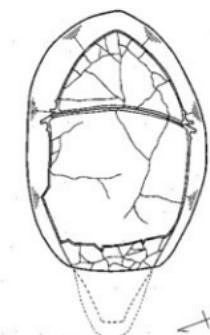


Fig. 100 第16号墓室实测图 (缩尺1/20)



Fig. 103 第19号要棺墓実測図 (縮尺1/20)



Fig. 104 第20号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

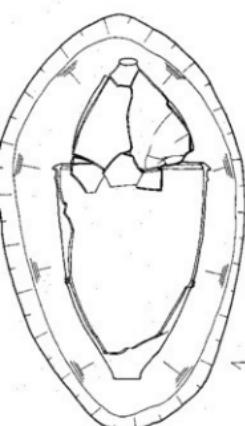


Fig. 105 第21号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

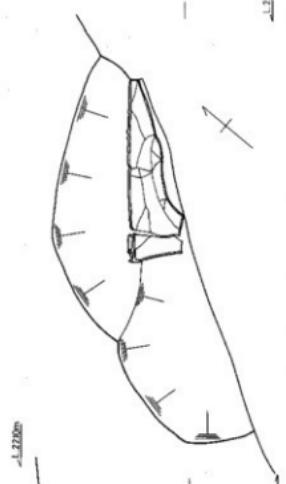


Fig. 106 第22号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

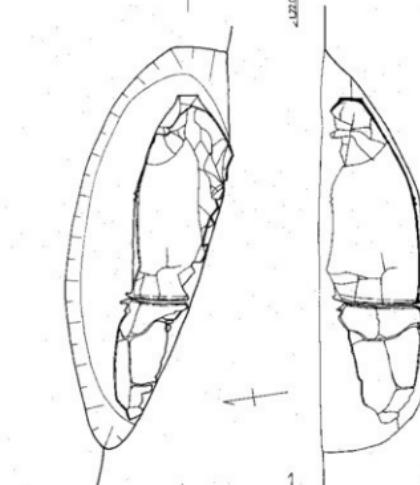


Fig. 107 第23号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

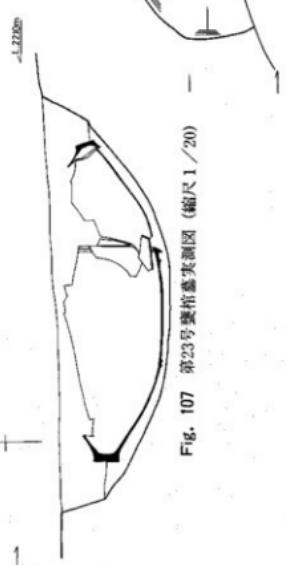


Fig. 108 第24号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

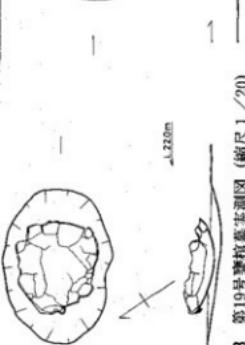


Fig. 109 第27号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

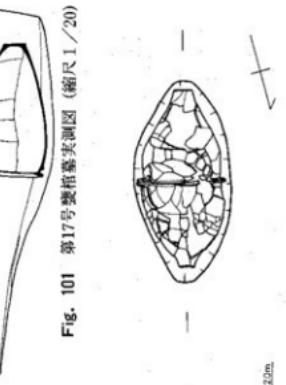


Fig. 101 第17号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

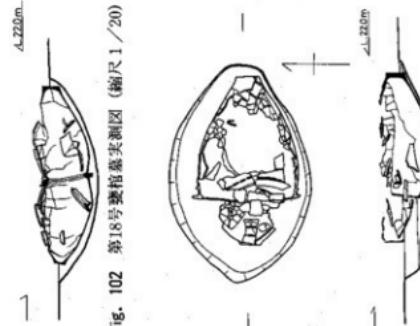


Fig. 102 第18号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

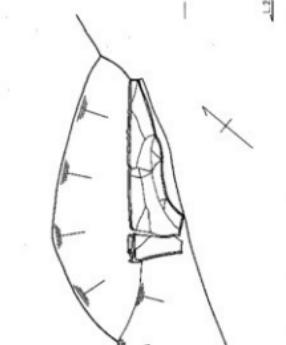


Fig. 103 第19号要棺墓実測図 (縮尺1/20)



Fig. 104 第20号要棺墓実測図 (縮尺1/20)

④ 蠶 棺 墓

Fig. 110 第25号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

Fig. 111 第26号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

Fig. 112 第28号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

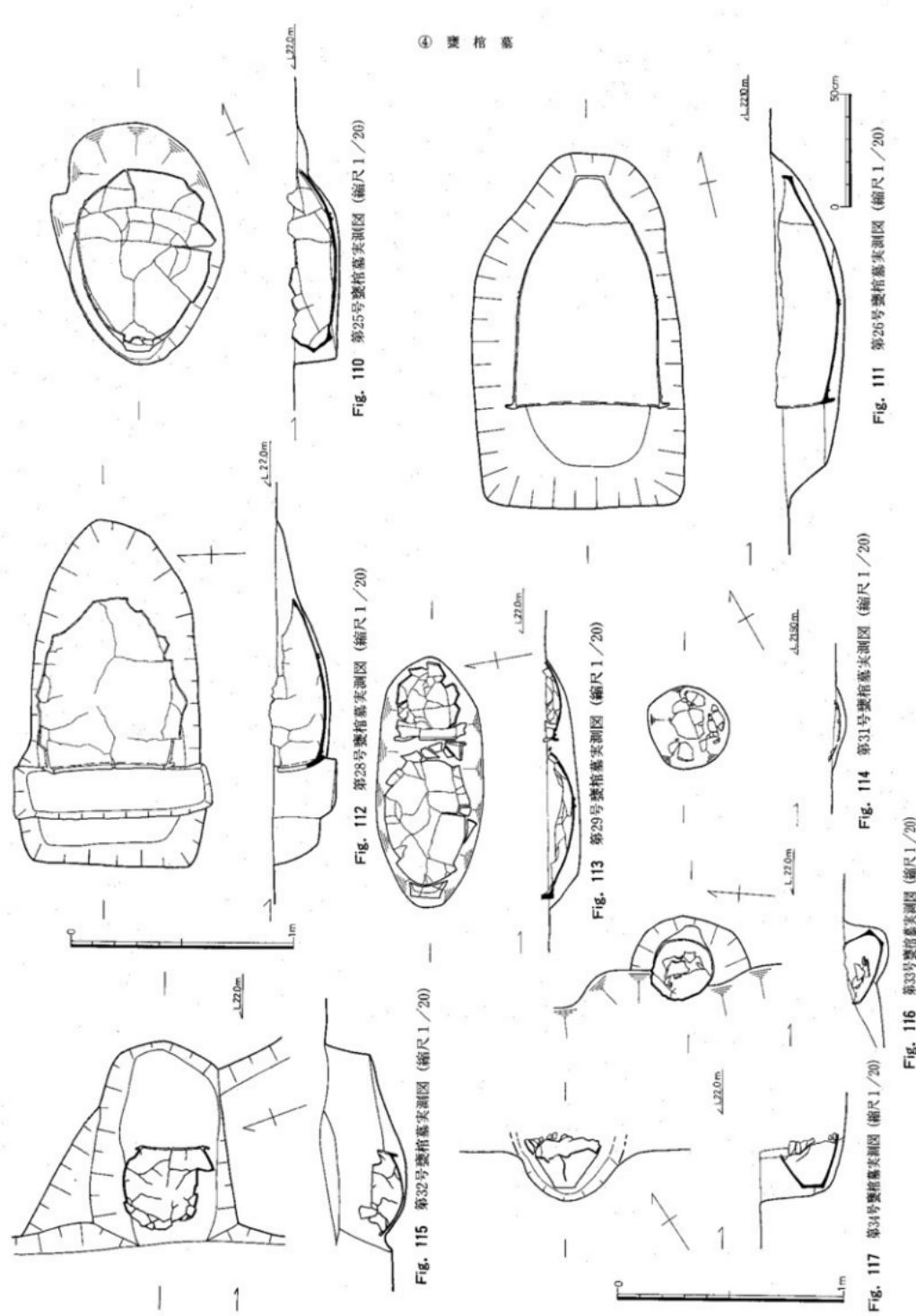
Fig. 113 第29号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

Fig. 114 第31号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

Fig. 115 第32号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

Fig. 116 第33号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)

Fig. 117 第34号蠶棺墓实测图 (缩尺1/20)



⑤ 瓢棺墓群に伴う祭祠遺構

「④瓢棺墓」(67頁) 参照。

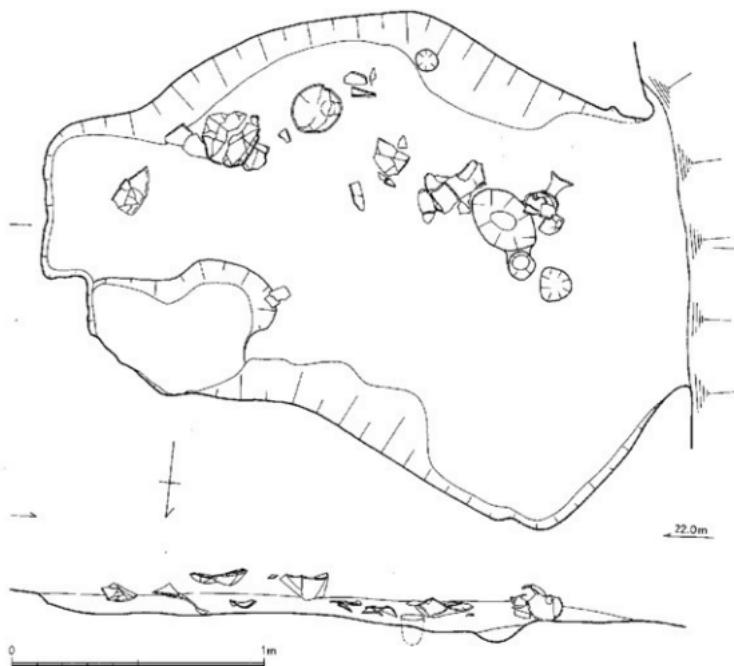


Fig. 118 瓢棺墓群に伴う祭祠遺構実測図 (縮尺1/20)

⑥ 繩文時代の遺構

「8. その他の遺物。
縄文式土器」(84頁)
参照。

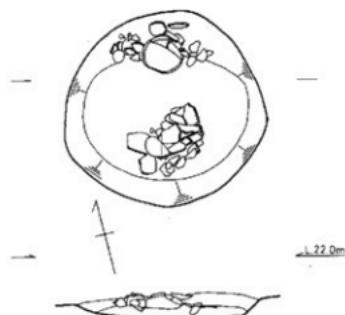


Fig. 119 縄文土器出土土坑 (K30) 実測図 (縮尺1/20)

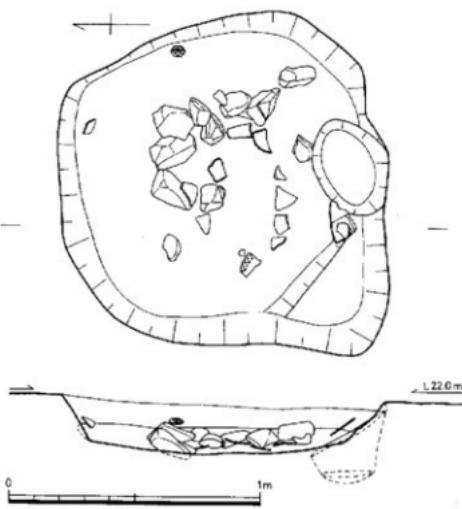


Fig. 120 第1号土坑 (P1) 実測図 (縮尺1/20)

Tab 27 瓦棺墓一覧表

No	棺の規模	形 式	合わせ口の方法	形 態	方 位	傾 斜	備 考	
1	小児	單	—	裏	N-8°-W	ほぼ水平		
2	小児						口縁部付近の10数片の破片が残存する。墓壇も削平される。	
3	小児	合わせ口	接口	裏+裏	N-124°-W	30°	上裏を削られる。底部欠損。	
4	小児	單	—	裏	N-14°-E	ほぼ水平		
5	小児	合わせ口	接口 <small>?</small> 口	鉢+裏 (墓N-103°-W)	N-75°-W	74°	上裏(鉢)が下裏内に落ち込んでいる。 破片、詳細不明。墓壇をK9の墓壇に切られる。	
6								
7	小児	單	—	裏	N-14°-W	10°	上面を削られる。	
8	小児	單	(と思われる)	—	裏	N-114°-W	45°	上部(口縁)を削られる。K9の墓壇を切る。
9	成人	單	—	裏	N-78°-W	5°	墓壇をK8に切られる。K6→K9→K8	
10	成人	合わせ口	接口	鉢+裏	N-112°-E	ほぼ水平	K11と切り合っているが、同時に邊縫きが施された。時断続はある程度認められない。	
11	小児	合わせ口	覆蓋	脊+裏	N-112°-E	ほぼ水平		
12	成人	單	—	裏	N-176°-W	20°	完形。墓壇を2段に掘り込む。下段の横穴に墳堵を挿入。	
13	成人	合わせ口	接口	鉢+裏	N-104°-E	ほぼ水平	上面を削られる。	
14	成人	單	—	裏	N-104°-W	ほぼ水平	上面を削られる。口縁部に粘土。	
15	成人	合わせ口	接口	鉢+裏	N-78°-W	ほぼ水平	上面を削られる。	
16	成人	合わせ口	接口	鉢+裏	N-111°-E	12°	上面(特に上裏)を削られる。上裏(鉢)の底部。横穴に下壁を挿入。	
17	小児	單	—	裏	N-118°-E	3.5°		
18	小児	合わせ口	接口	裏+裏	N-14°-E	2°	上面を削られ。頭部の一部分のはかは欠損。詳細不明。丹塗り。	
19	小児	?	?	?	?	?		
20	小児	合わせ口	唇口	鉢+裏	N-92°-W	ほぼ水平	上面を削られる。特に上裏(鉢)の状態が悪い。	
21	成人	單	—	裏	N-31°-W (推定)	ほぼ水平 (推定)	試掘溝にかかり削られる。底部も含め約5/6欠損。	
22	成人	合わせ口	接口	裏+裏	N-99°-E	7.5°	試掘溝にかかり削られる。上壁の欠損部分が多い。底盤欠損。	
23	成人	合わせ口	唇口	裏+裏	N-92°-E	ほぼ水平	上壁口縁部打ち欠き。上面を削られる。	
24							頭部の一部を陥き他は欠損。詳細不明。	
25	成人	單	—	裏	N-23°-E (推定)	38° (推定)	上面を削られる。口縁部欠損。洞部約半欠損。	
26	成人	單	—	裏	N-167°-W	ほぼ水平	上面を削られる。弓強欠損。	
27							小破片。詳細不明。	
28	成人	單	—	裏	N-88°-W	ほぼ水平	上部欠損。裏部欠損。口縫部・頭部欠損。底盤欠損(上部は25cm×88cm、深さ7cmの割り込みがある)。	
29	成人	合わせ口	接口(?)	?	N-111°-E	ほぼ水平 (推定)	上面を削られる。上・下ともに残りはよくないが、特に上裏は欠損部分が多い。	
30							81ページ-82ページ参照	
31							破片。詳細不明。	
32	小児	單	—	裏	N-110°-E	ほぼ水平	底部は試掘溝にかかり欠損。上面も欠損。	
33	小児	單	—	裏	N-93°-W	ほぼ水平	口縫側を溝に切られる。	
34	小児	(と思われる)	—	裏	N-33°-E	ほぼ水平	試掘溝にかかり、口縫側欠損。	

7. 第IV地点の調査

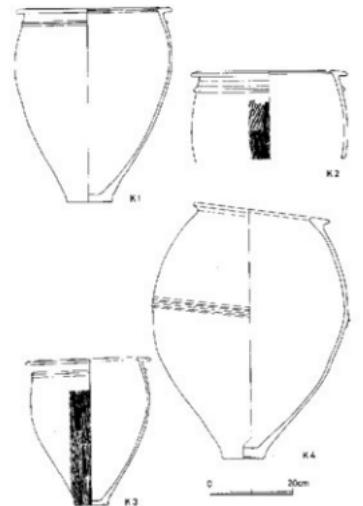


Fig. 121 第1・2・3・4号墓実測図(縮尺1/12)

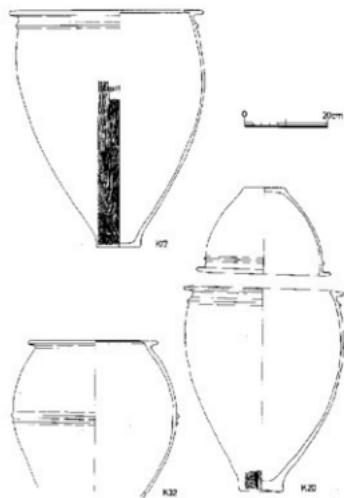


Fig. 122 第5・7・8号墓実測図(縮尺1/12)

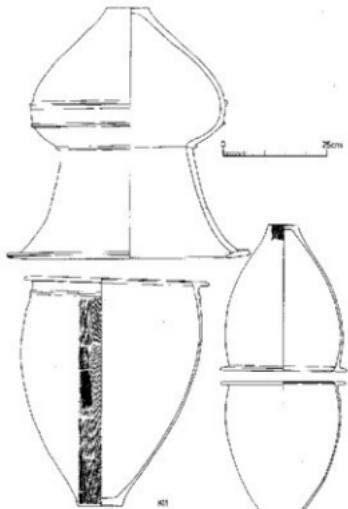


Fig. 123 第11・18号墓実測図(縮尺1/12)

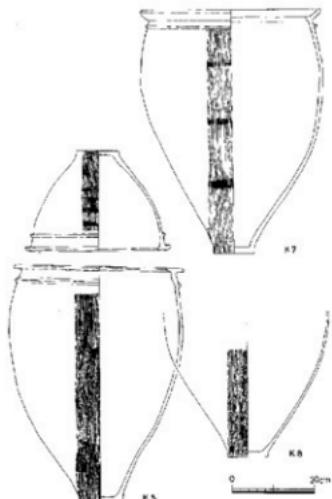


Fig. 124 第17・20・32号墓実測図(縮尺1/12)

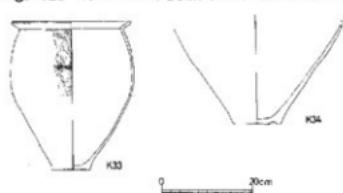


Fig. 125 第33・34号墓実測図(縮尺1/12)

④ 銀棺蓋

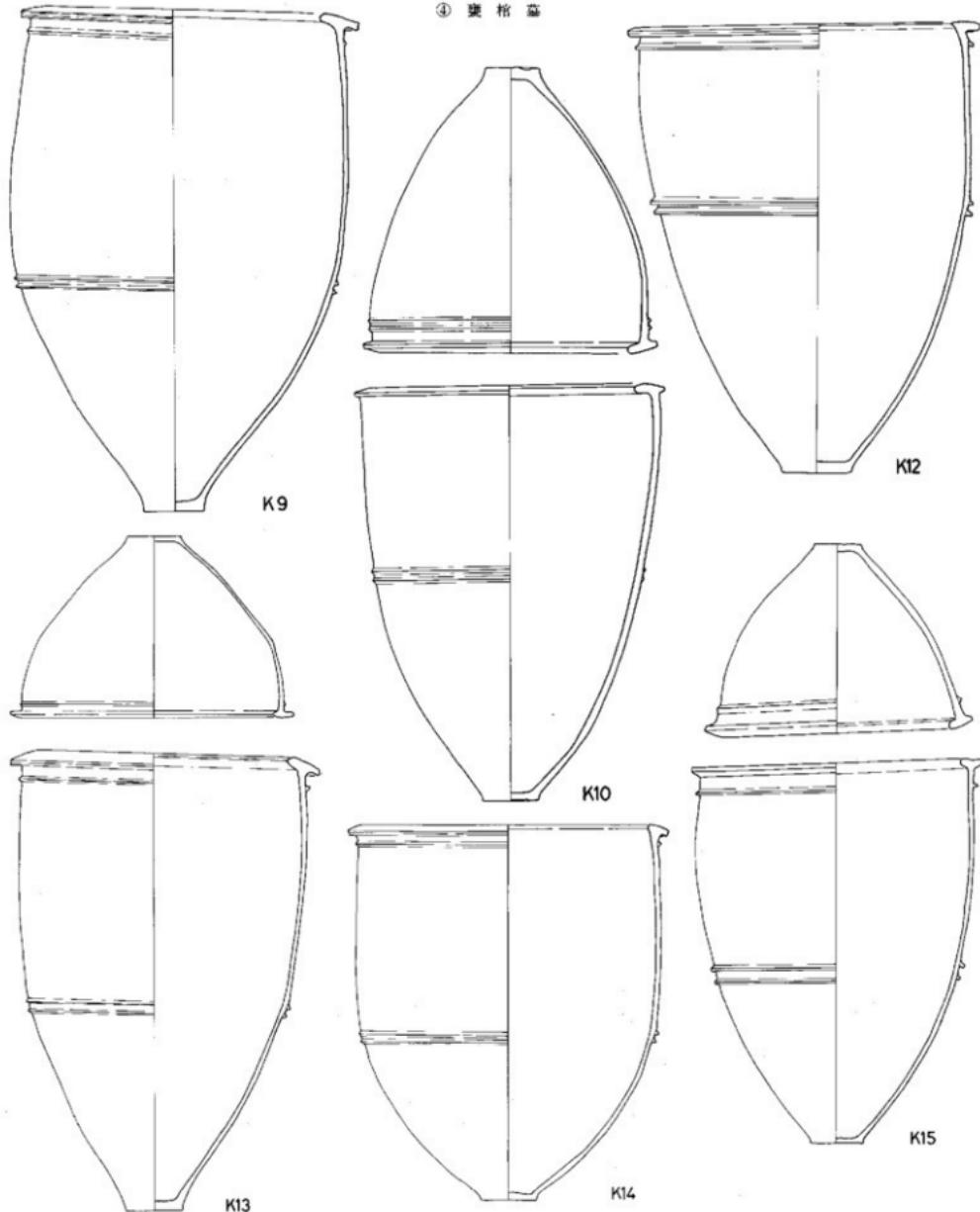


Fig. 126 第9・10・12~15号銀棺実測図 (縮尺1/12)

0 40cm

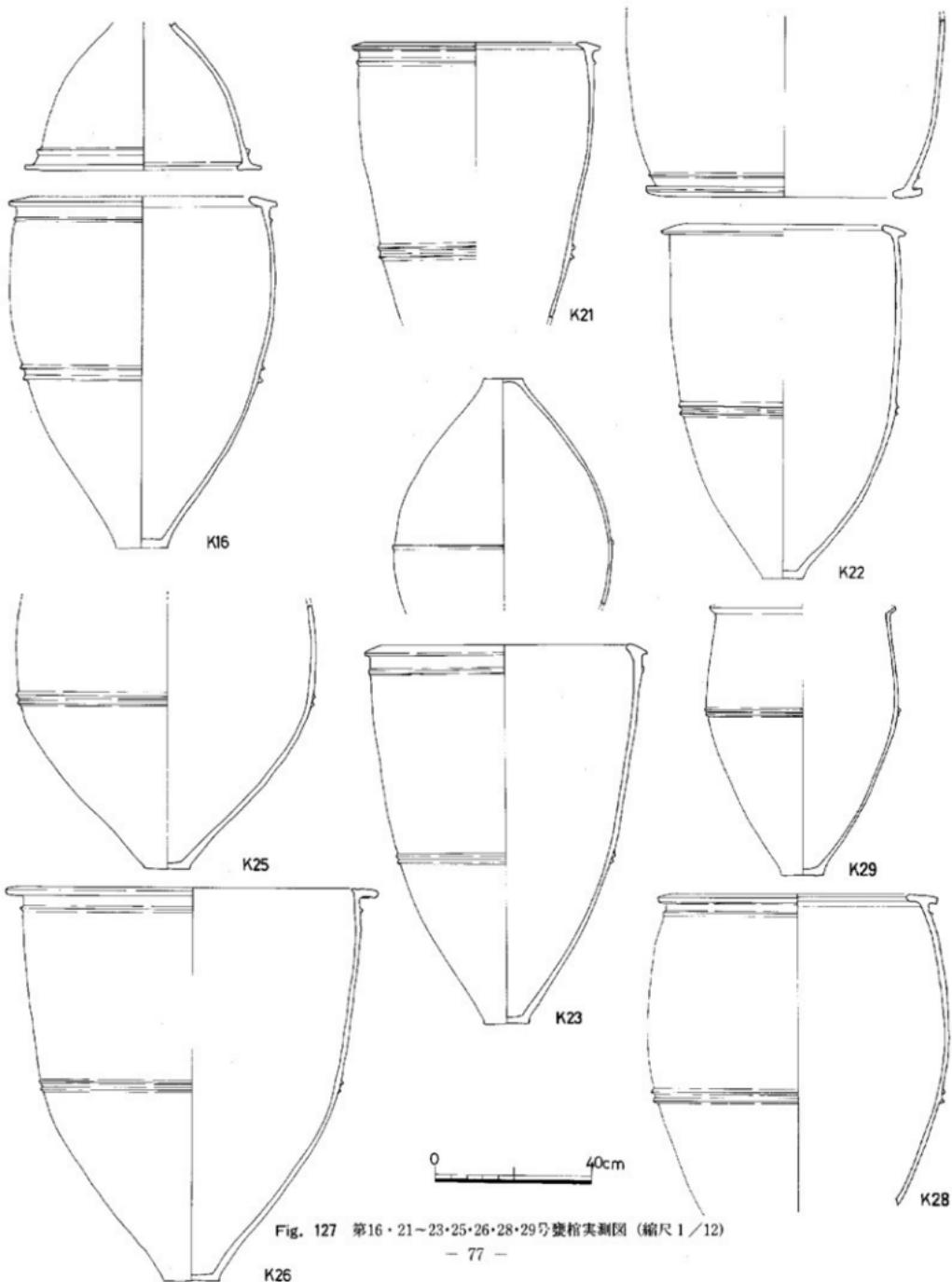


Fig. 127 第16・21~23・25・26・28・29号陵棺実測図（縮尺1/12）

Tab. 28 豊棺觀察一覧表

№	形 式	形 傳	口 径(mm)	深 刻(大) (mm)	基 準(mm)	幅 高(mm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 彩	地 手	地 模	備 考
1	小 児 足 握	實	37	26.9	16.1	46.7	直し平口縫。口縫下に内凹凸1条。頭部は内凹から外凸へと変化する。頭部は中位と口縫の中央。口縫と口は少し高い。	腹壁は堅厚。腹壁底の確認不可。	外：淡褐色 内：黃褐色	移動+小石(1~5mm)を多量に含む。	真	口縫部・頭部の一部欠損。
2	小 児 足もらく腰椎		37.7	37.7			逆し平口縫。口縫下に内凸凸1条。口縫と腰椎は直位と腰椎の中央。口縫と口は少し高い。	口縫底-凸山は複数ナメ。頭部ハナナメ。腰椎により不明瞭。	外：淡褐色 内：白黄色	移動の小石多量含む。やや中。	真	腹部の透視。 腰椎底は透光光源による透光像。
3	小 児	實										口縫部-腹部の一部を残す後染。
	合わせ口	實	29.2	27.8	7.5	35.5	直し平口縫。口縫下に内凹凸1条。腰椎底から1cmと150.5mmの前位にはよく腰椎底がかかる。腰椎底は中位から外位へと変化する。	口縫底-凸山は複数ナメ。八角形-腰椎底を有する位置まで腰椎の外側の上位から腰椎底へと変化する。それでは腰椎底は口縫下に残っている。	淡褐色	小石を多量に含む。腰椎セラミック。	真	
4	小 児 足 握	實	32.7	46.2	10.1	(61.7 (脊高-腰高))	頭部のみを少し直し平口縫。頭部は腰椎底で腰椎底に内凹凸1条。腰椎底は中位から外位へと変化する。	腰椎底-凸山は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。表面は腰椎底から腰椎底へと変化する。腰椎底は腰椎底の上位から腰椎底へと変化する。	淡褐色	移動+比較的の大きい小石を多量に含む。	真	口縫部・頭部は残存。 腰椎底はやや多い。
5	小 児	蘇	45.4		9.9	23.9	内凹のみを少し直し平口縫。頭部は腰椎底で腰椎底に内凹凸1条。腰椎底は中位から外位へと変化する。	腰椎底-凸山は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。表面は腰椎底から腰椎底へと変化する。腰椎底は腰椎底の上位から腰椎底へと変化する。	淡褐色	移動を多量に含む。	真	腰椎底-腰椎部は残存。 腰椎底はやや多い。
	合わせ口	實	41.3	41.8	38.5	57.3	平底丁字口縫。口縫下に内凸凸1条。腰椎底は腰椎底で中位より上方に内凹口縫とは少し高い。	口縫底-腰椎底のため腰椎底の腰椎底不可。腰椎底は0.5~1cmを腰椎底としたハナナメ。	淡褐色	1~2cmの大粒の小石を多量に含む。腰椎底。	真	
6												鏡片、鏡不可。 眞暗不明。
7	小 児 足 握	蘇	43.4	42.7	9.6	38.8	内凹する平口縫。口縫下に内凹凸1条。腰椎底は腰椎底で中位より上方。口縫と口は少し高い。	口縫底-凸山は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。表面は腰椎底から腰椎底へと変化する。腰椎底は腰椎底の上位から腰椎底へと変化する。	淡褐色	移動を多く含む。腰椎底。	真	上部を残され、部分欠損。
8	小 児 (と思われる)	實			9.6	腰椎底 以降	脇骨の6mm。深い。	外側ハナナメ。基準1cm位。	淡褐色	1~2cmの大粒の小石を多く含む。腰椎底。	真	上部削除。(以降-1)
9	成 人	實	72.6	22.8	13	109.8	外に傾斜する丁字口縫。口縫下に1条。腰椎底は腰椎底で三つの内凹凸2条。腰椎底から1cm位の3cm以内(約3.4cm)の前位。	腰椎底-腰椎底は複数ナメ。内凹ナメ。腰椎底は腰椎底で腰椎底に傾斜して不規則。おそらくナメナ。				自然的的。尻部上半を削除欠損。
10	成 人	蘇	66	60	11.6	61.6	外に傾斜する丁字口縫。口縫下に内凹凸2条。腰椎底から1cm位の3cm以内(約3.4cm)の前位。	口縫底-凸山は複数ナメ。内凹ナメ。腰椎底は腰椎底で腰椎底に傾斜して不規則。おそらくナメナ。	淡褐色	移動を多く含む。腰椎底。	真	口縫の一部を欠くが、口縫部完存。
	合わせ口	蘇	66.6	54.4	12.2	91	内凹-内凹のひきい丁字口縫。腰椎底は腰椎底で腰椎底に内凹凸2条。腰椎底は腰椎底で腰椎底に傾斜する。腰椎底は腰椎底で中位。	口縫底-腰椎底ナメ。腰椎底は全周崩壊。	淡褐色	4~5cmの大粒の小石を多く含む。	真	
11	小 児	蘇	58.2	46.4	29	61.5	丁字口縫。腰椎底の後腰椎。腰椎底、腰椎底、腰椎底、腰椎底、腰椎底の内凹凸2条。腰椎底、腰椎底、腰椎底、腰椎底、腰椎底の内凹凸2条。腰椎底、腰椎底。	口縫底より腰椎底は複数ナメ。(腰椎底のため不規則)	淡褐色	腰椎底の小石(2~3mm)を多量に含む。	真	
	合わせ口	蘇	55.5	42.3	30.5	56.3	逆し平口縫。口縫下に内凸凸1条。腰椎底は腰椎底で中位より上方。腰椎底やや凹陥。	口縫底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。2種類のハナナメ。腰椎底ナメ。	淡褐色	腰椎底の腰椎底(1~2mm)を多量に含む。	真	腰椎底欠損。

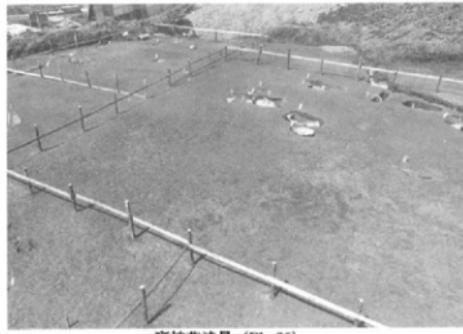
Tab. 29 豊棺觀察一覧表

№	形 式	形 傳	口 径(mm)	深 刻(大) (mm)	基 準(mm)	幅 高(mm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	色 彩	地 手	地 模	備 考
12	成 人 足 握	實	72.4	70.8	14.4	98.2	口縫底がややアーチ状の内凹の腰椎底。腰椎底はハナナメ。腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	腰椎底-凸山。腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底に多く含む。ナメや内凹側。	真	完形。
13	成 人	蘇	70	54.6	13.3	44.5	丁字口縫の腰椎底上位。口縫下に内凹凸1条。腰椎底は腰椎底の上位。	口縫底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。	淡褐色	移動+1cmの大粒の小石を多量に含む。	真	腰椎底は腰椎底のため不規則が多い。
	合わせ口	實	75.2	70.2	13.6	103.2	外に傾斜する丁字口縫。腰椎底は腰椎底で腰椎底に内凹の2つの凸凹。腰椎底は腰椎底で中位より下方。腰椎底は腰椎底。	腰椎底-腰椎底。腰椎底は複数ナメ。	淡褐色	移動+2~3cmの大粒の小石を多量に含む。	真	腰椎底は腰椎底のため不規則。
14	成 人 足 握	實	68.8	68	13.4	92	ウナギに腰椎底の後腰椎。腰椎底、腰椎底、腰椎底、腰椎底の内凹凸2条。腰椎底、腰椎底、腰椎底、腰椎底の内凹凸2条。	腰椎底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底に多く含む。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	真	腰椎底が少く腰椎底はかなりアーチを有する。腰椎底は腰椎底のため不規則。
15	成 人	蘇	65.8	60.6	11.2	47.2	外に傾斜する丁字口縫。口縫下に内凹凸1条。	腰椎底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底に多く含む。ナメや内凹側。	真	腰椎底は腰椎底のため不規則が多い。
	合わせ口	蘇	70.6	67.4	12.6	94.2	中位と下位とも腰椎底のひきい丁字口縫。腰椎底は腰椎底で腰椎底の内凹の2つの凸凹。腰椎底は腰椎底で中位より下位。腰椎底は腰椎底。	腰椎底の腰椎底として腰椎底は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。	淡褐色	腰椎底に多く含む。ナメや内凹側。	真	腰椎底は腰椎底のため不規則。
16	成 人	蘇	69.2	54.6	腰椎底 以降	38.4	中位のウナギに腰椎底の丁字口縫。腰椎底は内凹凸1条。	腰椎底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底と1~3cmの大粒の小石を多量に含む。	真	腰椎底は腰椎底のため不規則。
	合わせ口	蘇	67.6	67.4	13	90.8	外に傾斜し、内凹の腰椎底が大きい丁字口縫。腰椎底は腰椎底で腰椎底の内凹の2条。腰椎底は腰椎底で中位の2つの凸凹。腰椎底は腰椎底で中位より上位。	腰椎底-凸山。腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底と1~3cmの大粒の小石を多量に含む。	真	腰椎底は腰椎底のため不規則。
17	小 児 足 握	實	46.7	45.1	10.5	57.3	平均する丁字口縫。口縫下に内凹凸1条。腰椎底は腰椎底で腰椎底の内凹の2つの凸凹。腰椎底は腰椎底で中位の2つの凸凹。	腰椎底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底に少量含む。ナメや内凹側。	真	
18	小 児 合わせ口	實	30.5	28.2	7.4	35.5	手筋なし逆し平口縫。口縫なし。腰椎底やや内凹。腰椎底は腰椎底と中位の中間。	腰椎底は複数ナメ。腰椎底はハナナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底と1~2cmの大粒の小石を多量に含む。	真	腰椎底と腰椎底が接合せず腰椎底を合致。
19	小 児											上部削除られ、腰椎の一部分の殆ど欠損。弁蓋り。
20	小 児	蘇	32.4	28.8	9.9	21	平均する丁字口縫。口縫下に内凹凸1条。腰椎底は腰椎底で腰椎底の内凹の2つの凸凹。	腰椎底-腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	淡褐色	腰椎底と1~2cmの大粒の小石を多量に含む。	真	腰椎底と腰椎底が接合せず腰椎底を合致。
21	成 人 足 握	實	46.3	160	71.6	腰椎底 以降	内に傾斜する丁字口縫。口縫下に1条。腰椎底は腰椎底で腰椎底の内凹の2つの凸凹。	腰椎底は複数ナメ。腰椎底は内凹側と口縫底にアーチ。	外：淡褐色 内：淡褐色	腰椎底と1~2cmの大粒の小石を多量に含む。	真	約5.6度傾斜。腰椎底なし。 腰椎底-腰椎底で腰椎底は複数ナメによる規定。

7. 第IV地点の調査

Tab. 30 豊棺觀察一覧表

No.	形 式	形 型	口 径 (cm)	周 围 大 体 (m)	底 径 (cm)	基 高 (cm)	形 型 の 特 徴	手 法 の 特 復	色 調	知 土	性 質	備 考	
22	成 人 合わせ口	圓	71				外に傾斜する丁字口縫。口縫下に三角凸巻き2条。	口縫部一凸巻は横ナギ。側面は擦滅。内面はナギ。	淡褐色	砂粒・北側約1mの大きい石を多量に含む。	良	口縫が広。下部は若干埋めするのみ。底部欠損。	
		圓	63.4	60	10.8		外に傾斜する丁字口縫。側部小底よりや下の方に三角凸巻き2条。	口縫部横ナギ。側面は擦滅。調整状不明。	赤褐色	粗かい砂粒を多量に含む。	良		
23	成 人 合わせ口	圓		57	10.1		口縫部口も大き。側部最大径を測る位置に29cm (M字口縫)。口縫上1条。	表面は擦滅。調整状不明。	黄褐色	砂粒。2~3mmの大いの石を多量に含む。	良		
		圓	72.4	69.7	11.3		外に傾斜し、内側への突出が少ない堅みのあるM字口縫。側部横ナギ。側部小底よりや下の方に三角凸巻き2条。	口縫部一凸巻。側面凸巻は横ナギ。先は内面とモナチ。	淡褐色	側部の石粉未状の砂粒を多量に含む。	良		
24												側部の一部を除き他は欠損。詳細不明。	
25	成 人 单 種	圓		75.6	11.3		側部最大径を測る位置よりや下方に三角凸巻き2条。	凸巻は横ナギ。他は不明。	黄褐色	粗粒の石を多量に含む。	良	口縫部欠損。側部約1/2欠損。	
26	成 人 单 種	圓	69.5	68.4	14		平底で口縫部がわずかに外傾する逆L字口縫。口縫下に1条。側部は中位に2条の三角凸巻き。	口縫部。口縫下凸巻。側部凸巻横ナギ。側部と口縫下凸巻の先は能力丸のワナゲの後残ナギ。	淡褐色	1mmの大いの石粉を多量に含む。	良	口縫部欠損。横に疑似隙あり。他はもう少し小さくなると思われる。測定期は復元による。	
27												小破れ。詳細不明。	
28	成 人 单 種	圓	68.4	72.8			若干外に傾斜する丁字口縫。口縫下に1条。側部に2条の三角凸巻。側部三角凸巻は側面往來あたりに位置していると思われる。	表面擦滅。調整状不明。	淡褐色	砂粒・小石を多量に含む。	良		
29	小 児 合わせ口						(便場の実測図によると) 逆L字口縫。口縫下に三角凸巻1条。					復元不可。	
		圓	45.3	46.6	10.4	60.6	口縫は横ナギ1条を出すのみで調整ではないが、沿田式のような形態を含まるものと思われる。側部最大径を測る位置に三角凸巻2条。	表面擦滅。調整状不明。	深茶色	砂粒・小石を多量に含む。	良	上面を削ら様な部分少ない。	
30	興 文												
31												破片。詳細不明。	
32	小 児 单 種	圓	31.1	39.3			平底な逆L字口縫。側部最大径を測る位置に三角凸巻2条。	口縫部と凸巻横ナギ。側面擦滅。	淡褐色	砂粒を多量に1~3mmの大いの石を多く含む。	良	側部欠損。側部約1/2欠損。	
33	小 児 单 種	圓	25.7	26.5	8.1	32.5	く口縫。凸巻なし。側部最大径は中位より牛牛上方。	口縫部横ナギ。側面はハサ目。上には残る。下には擦滅。内面擦滅。調整状不明。	赤褐色	粗粒の石をやや多く、砂粒を少量に含む。	良	底部に穿孔のあった可能性あり。	
34	小 児 (と思われる)	圓			10.6		埋設基高 22.5	埋設に約2cm、深さ0.5mの凹みがある。	底面付近にハサ目。側面の底面付近にハサ目の痕跡。先は擦滅。調整状不明。	淡褐色 底面は黒褐色	砂粒を1~3mmの大いの石を多量に含む。	良	口縫部・側部上半欠損。



豐棺墓遠景 (Ph. 20)



豐棺墓遠景 (Ph. 21)



Fig. 128 祭祠造構 (Ph.22)



Fig. 129 祭祠土器実測図 (縮尺1/3)

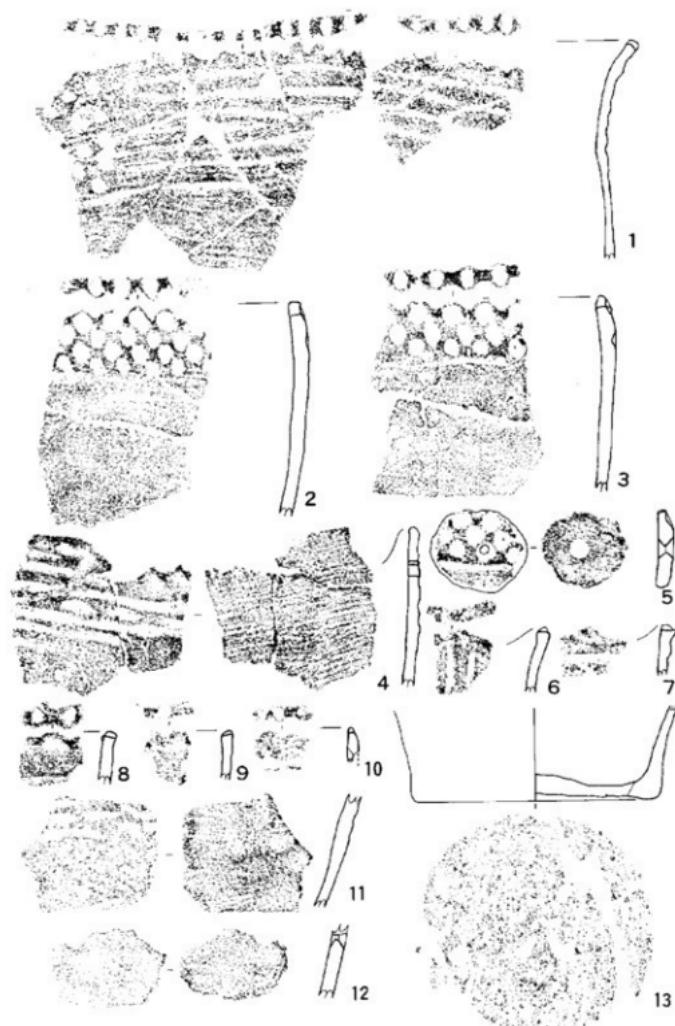


Fig. 130 P1・K30内出土七器実測図と拓影 (縮尺1/3)



Fig. 130-2 出土した縄文土器 (Ph.23)

8. その他の遺物

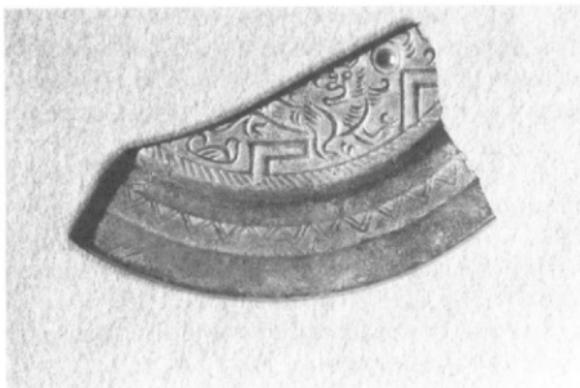


Fig. 131 方 格 規 距 鏡 片 (Ph.24)

ナイフ形石器 剥片の側縁片側を刃部として利用し、側縁片側を表裏両面から細かく剥離して、刃部には直角な面をもつように調整している。石材は黒耀石である(1)。

網文式土器 胎土に滑石の粒子を多量に含ませ表面は非常に滑らかな肌触りを有す。全て破片の集合(Fig. 130) 体で検出されている。口縁部が外半し口唇部に波状に小さな棒で凹凸を施すもの(1)、直立する口縁を口唇部で少々内弯させ、口縁に指押による凹状の圧痕を有するもの(2、3、4)。底部は平底である(13)。胴部全体は横方向に条痕が施されている。また口縁部を利用し中央部を穿孔された円形の紡錘車(5)も出土している。土器様式は縄文時代前期の轟式土器ないしは曾畠式土器に比定される。出土地点は第IV地点弥生時代廬棺主体の共同墓地K30土坑に遺存した一括遺物である。

石 錐 (Fig. 132) 全て打製無茎石錐である。基部を大きく抉り側縁基部とともに表裏両面を剥離して調整したもの(2・3)、基部の抉りは小さく、雑ではあるが側縁基部と表裏両面を剥離調整するもの(4~9)、側縁を長く保ち先端を鋭角に作り出し、さらに側縁を押圧剥離で鋸歯風に調整したいわゆる鋸歯錐(10、11)、先端を鋸く保ち、基部が抉りのない直線で三角形を保ち、表裏を丁寧に剥離調整するもの(15)、原料とした剥片の擗理面片側を生かし片面のみを剥離調整したいわゆる剥片錐(12~14、16)、石材からくる加工の難しさから剥離調整が雑なもの(17~19)等々がある。石材は17から19が安山岩質系と思われるが他は黒耀石である。使用年代は縄文時代前期から後期に比定される。出土地点は遺跡全城である。

弥生時代 石斧 (Fig. 133) 弥生時代の住居址から出土しているが形状が縄文時代的であるところから今後の検討課題である。

石包丁 (Fig. 134) 石包丁のほとんどは第II地点弥生時代後期集落地点ないしは住居址内出土である。後期は鉄器の時代である。従来石包丁には穀刈具の機能が与えられているが、この時代まで残存することは第III地点の方形周溝造構内に見る石包丁の存在が祭祀具的であるところから、この時代の石包丁の機能の再考が図られよう。

砥 石 (Fig. 136 ~138) 砥石は20点検出され、主に第II地点の住居址に集中している。砂岩質のものが粗研ぎ用で、硬質粘板岩質のものが最終研磨用に使用されたと考えられる。石材等の観察については後日の課題とする。砥石の多量な出土は弥生時代後期鉄器社会の定着性を想わせる。

ガラス玉 (Fig. 130) 16点の出土を見る。径2.8ミリメートルから7.5ミリメートルまで大小いろいろある。色は明青色、明青緑色、明褐色と多様である。全て第II地点住居址内出土である。

金属器 (Fig. 139) 10は青銅製の鍔先か鋤先の破片と思われる。2は鉄製の鍔先、9は鉄斧、7は鉄鎌で、他は鉄製工具であるが製品名の判断はつかない。

銅鏡片 (Fig. 131) 方格規矩鏡片である。幅が3.5センチメートル、長軸6.2センチメートルを測る。厚さは外縁で4.0ミリメートル、内区で2.2ミリメートルを測る。外縁に四帯双線三角文を配し、内区に白虎の姿が見える。内区白虎を折る長辺端は研磨されている。出土は第II地点、遺構は覆土中で不明である。

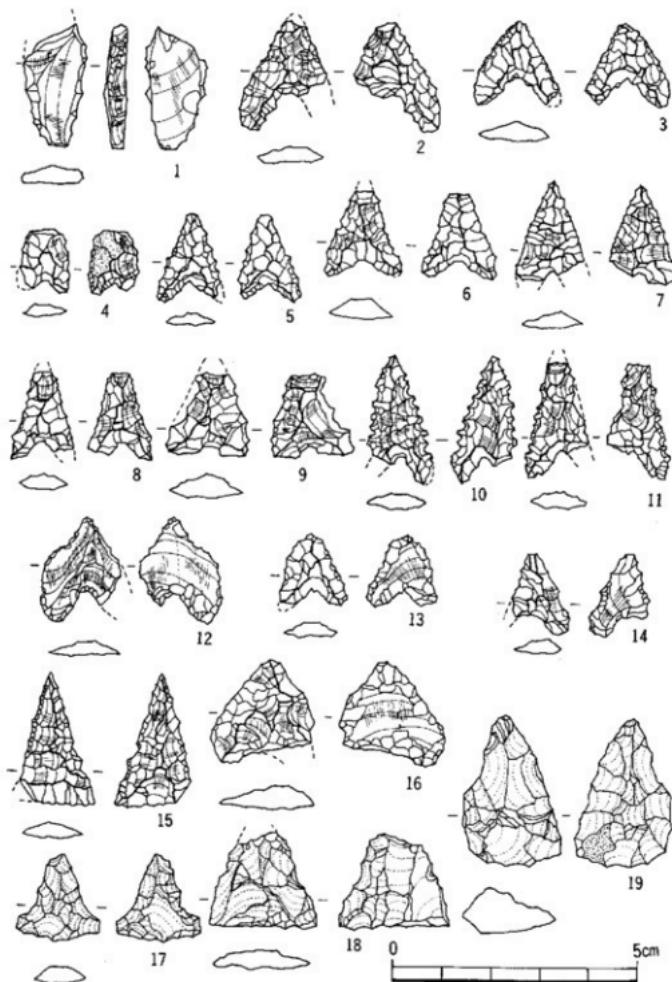


Fig. 132 ナイフ形石器・石礫実測図 (縮尺 1 / 1)

Fig. 136 第II地点出土砾石尖端图 (縮尺1/5)



Fig. 133 石斧尖端图 (縮尺1/4) 1・4・5(13)
2 (繁洞遺跡とK30の中間)、3 (環溝)

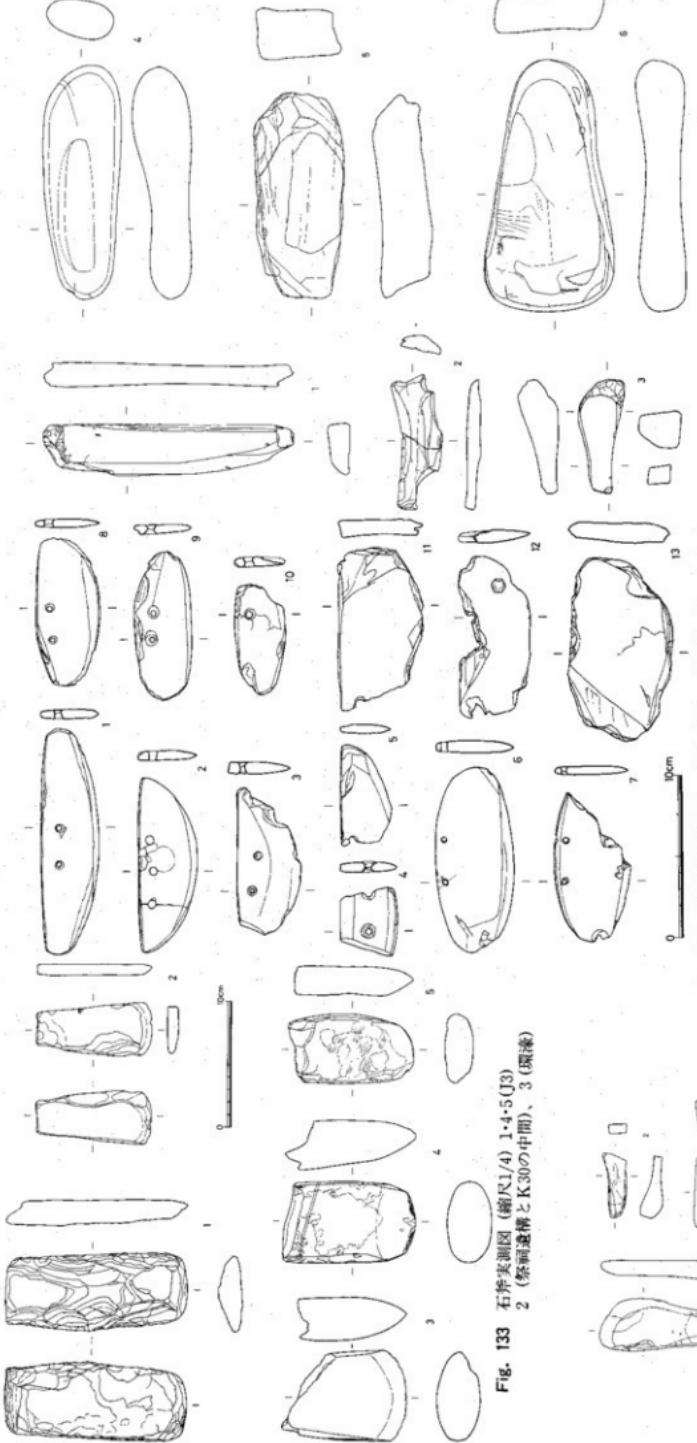
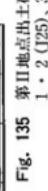


Fig. 134 石刀尖端图 (縮尺1/5) 1(17), 2(22), 3(11)地点點
4・5(15) 6(GS-11西面) 7(環溝) 8(21), 9-12(17), 10(12), 11(29), 13(C-2)



Fig. 135 第II地点出土砾石尖端图 (縮尺1/5)

1・2(25), 3・4(13), 5(132), 6(33)



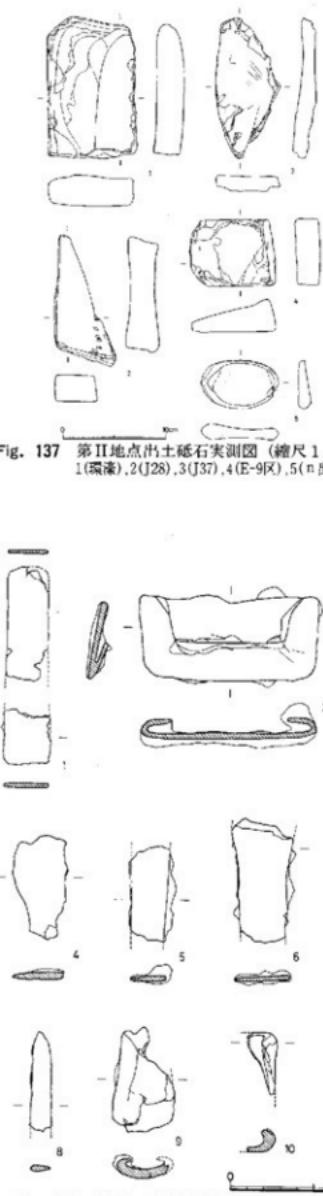


Fig. 137 第II地点出土砾石实测图(縮尺1/5)
1(環),2(J28),3(J37),4(E-9区),5(n出土・第IV地点)

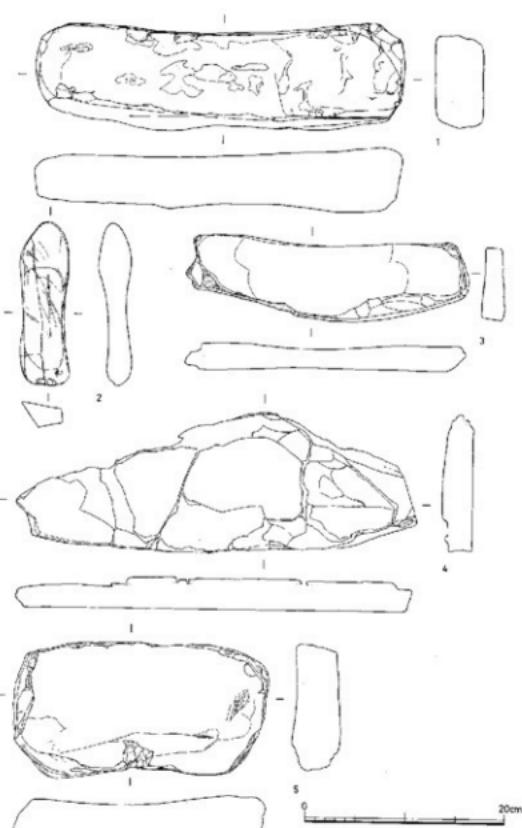


Fig. 138 第I・II地点出土砾石实测图(縮尺1/5)
1(J1),2(J2),3(J3),4(J12),5(J17)

Fig. 139 鉄器・青銅実測図(縮尺1/5)

Tab. 31 ガラス玉計測表

	地 上 部 寸 法	底 部 寸 法	厚 さ (mm)	T. 底 (mm)	球 質	色	偏 光	偏 光 率	偏 光 強 度	厚 さ (mm)	底 部 厚 さ (mm)	丸 底 強 度	材 質	色	偏 光
1	J15 4~4.5	4.2	1.3~2.0	ガラス	明青色 断面不整三角形	9	J17 4.5	4.0	2.5	ガラス	明青色				
2	△ 3.5~4.0	2.5	3.0	△	△	10	J18 4.0~5.0	3.9	1.5	△	△				
3	△ 3.5~2.9	1.2~1.5	1.5	△	△	11	△ 6.5~7.5	6.0	2.0	△	△				
4	△ 4.0	3.5	3.0	△	明青色	12	J27 5.0~5.2	4.2	1~1.8	△	△				
5	△ 3.2~2.4	2.0	1.0	△	明青色	13	△ 5.0~5.8	3.8	2.0	△	△				
6	J17 4.5	4.1	1.5	△	△	14	△ 4.5	3.5	1.5	△	△				
7	△ 4.5~5.5	5.5	3.5	△	明青色 断面不整四角形	15	△ 4~4.2	2.5~3.2	1.5	△	明青色				
8	△ 2.8~3	1.5	1.0	△	△	16	△ 4.5	3.1~3.7	1.7	△	△	内壁が均一なら 丸底下に細縫			

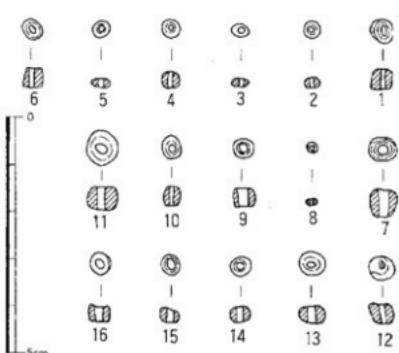


Fig. 140 第II地点住居址内出土ガラス玉実測図(縮尺1/1)
1~5(J15),6~9(J17),10,11(J18),12~16(J27)



作業員のみなさん (Ph.25)

後 記

遅きに失した感のある蒲田水ヶ元遺跡の発掘調査報告書の執筆を終え安堵しております。

振り返り見まするに、昭和50年（1975）当時、福岡市教育委員会の発掘調査体制は発足から7年目を迎えておりましたが、開発側の埋蔵文化財の発掘調査の要請に充分答えられる程整備されておりませんでした。

事前協議の席で開発側からの市教委の行政能力に対する厳しい糾弾に等しいお呵りを受けた事を昨日の出来事のように憶えております。

先述の如く調査会を発足させる訳ですが、当時福岡市職員の採用待ちで熊本大学考古学を卒業された中野和夫さんに試掘調査をご依頼し、熊本大学の考古学研究室の学生さんにもお手伝い戴いた訳であります。学生さんには本調査までお付き戴く訳ですが、夏休みに行なわれた熊本大学主催の「南島発掘調査」を差し置いて本遺跡の調査にご尽力頂きました。白木原教授にご迷惑をおかけしました。慎しんでお詫び申し上げます。

調査会発足にあたって、大変なご指導を戴いたのが、当時の福岡県文化課長、今は亡き藤井功さんであります。藤井さんは東京教育大学出身で、ご紹介戴いたのが、後輩の松浦有一郎さんです。松浦さんは桐朋学園大学の講師の身分でしたが、東京の教え子を派遣して戴きました。藤井さんは勤務ご多忙な中、よく現場に足を運んで、ご指導戴きました。厚い胸にくつついたあの笑顔が今も脳裏に焼き付いて離れません。本当に感謝の念で一杯であります。合掌。

兎に角、人と人の出会い、人と人のつながりが、調査会を発足させ今日を迎えた訳であります。調査を支えてくれた教委関係者、調査員、作業員のみなさん、本当にご指導ご協力ありがとうございました。この報告書をネタに一杯酒盃を交えましょう。末だ青春忘れ難き（折尾記）。

付録1. 香椎A遺跡第1次

香椎宮の西北西0.5キロメートル、香椎川の北台地に本地点はある。

本遺跡の調査原因は個人の共同住宅建設にあって、調査費は発掘調査費用を原因者、整理報告書の費用は原因者の負担能力を超越したものであるところから行政の責任において予算化することとし、蒲田水ヶ元の末尾を借用することとした。

本地点の調査面積は幅約12メートル、長さ約44メートルの約528メートルである。本遺跡は香椎川の北側に位置し、香椎川の微河岸段丘の台地に形成される。本遺跡の北端に区画の意企のもとに設計されたと思われるほど東西の溝が見え、その溝と香椎川の間に集落の痕跡を残す柱穴群が存在する。柱穴群を建物として復元するために組織的に拾おうするが困難を窮め、建物の軒数は把握できない。

遺跡から出土する遺物は土師器皿がその大多数でその中に少々中国産の輸入陶磁器が含まれる。土師器皿から見て、本集落の営まれた時代は12世紀代であろう。

本遺跡の性格は香椎宮の門前町として認識される。香椎宮の創建神龜元年(724)以来、中央の庇護のもと、権勢を誇ったと思われるが、本遺跡の有り方はその末端の姿を表しているものであろう。

本遺跡の類似遺跡は「香椎A 2次」福岡市埋蔵文化財調査報告書第317集大庭康時編があって、遺跡の報告はもとより香椎宮の沿革についても触れられている。参照されたい。

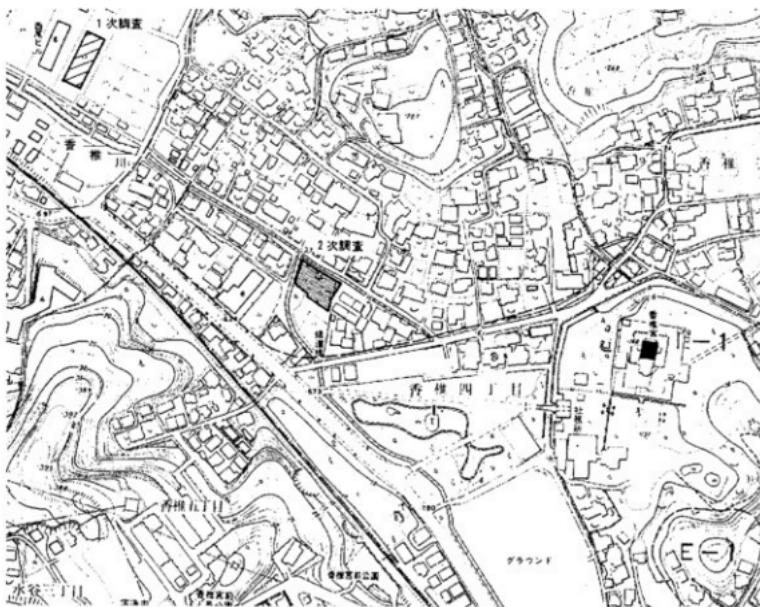


Fig. 1 香椎A遺跡第1次調査地点位置図 (縮尺1/4,000)



Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/36,000)

- 1.香椎A遺跡 2.香椎B遺跡 3.香椎C遺跡 4.香椎D遺跡 5.香椎宮遺跡 6.城ノ越城 7.立花山城 8.耳冢古墳
9.青塚古墳 10.香住ヶ丘遺跡 11.香住ヶ丘古墳 12.唐ノ原遺跡 13.唐ノ原野添遺跡 14.上和白遺跡 15.名島城
16.名島古墳 17.多々良大平田遺跡 18.銅鉄・銅瓦鋳型出土地 19.土井遺跡 20.銅瓦鋳型出土地 21.名子道古墳



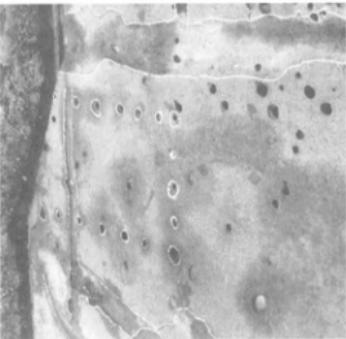
Ph. 1 通称窓景(西より)



Ph. 4 土塊と遺物



Ph. 3 井戸とその桿



Ph. 2 柱穴と溝



Ph. 5 遺跡遠景（南から）



Ph. 6 作業風景（西より）



Ph. 7 遺跡遠景（北より）



Ph. 8 遺跡遠景（西より前方香椎の森）

付録2. 梅ヶ崎遺跡

梅ヶ崎遺跡は福岡市東区梅ヶ崎にあって、博多湾の北端、そこから東へ砂嘴状に張り出し海の中道を含む、志賀島半島の根元にあたる湾岸に位置する。和白郵便局の南側、西鉄宮地岳線の東部丘陵にある。

調査原因是（株）協栄年金ホームで高齢者向けの福岡年金ホーム建設のための発掘調査である。

調査対象は遺跡全体であるが、試掘の結果丘陵の南西部の一部が遺物散布地として認められたにすぎない。本調査は遺跡散布地に10メートルかけ30メートルのトレンチを設定して行なった。

調査結果は弥生時代後期の土器群の検出を見るが、一部焼け漏れた土器があり製塩の可能性を匂わせている。本遺跡関連として「唐ノ原遺跡」福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第161・207集小林義彦編があり、参照されたい。



Fig. 1 遺跡位置図 (A-2が梅ヶ崎遺跡)

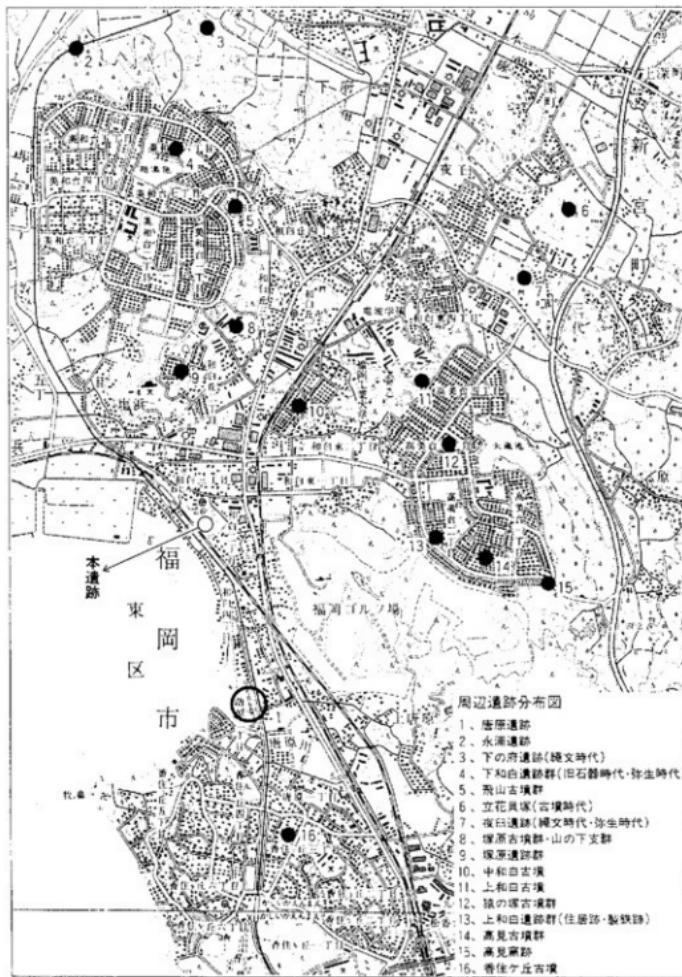


Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/25,000)



1



5



2



6



3



6

Ph. 1 道路遠景 (香住ヶ丘をのぞむ)

Ph. 2 道路遠景

Ph. 3 土器窯り

Ph. 4 道路遠景 (和白、海の中道をのぞむ)

Ph. 5 作業風景

Ph. 6 道路遠景



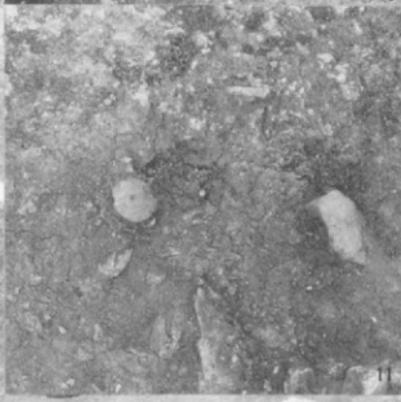
7



10



8



11



9

Ph. 7 土器溜り

Ph. 8 土器溜り

Ph. 9 土器溜り



12

Ph. 10 土器溜り

Ph. 11 土器溜り

Ph. 12 土器溜り (製塙土器?)

付録3. 博多遺跡第23次

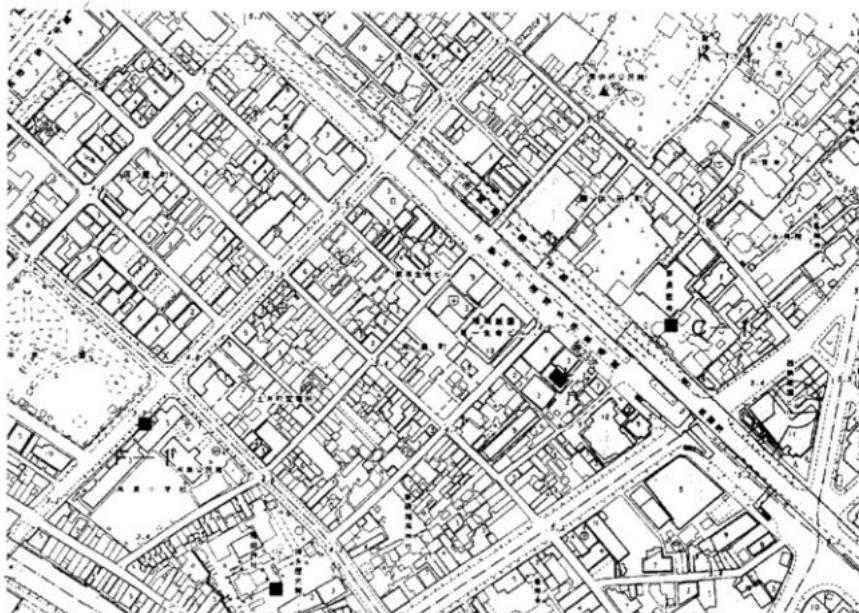
本遺跡はJR博多駅前一帯に広く展開する中世の國際都市博多を象徴する博多遺跡群の一部である。博多駅の北前方に大博通りがあって國際港博多港に延びる。この大博通りを国体通りが東西に交差している。交差する北西角が冷泉町である。その冷泉町の東南側に龍宮寺がある。龍宮寺は東長寺の大博通を股いだ前面に位置している。龍宮寺が本遺跡である。

本遺跡の調査原因是龍宮寺の本堂と墓所を解体統合して、本堂と納骨堂を新築する事にある。諸般の事情で原因者の負担する調査費用は必要最小限度であり、調査内容も制約を受ける事になる。

調査面積は10メートルかけ15メートル約150平方メートルである。

調査による検出遺構は東西、南北に区画された溝と、井戸、配石造構、それに用途不明の土坑等である。本遺跡を含む冷泉地域の遺跡を包含する文化層は厚く濃密で、中近世の文物を包蔵するものであるが、予算と時間の制約を受け検出遺構は最下層文化層のみである。南北東西の溝は小規模であることから、一般民家に伴う溝と考えたい。また遺物は中国産の輸入陶磁器が多数あって、胎土が精製された薄手の毛彫り文様を有つ碗など優品が多く、特筆に値する。

関連資料として一連の博多遺跡群福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書がある。参照されたい。



道路とその周辺(矢印が調査地点)



Ph. 1 遺跡遠景（東長寺を望む）

Ph. 2 遺跡遠景（南より）

Ph. 3 遺跡遠景（東より）



Ph. 4 遺跡遠景（南より）

Ph. 5 遺跡遠景（南より）



6



7



8

Ph. 6 井戸
Ph. 7 配石造構



Ph. 8 配石造構
Ph. 9 造路遠景(東より)
Ph. 10 造路遠景(南より)

付録後記

昭和59年（1984）当時の福岡市の埋蔵文化財緊急発掘調査の報告であります。

当時、福岡市の発掘調査体制は充分ではありませんでした。それでも埋蔵文化財に関する開発事前審査体制は未熟なりにも整っておりました。しかし調査申請に対して、体制は整わず窮屈の策としてとられたのが福岡市教育委員会の中に調査会を設けるというものでした。開発事前審査を担当する者にとって、調査費の開発者負担に関する文化財保護法の条文に自信が持てず、又調査費以上に重く申し掛かる開発者の経済的重圧、それに私ども文化財行政に訴えられる行政的、道義的責任。事前協議で譲り出される多くの課題に、文化財保護に対する理想とは裏腹に、無力感のみが私どもに蓄積されていった事は言うまでもありません。勇気を絞り出し、開発側に必要最小限度の調査期間と費用負担を願い出て、認められた結果がこの一連の調査略報であることにお許しを乞う次第であります。

現在福岡市の埋蔵文化財行政は機構も整備され、開発側のご理解とご協力にお答えするだけの機能を果しております。今後、「行政の継続」という理念をかけ、文化財保護行政に携わる者として精励していきたいと思います。

勝手ながら本略報の不完全な部分に対してご理解を戴くことをお願いし、又ご活用戴く関係各位には福岡市埋蔵文化財センターまでご足労戴くことをお願い申し上げ後記といたします（折尾記）。

**蒲田・水ヶ元遺跡：香椎A遺跡第1次
梅ヶ崎遺跡：博多遺跡群第23次**

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第491集

1996年3月31日

発行 福岡市教育委員会
蒲田・水ヶ元遺跡調査会
香椎A遺跡跡遺跡調査会
梅ヶ崎遺跡調査会
博多23次調査会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 株式会社 西 広
福岡市中央区天神2丁目8-34
住友生命福岡ビル
